

Art-tastic
Adventure

アート・アドベンチャー

ア
ト
、
て

み
や
う
、
て



国立新美術館ワークショップ記録集

2011年4月 - 2017年1月

やってみよう、アート

国立新美術館
ワークショップ記録集

2011年4月-2017年1月

国立新美術館の教育普及活動

国立新美術館では、「参加し交流し創造する美術館」をテーマに、様々な教育普及プログラムを実施してまいりました。来館者の作品鑑賞の充実を目的に、展覧会に即した講演会や各種シンポジウム、アーティストが自作を語るアーティスト・トークの開催や、子ども向けの鑑賞ガイド、美術館の役割を伝える館内マップ等の作成、また、美術館そのものを楽しんでいただく建築ツアーや、コンサート、そして若い人材の育成を目的とするインターンやサポート・スタッフの受け入れなどを行ってきました。

一方、当館が開館当初から力を入れてきた教育普及活動の根幹に、アーティストとともに幅広い視点からアートについて考え体験する「アーティスト・ワークショップ」があります。現代美術、ファッション、デザイン、写真、アニメーションなど様々な分野から講師を招いて開催してきたこの活動は、この10年間で66回にわたります。その最初の4年間29回のアーティスト・ワークショップについては、『やってみよう、アート 国立新美術館ワークショップ記録集 2007年3月 - 2011年2月』にまとめました。本書は、その後の約6年間に行われたアーティスト・ワークショップの記録集です。この6年間もアーティストとふれあい、一緒に考え、作り、体験することで、知らなかった世界が開かれた人、自分自身でも気づいていなかった新たな自分に出会った人など、参加者それぞれに、様々なドラマが生まれました。

この6年間は、美術館の教育活動についての来館者からの要望も反映した活動を展開してきました。その中で新たに始めたのが、アーティストによる未就学児親子を対象とした「はじめてのアート」シリーズです。小学校に入る前の小さな子どもたちがアーティストとともに、心や体を解放し、美術館デビューをする場として、毎回好評をいただいております。

さらに国立新美術館の企画展が世界巡回することにもない、初の海外でのワークショップを開催することもできました。国が違って、また言葉がうまく通じなくても、アートを楽しむ心は同じであると、スタッフ一同勉強になる経験でした。

普段は限られた人数の参加となってしまうがちなワークショップですが、この記録集を刊行することで活動を広く公開し、この活動を通してアートの力で人がくろひろげる創造力の可能性をみなさまと共有できれば幸いです。

今後ともこうした活動を継承しつつ、より来館者のニーズをとらえた活動を促進していきたいと思っております。

最後になりましたが、国立新美術館の教育普及活動は様々な方々に支えられて運営しております。講師を引き受けてくださったアーティストとその関係者のみなさま、学生のインターンやサポート・スタッフ、機材・素材を提供くださった各社のみなさま方、そして参加してくださったすべてのみなさまに心より感謝申し上げます。

美術館のご紹介

活動方針

国立新美術館は、コレクションを持たず、国内最大級の展示スペース(14,000㎡)を生かした多彩な展覧会の開催、美術に関する情報や資料の収集・公開・提供、教育普及など、アートセンターとしての役割を果たす、新しいタイプの美術館です。

内外から人やモノ、情報が集まる国際都市、東京に立地する美術館として、「美術」を介して人々がさまざまな価値観に触れる機会を提供し、相互理解と共生の視点に立った新しい文化の創造に寄与します。

事業内容

1. 展覧会事業 「さまざまな美術表現を紹介し、新たな視点を提起する美術館」

- 1) 全国的な活動を行っている美術団体等に発表の場を提供します
- 2) 国内外の新しい美術の動向に焦点をあてた自主企画展を開催します
- 3) 新聞社や他の美術館との共催による展覧会を開催します

2. 情報収集・提供事業 「人と情報をつなぎ、文化遺産としての資料を収集・公開する美術館」

- 1) 国内の展覧会に関する情報を収集し提供します
- 2) 戦後の国内の展覧会カタログを網羅的に収集し公開します
- 3) 日本の近代以降の美術に関するさまざまな資料を収集し公開します

3. 教育普及事業 「参加し交流し創造する美術館」

- 1) 展覧会にあわせた講演会やシンポジウム、ギャラリートークを実施します
- 2) 作家トークやワークショップにより、アートを楽しみ、アートについて語りあうための場を提供します
- 3) インターンシップやボランティア・プログラムをとおして、美術館における実践的な活動の場を提供します
- 4) 美術館の教育普及事業に関する資料の収集に努めます

開館時間など

10時～18時(入場は17時30分まで)※企画展会期中の毎週金曜日は20時まで(入場は19時30分まで)
休館日は毎週火曜日(祝日又は振替休日に当たる場合は開館し、翌平日休館。)

お問い合わせ

独立行政法人国立美術館 国立新美術館
〒106-8558 東京都港区六本木7-22-2
<http://www.nact.jp>
Tel: 03-6812-9900

アクセス

電車

- ・東京メトロ千代田線乃木坂駅
青山霊園方面改札6出口(美術館直結)
- ・都営大江戸線六本木駅7出口から徒歩約4分
- ・東京メトロ日比谷線六本木駅4a出口から徒歩約5分



謝辞

国立新美術館アーティスト・ワークショップの開催にあたり、講師各位ならびにキヤノン株式会社ほか、多くの方々から多大なるご支援とご協力を賜りました。ここに記し、深い感謝の意を表します。また、ここにお名前を記すことができなかった方々にも、心から御礼申し上げます。(順不同・敬称略)

講師

| | |
|-------------------------|--|
| 岩淵貞太 | 富井大裕 |
| 上羽陽子 | 富田菜摘 |
| 大森靖枝 | 中井川由季 |
| 岡崎智弘 | なかがわ ちひろ |
| 開発好明 | 中村一美 |
| 金沢健一 | 野田謙介 |
| 神戸智行 | 野田裕示 |
| 木島彩矢香 | 野本有紀 |
| 國安孝昌 | 東明 |
| COCHAE (軸原ヨウスケ、武田美貴) | 福井江太郎 |
| 近藤恵介 | 堀尾寛太 |
| 齋藤玲子 | ホンマタカシ |
| 酒百宏一 | 升谷絵里香 |
| 佐藤可士和 | 山中由里子 |
| 志賀理江子 | ヤン・ジョンウク 양정욱 |
| 柴田敏雄 | 吉田憲司 |
| JUN OSON | 東京工芸大学芸術学部 アニメーション学科 |
| 鈴木雅雄 | 木船園子 |
| SPREAD (小林弘和、山田春奈) | 山中幸生 |
| 関口光太郎 | 文化学園大学大学院 生活環境学研究科 グローバルファッション専修 |
| 高橋理子 | 高木陽子 |
| 武中敬吾 | ダフネ・モハジャヴァペサラン |
| 寺山紀彦 | |
| 堂本右美 | |

目次

| | |
|--|----|
| 国立新美術館の教育普及活動 | 3 |
| 美術館のご紹介 | 5 |
| 謝辞 | 7 |
| ワークショップリスト | 10 |
| 2011年ワークショップ | |
| 30 暮らしを見つめる 粘土で作ってみる | 18 |
| 31 凸凹探検隊!〜探そう、美術館のかたち〜 | 20 |
| 32 私だけの文様で作るSLEEVE BAG | 22 |
| 2012年ワークショップ | |
| 33 デザインって何だろう?〜展覧会の印象を色や形にしてみよう!〜 | 24 |
| 34 私の“好き”を箱に詰めて〜廃品からつくる、アート〜 | 26 |
| 35 野ダテ△□〜掛け軸に描いて、お茶室で鑑賞しよう!〜 | 28 |
| 36 息をとめて そとさわって 銀箔から学ぶ日本の画材 | 30 |
| 37 からだと空間をめぐる実験〜美術館の空間をからだで感じてみよう!〜 | 32 |
| 38 “表現”としての写真 −柴田敏雄による2回の講評会− | 34 |
| 39 はじめてのアート −新聞紙をさわって、きいて、かんじてみよう− | 36 |
| 2013年ワークショップ | |
| 40 高校生が写し出す、とむらいの時 | 38 |
| 41 木々に灯す、ちいさな巣をつくろう〜アートナイトでインスタレーションに挑戦 | 40 |
| 42 “ハウス・オブ・カード”をつかったワークショップ | 42 |
| 43 『写真』以前／暗黒を作り出そう | 44 |
| 44 あなたのユーモアをイラストにしよう! | 46 |
| 45 はじめてのアート −つくって遊ぶ、劇でっこー | 48 |
| 2014年ワークショップ | |
| 46 折りジナルフェイスをつくろう! | 50 |
| 47 わたし みんな めぐる イメージ −世界のものと向き合おう− | 52 |
| 48 鳥ならざる鳥を描く −逆から思考する、絵画− | 54 |
| 49 2.5D 着られるイラスト バレエ・リュス ペーパーチュニックコレクション2014 | 56 |
| 50 アート de じぶんえほん | 58 |
| 51 はじめてのアート 絵描きさんといっしょに、描く、つくる! | 60 |

| | |
|-------------------------------------|----|
| 2015年ワークショップ | |
| 52 彫刻と絵画をめぐるワークショップ〜4人の色／9回のコップ | 62 |
| 53 動き出せ!色とかたち アニメーションのしくみを知ろう | 64 |
| 54 Life Type ライフタイプーじぶん・ひと 知り合うデザイン | 66 |
| 55 マンガの時間を「見る」という体験:解放される音、分解される運動 | 68 |
| 56 冷却ファンでつくる動きの装置 | 70 |
| 57 かたちにして見る、わたしの考え〜Made in Mind〜 | 72 |
| 58 はじめてのアート ふわふわおえかき プッシュしてポヨン! | 74 |

| | |
|--|----|
| 2016年ワークショップ | |
| 59 鉄・形・音 手と目と耳を結ぶ | 76 |
| 60 ゾートロープを作ろう | 78 |
| 61 新聞紙とガムテープのアートを体験しよう! | 80 |
| 62 Tipping Pointをふくむ事象について、ヴィジュアルによる試論 | 82 |
| 63 三角形で発信しよう! | 84 |
| 64 ゾートロープを作ろう(バンコク編) | 86 |
| 65 ひろがるワタシ つながるアナタ −パラファークの世界へようこそ− | 88 |

| | |
|-------------------------------------|----|
| 2017年ワークショップ | |
| 66 Next 10 years 〜色と形でデザインするわたしの未来〜 | 90 |

| | |
|--|----|
| エッセイ | |
| ふわふわおえかき プッシュしてポヨン! 開発好明 | 94 |
| 2014年「2.5D 着られるイラスト バレエ・リュス ペーパーチュニックコレクション2014」ワークショップ後記 高木陽子 | 95 |
| 絵はお教室で描くもの? とんでもない! 堂本右美 | 96 |
| 気付きと開きが起こる SPREAD 山田春奈 小林弘和 | 97 |
| 鉄・形・音 手と目と耳を結ぶ 金沢健一 | 98 |
| 恐怖 関口光太郎 | 99 |

ワークショップリスト

※アーティスト・ワークショップ1-29は、『国立新美術館ワークショップ記録集2007年3月-2011年2月』に収録。

| | ワークショップタイトル／関連事業 | 講師／肩書き | 開催日 | 対象 | 参加者数 | 場所 |
|----|--|--------------------------------------|---------------|-------------|--------------------|---------------------------------|
| 1 | 自分のシンボルマークを作ろう! 「教えて!可土和さん!」(講演会とワークショップの同時開催) | 佐藤可土和 クリエイティブディレクター | 2007.3.24 | 小学5,6年生 | 18名 | 別館3階多目的ルーム |
| 2 | からだを遊ぶ! 「スキン+ボーンズ—1980年代以降の建築とファッション」展 関連企画 ボーンズ編 | 楠原竜也 振付家・ダンサー | 2007.7.29 | 小学3年生～6年生 | 11名 | 別館3階多目的ルーム、講堂、 企画展示室2Eほか |
| 3 | 3Dな布(スキン)を作る 「スキン+ボーンズ—1980年代以降の建築とファッション」展 関連企画 スキン編 | 菱沼良樹 ファッションデザイナー／テキスタイルデザイナー | 2007.8.4 | どなたでも | 22名 | 別館3階多目的ルーム |
| 4 | 大学生とのワークショップ「アートまわりのおしゃべり—感じたこと、聞きたいこと」 「安齊重男の“私・写・録”1970—2006」展 関連企画 | 安齊重男 アート・ドキュメンタリスト | 2007.9.23、30 | 大学生 | 23日 18名 30日 33名 | 別館3階多目的ルーム |
| 5 | 学校のシンボルマークをつくろう 自分のシンボルマークをつくろう 「ADC大学」同時開催「高校生のためのデザインワークショップ」 | 松永真、中島祥文、浅葉克己、永井一史 アートディレクター | 2007.10.20、21 | 高校生 | 20日 36名 21日 38名 | 別館3階多目的ルーム |
| 6 | わたしの家、わたしの服～着られるお家をつくろう～ | 山縣良和、mafuyu ファッションデザイナー、ニットアーティスト | 2007.12.1 | 小学3年生～6年生 | 23名 | 別館3階多目的ルーム、 1階ロビー、地下SFTギャラリー |
| 7 | 今日はちよっぴり画伯な気分～奥谷 博先生と描く美術館～ | 奥谷 博 画家 | 2008.1.27 | 小学4年生～中学3年生 | 12名 | 別館3階多目的ルーム、 企画展示室2Eほか |
| 8 | くんくんウォーク～美術館のにおいを探せ!～ | 井上尚子 アーティスト | 2008.2.16 | 4歳以上 | 29名 | 別館3階多目的ルーム、 国立新美術館内 |
| 9 | ヒューマンサイズ・プロジェクト～つくろう!自分サイズのバルーン!～ 「アーティスト・ファイル2008—現代の作家たち」展 関連企画 | 市川武史 現代美術家 | 2008.3.15、16 | どなたでも | 15日 19名 16日 27名 | 講堂、研修室A,B,C、竹林 |
| 10 | 空想の場所をつくってみよう 「アーティスト・ファイル2008—現代の作家たち」展 関連企画 | さわひらき 現代美術家 | 2008.4.12 | 小学2年生～中学3年生 | 11名 | 別館3階多目的ルームほか |
| 11 | ミナペルホネンでつくる未来生活 プログラム「ミナペルホネンとデザイン」(講演会とワークショップの同時開催) | 皆川明 デザイナー | 2008.5.18 | どなたでも | 20名 | 別館3階多目的ルーム |
| 12 | 鑑賞ワークショップ～ことばで楽しむエミリー展～ 「エミリー・ウングワレー展—アポリジニが生んだ天才画家」関連企画 | 白鳥建二 | 2008.7.6 | どなたでも | 22名 | 企画展示室2E、講堂 |
| 13 | アイスベキモノたち～発見!おもしろデザイン!～ | 清水久和 プロダクトデザイナー | 2008.8.24 | 小学生以上の親子 | 8組21名 | 別館3階多目的ルームほか |
| 14 | デザインってなんだろう??～やってみよう!イスのデザイン～ | 紺野弘通 プロダクトデザイナー | 2008.9.28 | 小学生 | 29名 | 別館3階多目的ルームほか |
| 15 | 六本木をつづる～散策を“手紙”にたくして～ | 秋山さやか 美術作家 | 2008.12.21 | 小学生以上 | 20名 | 別館3階多目的ルームほか |
| 16 | 作ろう!オリジナル・モビール | 藤城成貴 プロダクトデザイナー | 2009.2.14 | 中学生以上 | 22名 | 別館3階多目的ルーム |
| 17 | ミニチュア・ムシワールド～虫からみた世界をつくろう～ 「アーティスト・ファイル2009—現代の作家たち」展 関連企画 | 大平 實 現代美術家 | 2009.3.8 | 小学生 | 17名 | 別館3階多目的ルーム、 企画展示室2E |
| 18 | 石から生み出すいろいろなカタチ 「アーティスト・ファイル2009—現代の作家たち」展 関連企画 | 村井進吾 彫刻家 | 2009.4.5 | 小学4年生以上 | 18名 | 別館3階多目的ルームほか |
| 19 | やってみよう、美術体操～名画、名作を体感!～ | 高橋唐子 美術作家 | 2009.8.22 | 小学生 | 13名 | 別館3階多目的ルーム |
| 20 | チャレンジ!抽象画～向き合う心、あふれ出る色～ 「光 松本陽子/野口里佳」展 関連企画 | 松本陽子 画家 | 2009.9.12 | どなたでも | 21名 | 別館3階多目的ルームほか |
| 21 | とらえよう、レンズの向こう側～デジカメで撮る抽象写真～ | 浜田 涼 美術作家 | 2009.12.19 | 小学4年生以上 | 19名 | 別館3階多目的ルームほか |
| 22 | パラモデルといっしょにブラレールであそぼう | paramodel 現代美術家 | 2010.1.10 | どなたでも | 34名 | 3階講堂ほか |

| | ワークショップタイトル／関連事業 | 講師／肩書き | 開催日 | 対象 | 参加者数 | 場所 |
|----|---|--|---------------|---------------|------------------------|-------------------------|
| 23 | 人形作家とつくる、オリジナルキャラクター | イシイリョウコ 人形作家 | 2010.2.27 | どなたでも | 22名 | 別館3階多目的ルームほか |
| 24 | 傘をつかってアニメーションを作ろう 「アーティスト・ファイル2010—現代の作家たち」展 関連企画 | 斎藤ちさと 美術家 | 2010.3.20 | 中学生以上 | 15名 | 別館3階多目的ルーム |
| 25 | カラー・ワイヤーでつくる小物 | エリオット・ムキーゼ、ノンムプセレロ・マブンデュラ ワイヤーアーティスト | 2010.4.24 | どなたでも | 24名(2回合計) | 地下ロビー |
| 26 | 木ってなんだろう? ～見て、聞いて、さわってみよう～ | 宮本茂紀 モデラー | 2010.6.5 | 小学生 | 23名 | 別館3階多目的ルームほか |
| 27 | カラダで鑑賞! マン・レイさんの世界 | 伊藤千枝 ダンサー・振付家 | 2010.8.29 | 小学生 | 16名 | 別館3階多目的ルーム、 企画展示室1E |
| 28 | カメラでとらえよう 風のそよぎ 光のゆらぎ 「陰影礼讃—国立美術館コレクションによる」展 関連企画 | 秋岡美帆 現代美術家 | 2010.10.2 | 小学4年生以上 | 20名 | 別館3階多目的ルームほか |
| 29 | 私の線を集めよう | 金田実生 画家 | 2011.2.19 | どなたでも | 24名 | 別館3階多目的ルーム |
| 30 | 暮らしを見つめる 粘土で作ってみる 「アーティスト・ファイル2011—現代の作家たち」展 関連企画 | 中井川由季 陶造形作家 | 2011.5.7 | 小学生以上 | 18名 | 別館3階多目的ルームほか |
| 31 | でこぼこ 凸凹探検隊!～探そう、美術館のかたち～ | 酒百宏一 美術作家 | 2011.7.16 | 小学生以上 | 22名 | 別館3階多目的ルームほか |
| 32 | 私だけの文様で作るSLEEVE BAG スリーブバッグ | 高橋理子 アーティスト | 2011.9.4 | 中学生以上 | 20名 | 別館3階多目的ルーム |
| 33 | デザインって何だろう?～展覧会の印象を色や形にしてみよう!～ 国立新美術館開館5周年記念企画 | 佐藤可士和 クリエイティブディレクター | 2012.1.22 | 小学3年生～6年生 | 24名 | 別館3階多目的ルームほか |
| 34 | 私の“好き”を箱に詰めて～廃品からつくる、アート～ 「野田裕示 絵画のかたち／絵画の姿」展 関連企画 | 富田菜摘、野田裕示 現代美術家、画家 | 2012.2.18 | 中学生以上 | 22名 | 別館3階多目的ルームほか |
| 35 | 野ダテ△□～掛け軸に描いて、お茶室で鑑賞しよう!～ 「野田裕示 絵画のかたち／絵画の姿」展 関連企画 | 開発好明、野田裕示 美術家、画家 | 2012.3.24 | 中学生以上 | 14名 | 別館3階多目的ルームほか |
| 36 | 息をとめて そっとさわって 銀箔から学ぶ日本の画材 | 神戸智行 日本画家 | 2012.5.27 | 小学5年生以上 | 21名 | 別館3階多目的ルームほか |
| 37 | からだと空間をめぐる実験～美術館の空間をからだで感じてみよう!～ | 岩淵貞太 ダンサー・振付家 | 2012.7.29 | 小学3年生以上 | 17名 | 1,2,3階ロビー、 3階講堂 |
| 38 | “表現”としての写真 —柴田敏雄による2回の講評会— 「与えられた形象—辰野登恵子／柴田敏雄」展 関連企画 | 柴田敏雄 写真家 | 2012.8.25、9.8 | 高校生以上 | 17名 | 研修室A、Bほか |
| 39 | はじめてのアート—新聞紙をさわって、きいて、かんじてみよう— | 福井江太郎 日本画家 | 2012.11.3、4 | 未就学児童(3～6歳)親子 | 3日 11組25名 4日 12組27名 | 別館3階多目的ルーム |
| 40 | 高校生が写し出す、とむらいの時 「アーティスト・ファイル2013—現代の作家たち」展 関連企画 | 志賀理江子 現代美術家 | 2013.2.24 | 高校生 | 5名 | 別館3階多目的ルームほか |
| 41 | 木々に灯す、ちいさな巣をつくるう～アートナイトでインスタレーションに挑戦 「アーティスト・ファイル2013—現代の作家たち」展 関連企画 | 國安孝昌 現代美術家 | 2013.3.23 | 高校生以上 | 19名 | 別館3階多目的ルーム、 屋外スペースほか |
| 42 | “ハウス・オブ・カード”をつかったワークショップ 「カリフォルニア・デザイン」展×「デザインあ展」共同開催プログラム | 岡崎智弘、寺山紀彦 アートディレクター／グラフィックデザイナー、デザイナー | 2013.4.27 | 「デザインあ展」来場者 | 2,250名 | 21_21 DESIGN SIGHT(東京) |
| 43 | 『写真』以前／暗黒を作り出そう | ホンマタカシ 写真家 | 2013.7.28、8.4 | 高校生以上 | 16名 | 別館3階多目的ルームほか |
| 44 | あなたのユーモアをイラストにしよう! | JUN OSON イラストレーター | 2013.8.25 | 小学3年生以上 | 16名 | 別館3階多目的ルームほか |

| | ワークショップタイトル／関連事業 | 講師／肩書き | 開催日 | 対象 | 参加者数 | 場所 |
|----|---|---|---------------|-----------------------------------|----------------------------------|------------------------|
| 45 | はじめてのアート ーつくて遊ぶ、劇ごっこー | 大森靖枝 演出家 | 2013.11.24 | 未就学児(2～6歳)親子 | 13組34名 | 別館3階多目的ルーム |
| 46 | 折りジナルフェイスをつくろう! 「みる・きく・あそぶ イメージのカ ウィークエンド」特別プログラム | COCHAE 軸原ヨウスケ、武田美貴 デザイン・ユニット | 2014.3.8 | どなたでも | 133名(3回合計) | 1階ロビー |
| 47 | わたし みんな めぐる イメージー世界のものと向き合おうー 「イメージのカー国立民族学博物館コレクションにさぐる」展 関連企画 | 吉田憲司、齋藤玲子、山中由里子、上羽陽子、 長屋光枝、山田由佳子 文化人類学者、学芸員 | 2014.3.15、16 | 15日 中学生以上 16日 小学4～6年生 | 15日 22名 16日 8名 | 研修室A,B、企画展示室2E |
| 48 | 鳥ならざる鳥を描く ー逆から思考する、絵画ー 「中村一美展」関連企画 | 中村一美 画家 | 2014.5.10 | 小学5年生以上 | 27名 | 別館3階多目的ルームほか |
| 49 | 2.5D 着られるイラスト バレエ・リュス ペーパーチュニックコレクション2014 「魅惑のコスチューム:バレエ・リュス展」関連企画 | 高木陽子ほか 文化学園大学教授 | 2014.7.26 | 小学6年生以上 | 15名 | 別館3階多目的ルームほか |
| 50 | アート de じぶんえほん | なかがわ ちひろ 絵本作家・翻訳家 | 2014.10.26 | 小学3年生～高校生 | 18名 | 別館3階多目的ルーム |
| 51 | はじめてのアート 絵描きさんといっしょに、描く、つくる! | 堂本右美 画家 | 2014.11.22、23 | 22日 未就学児(3～6歳)親子 23日 小学1～4年生親子 | 22日①19組42名 ②21組47名 23日 20組48名 | 別館3階多目的ルーム |
| 52 | 彫刻と絵画をめぐるワークショップ～4人の色／9回のコップ | 富井大裕、近藤恵介 美術家、画家 | 2015.1.25 | 中学生以上 | 20名 | 別館3階多目的ルーム |
| 53 | 動き出せ!色とかたち アニメーションのしくみを知ろう 六本木アートナイト企画「ニッポンのマンガ*アニメ*ゲーム」展、「ニキ・ド・サンファル展」さきどりワークショップ | 東京工芸大学 芸術学部 アニメーション学科 | 2015.4.25 | どなたでも | 160名 | 1階ロビー |
| 54 | Life Type ライフタイプーじぶん・ひと 知り合うデザイン | SPREAD 小林弘和、山田春奈 クリエイティブ・ユニット | 2015.6.14 | 中学生以上 | 18名 | 別館3階多目的ルーム |
| 55 | マンガの時間を「見る」という体験:解放される音、分解される運動 「ニッポンのマンガ*アニメ*ゲーム」展 関連企画 | 鈴木雅雄、野田謙介 早稲田大学教授、マンガ研究家 | 2015.8.22 | 高校生以上 | 25名 | 3階研修室A,B |
| 56 | 冷却ファンでつくる動きの装置 | 堀尾寛太 アーティスト・エンジニア | 2015.9.27 | 小学3年生～高校生 | 8名 | 別館3階多目的ルーム、 3階講堂 |
| 57 | かたちにして見る、わたしの考え～Made in Mind～ 「アーティスト・ファイル2015 隣の部屋ー日本と韓国の作家たち」関連企画 | ヤン・ジョンウク 現代美術家 | 2015.10.11 | 中学生以上 | 20名 | 3階講堂、 企画展示室2E |
| 58 | はじめてのアート ふわふわおえかき ブッシュしてポヨン! | 開発好明 美術家 | 2015.11.15 | 未就学児(3～6歳)親子 | 90名(4回合計) | 1階ロビー |
| 59 | 鉄・形・音 手と目と耳を結ぶ | 金沢健一 彫刻家 | 2016.1.31 | 中学生以上 | 14名 | 別館3階多目的ルーム |
| 60 | ゾートロープを作ろう 「ニッポンのマンガ*アニメ*ゲーム ミャンマー展」関連企画 | 武中敬吾、野本有紀、木島彩矢香、吉澤菜摘 アニメーター、教育普及室スタッフ | 2016.2.14、15 | どなたでも | 81名 | ミャンマー国立博物館(ヤンゴン) |
| 61 | 新聞紙とガムテープのアートを体験しよう! 「MIYAKE ISSEY展:三宅一生の仕事」関連企画 | 関口光太郎 造形作家 | 2016.4.17 | 小学生以上 | 52名 | 1階ロビー、 企画展示室2E |
| 62 | Tipping Pointをふくむ事象について、ヴィジュアルによる試論 | 升谷絵里香 アーティスト | 2016.5.29 | 中学生以上 | 12名 | 別館3階多目的ルーム |
| 63 | 三角形で発信しよう! | 教育普及室スタッフ | 2016.8.11 | どなたでも | 51名 | 地下1階休憩コーナーほか |
| 64 | ゾートロープを作ろう(バンコク編) 「ニッポンのマンガ*アニメ*ゲーム バンコク展」関連企画 | 教育普及室スタッフ | 2016.8.27、28 | どなたでも | 27日 45名 28日 44名 | ナショナル・ギャラリー(バンコク) |
| 65 | ひろがるワタシ つながるアナター・パラフークの世界へようこそー 六本木アートナイト企画 アーティスト・ワークショップ | 東 明 美術作家 | 2016.10.22 | どなたでも | 180名 | 1階ロビー |
| 66 | Next 10 years ～色と形でデザインするわたしの未来～ 「国立新美術館開館10周年記念ウィーク」特別プログラム | SPREAD 小林弘和、山田春奈 クリエイティブ・ユニット | 2017.1.29 | 中学生以上 | 19名 | 別館3階多目的ルーム、 企画展示室2E |

2011年

|

2017年

【凡例】

各ワークショップの記録は、以下の者が執筆し、
「まとめ」の文末に大文字のイニシャルで記した。

澤田将哉 (MS)
鳥居茜 (AT)
真住貴子 (TM)
吉澤菜摘 (NY)
渡部名祐子 (NW)



暮らしを見つめる 粘土で作ってみる

「アーティスト・ファイル2011—現代の作家たち」展 関連企画

- 開催日時：2011年5月7日(土) 12:30~16:00
- 参加者：18名
- 対象：小学生以上
- 参加費：500円
- 場所：別館3階多目的ルームほか

概要

陶造形作家の中井川由季さんを講師に迎え、「暮らしを見つめる」をテーマに、粘土を用いた造形を体験するワークショップを実施しました。



プログラムの流れ

- 1 5分
- 2 30分
- 3 10分
- 4 110分
- 5 30分
- 6

講師紹介

「アーティスト・ファイル2011—現代の作家たち」展の出品作家、中井川由季さんによるワークショップには、小学生から70代まで幅広い世代の18人が参加しました。展示室の前に集合し、ワークショップ開始です。

ギャラリートーク

まずは「アーティスト・ファイル2011」を鑑賞し、中井川さんから作品の背景や制作活動についてのお話を聞きました。中井川さんの作品は、私たちの「陶」に対する概念を変え、土という素材の可能性を感じさせる迫力と存在感に満ちています。参加者たちは、人の体よりも大きな陶の作品に目をみはり、その不思議な形や表面のテクスチャーを見て想像力を膨らませていました。①

材料や制作方法について説明

展覧会鑑賞後は別館3階多目的ルームに移動し、中井川さんから粘土の扱い方と、制作テーマについての説明を聞きました。今回のテーマは、「暮らしを見つめる」です。自分の日常を振り返りながら、早速粘土に触ってみます。②

制作

使用するのは、数日自然乾燥させると固くなるタイプの土粘土。クリーム色と茶色の2種類を用意しました。参加者は、何気なく過ごしている日常を見つめなおし、日々の経験から形のヒントを探して、粘土で立体を作ります。成形するのが難しい部分は中井川さんからアドバイスをもらいながら、それぞれ工夫を凝らして、様々な「自分の暮らし」を形作っていました。③④

発表、講評

最後に、参加者全員が出来上がった作品を発表しました。「家族旅行の思い出」、「好きなパンをちぎる瞬間」など、参加者が語る作品に込めた思いやエピソードに、共感したり驚いたりしながら、笑い声の絶えない発表となりました。⑤

家に持ち帰り、乾燥

制作した作品はそれぞれ持ち帰り、数日間自然乾燥させます。参加者一人一人に、「大切にゆっくり乾かしてください」と声をかけた中井川さんは、「何気ない日常を粘土で形作ることで、自分でも気づかなかった発想に出会える。そういう発想や個性を大切にしてください」という言葉でワークショップを締めくくりました。

講師



陶造形作家
中井川由季
(なかいがわ ゆき)

茨城県に生まれる。多摩美術大学大学院美術研究科修士課程修了。茨城県の筑波山中腹にアトリエをかまえ、自然からインスピレーションを受けた有機的で温かみのある「やきもの」を手がける。数ヶ月をかけて土を積み上げ、形作られる作品は、現代美術における陶芸の新たな可能性を示す。作家活動の開始当初より、新進の女性陶芸家として注目をあつめ、その後も、彫刻家が自主運営するユニークな野外彫刻展、「雨引の里と彫刻」に毎回参加するなど、意欲的に活動が続いている。

まとめ

身の周りにある豊かな自然からインスピレーションを受けて作品を制作している中井川さんが、ワークショップの制作テーマに選んだのは「暮らしを見つめる」でした。参加者たちは、普段何気なく過ごしている日常を見つめなおし、暮らしの中で出会うものや感じることから形のヒントを探して、粘土で立体を造りました。手の中の粘土の感触も楽しみながら、それぞれの暮らしを見つめる時間は、穏やかであたたかく、発見に満ちたものとなりました。(NY)

参加者の感想

- とても楽しくて、思い出も思い出せてうれしいです。(9歳女子)
- 普段あまり話したりしない人たちの中で交流してものを作るのがとても楽しいと思いました!(10代女性)
- 粘土は難しかったですが、集中して作業することが、とても気持ちのよい事だと再認識しました。(20代女性)
- はじめてなので緊張しましたが、展示見学と中井川さんのお話からはじまり、とても楽しいひとときを体験できました。発表では個性が光り、感心しました。(50代女性)

材料

- 粘土(自然乾燥タイプの土粘土)2色
- バケツ
- 成形道具(へら、スプーンなど)
- 布
- 雑巾
- 紙
- 筆記用具
- 持ち帰り用のビニール袋など



凸凹探検隊! ~探そう、美術館のかたち~

- 開催日時：2011年7月16日(土)13:00~16:30
- 参加者：22名
- 対象：小学生以上
- 参加費：500円
- 場所：別館3階多目的ルームほか

概要
美術館内を凸凹探しの視点で歩き、気になる形に紙をあてて色鉛筆で写し取るフロッターージュに挑戦。各自が取ってきた形は、最後にひとつにまとめて展示を行います。皆で鑑賞しました。



②



③



④



⑤

プログラムの流れ

1
30分

講師の活動紹介、ワークショップの内容について説明

気になる凸凹に紙を当て、色鉛筆などで形を写し取るフロッターージュという技法を使って作品を手がける酒百さん。その時の気分や力の入れ具合など、ちょっとしたことで表れてくる形は異なるそうです。①

今日のワークショップでは、形探しという視点から美術館を見つめ、気になる凸凹を写し取ることに挑戦します。酒百さんからは「ただ形を写し取るだけでなく、様々な色を使って自分の作品を作ってください」とのお話がありました。参加者は4つのグループに分かれ、異なるルートで美術館をめぐるいきます。

2
90分

フィールドワーク

館内だけでなく、古い意匠の残る別館の石畳や普段は訪れることができない美術館の裏側バックヤードスペースや屋上などにも特別に足を伸ばしました。同じ場所を回っても、色鉛筆で写し取られ浮き出してくる形や色は一人ひとり全く異なります。②③

3
30分

個々の作品を一つにする

多目的ルームに戻ってきたら、展示作業を行います。壁面に投影された国立新美術館の全体図を見ながら、形を写し取ってきた場所にそれぞれの作品を貼っていきます。④

4
60分

鑑賞、グループごとに作品を発表

壁面いっぱい展示された作品と共に、フィールドワーク中の様子を撮影した写真も映し出され、お気に入りの一枚を選んだ参加者は、こだわった点や気づいたことなどについて発表しました。⑤



美術作家
酒百 宏一
(さかお こういち)

講師

1968年石川県金沢市生まれ。フロッターージュという写しとりの技法を使ってその場所の一部を写し取る作品づくりを続けている。また、地域での土地と人の営みの記憶を協働でかたちにするプロジェクトを各所で展開しており、「越後妻有アートトリエンナーレ」において《みどりの部屋プロジェクト》、「水と土の芸術祭」では《Niigata 水の記憶プロジェクト》を展開。現在、東京・大田区の町工場で使われていた道具を住民とともに写して作品にするプロジェクト《オオタノカケラ》に取り組んでいる。東京工科大学准教授。

まとめ

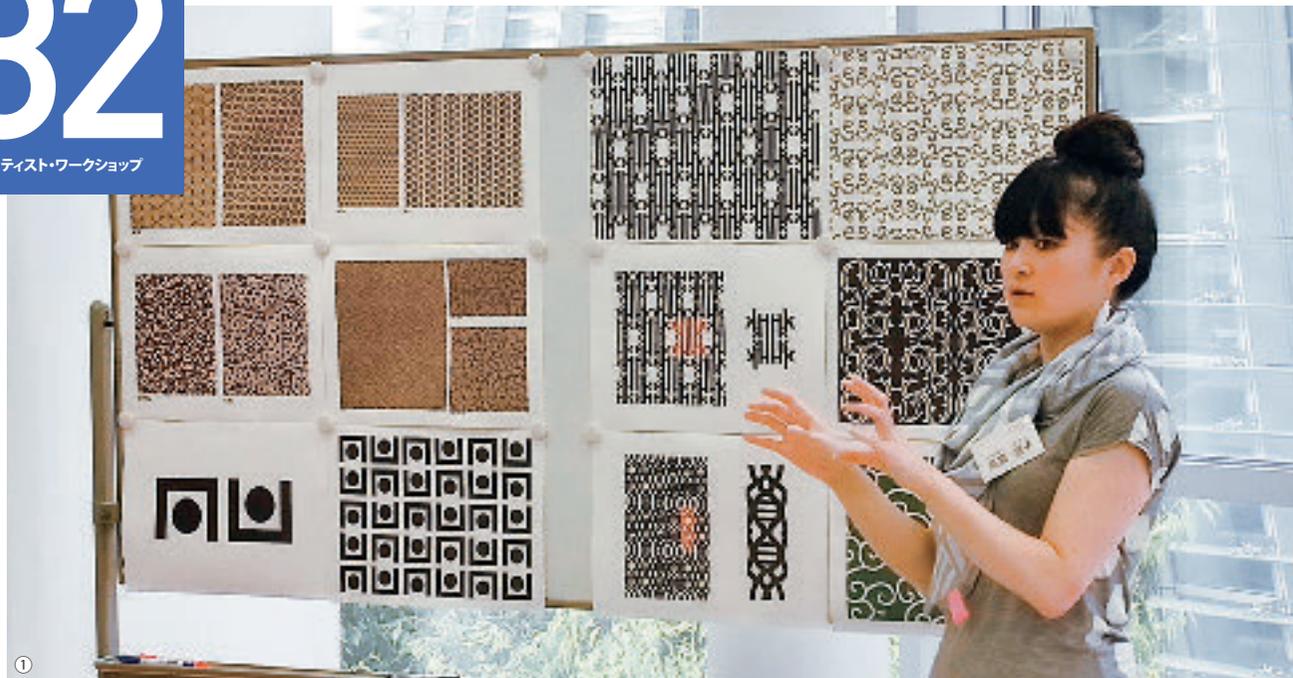
美術館をいつもと少し違った視点でとらえ、みんなで新たな美術館像を作ろうという趣旨のもと今回のワークショップを開催しました。参加者が目を向けたのは、敷地内の木々や古い意匠の残る建物の一部分、足元の床やコンクリートでできた丸い柱、椅子の座面といった何気ない場所でした。そのような場所に紙を当てて色鉛筆でこすってみると、視覚的には気づかなかった面白い形が浮かび上がってきます。グループで同じ場所を回っても、紙を置くちょっとした位置の違いや色の重ね方、色鉛筆のタッチの強弱などによって表れる形は異なり、表出する形の変化を楽しみながら一心不乱に紙に向かって色鉛筆を動かす参加者の姿が印象的でした。「触覚」を意識して目の前の光景をとらえることで、美術館の新たな姿に出会うワークショップとなりました。(AT)

参加者の感想

- フロッターージュはただ凸凹を写せるだけではなく、そこに目を向けた人の興味や関心、そして色づかいやタッチでこんなにも個性が表れる技法なのだと感じた。(30代女性)
- 写し取ることが、写真やビデオより心に残ることを実感した。美術館の記憶のかけらも写し取れてうれしかった。(40代女性)
- とても面白かったです。特に凸凹をうつす時の感触がよかった。(10歳男子)
- 子どもの頃にやったことがあるが、今やってみても夢中になった。油性の色鉛筆を使うということも面白かった。(40代女性)
- 普段、何気なく見ていたところも、フロッターージュで芸術的に見られて良かった。凸凹なところがすごく変化してすばらしかった。(10歳女子)

材料

- ・ホルベイン アーチスト色鉛筆
- ・ケント紙
- ・デジカメ
- ・マスキングテープ
- ・鉛筆削り
- ・プロジェクターなど



① 私だけの文様で作るSLEEVE BAG

- 開催日時：2011年9月4日(日)13:00~16:30
- 参加者：20名
- 対象：中学生以上
- 参加費：1,000円
- 場所：別館3階多目的ルーム

概要

独自の個性を追求した文様を手がける高橋さんを講師にお迎えしたワークショップ。文様や物づくりについてお話を聞いた後、参加者は自身の文様を考え、高橋さんオリジナルのスリーブバッグに施しました。



1

30分

講師のお話

●活動紹介

高橋さんは、オリジナルのテキスタイルを用いた手ぬぐいやバッグ、着物などのデザインから企業の商品開発まで幅広い活動を展開するアーティストです。「物づくりを通して世の中の固定観念を覆すプロジェクトがヒロコレジなんです」とご自身のプロダクトブランドについて話す高橋さん。

●文様について説明

文様とは、図柄のパターンが連なり、繰り返されているもののことを表します。日本古来の伝統的な文様やご自身が手がけた文様の紹介を交えて説明してくれました。高橋さんの文様は、円と直線のみで構成されています。「シンプルな形だからこそ、どんな風に面白くできるかを考えています」①

2

10分

作業手順説明

1枚の手ぬぐいを裁断することなく縫い合わせて作られた高橋さんオリジナルのスリーブバッグに、参加者それぞれが考えた文様を施します。

3

140分

制作

●文様を考え、ステンシルフィルムに描く
まずはモチーフを一つ決めるところから始めます。ローマ字や漢字、幾何学形から花や木などベースとなる形は人それぞれ。3つ以上の図柄を反復させて文様をつくります。②

●カッターでフィルムを切り抜く
考えた図柄は、ステンシルフィルムに写し、カッターで慎重に切り抜いていきます。

●切り抜いたステンシルフィルムをスリーブバッグに当て、スポンジを使って絵具で着色。③④

4

30分

発表

参加者は一人ずつ完成したスリーブバッグを見せながら、文様に込めた意味について発表しました。⑤

プログラムの流れ



アーティスト
高橋理子
(たかはし ひろこ)

講師

1977年生まれ。円と直線のみで構成された図柄により、独自の活動を展開するアーティスト。東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程を修了し、博士号を取得。固定観念をくつがえし、考えるきっかけを生み出すことをコンセプトとした作品を、国内外で発表。着物を表現媒体とした創作活動のほか、日本各地の伝統技術を持った工場や職人とのもの作りをおこなう。ジャンルを問わず、様々な企業や産地とのコラボレーションも多い。

まとめ

国立新美術館地下1階SFTギャラリーで「文様」展(2011年7月13日~9月12日)に出品した高橋理子さんを講師に迎えたワークショップは、改めて「文様」について思いを巡らせるひと時となりました。高橋さんが手がける文様は、円と直線といったシンプルな要素で構成されていますが、一つとして同じものはなく、どれも独特の個性を感じさせます。参加者は、高橋さんのレクチャーから着想を得て、日本古来の文様を現代風にアレンジする人もいれば、自分の人生を正方形と円といったシンプルな要素で表現する人、昨晚食べた秋刀魚と大根おろしから着想を得た人、ご自身の仕事内容から展開した人など、それぞれが創意工夫にあふれた文様を考え出しました。「文様」について考えることを通じて、自分自身と向き合い、表現することや物づくりの楽しさを味わう一日となりました。(AT)

参加者の感想

- 普段できないような体験ができ、とても楽しかったです。文様の話や高橋さんの作品のことなど、いろいろ聞けて良い経験になりました。(10代女性)
- 作品発表の際に、皆さんの思いとか普通の姿が垣間見ることができて楽しかったです。(40代女性)
- 時間が足りないと思うほど、夢中になることができました。事前のレクチャーがあったからこそ出来たのだと思います。(30代女性)
- 実際に自分で考えて形にすることはとても難しいことですが、すごく楽しかったです。(20代女性)
- 高橋さんの作品の魅力を知りました。お話もとても楽しくて世界が広がりました。オリジナルのスリーブバッグを作れたことで、物を大切に作る気持ちを忘れないようにしたいです。(30代女性)
- 久しぶりに達成感と楽しさと充実感でいっぱいの貴重な時間でした。(30代男性)

材料

- スリーブバッグ ・ステンシルフィルム
- スポンジ ・アクリルガッシュ ・コンパス
- 定規 ・アイロン
- マスキングテープ ・デザインカッターなど



デザインって何だろう? ~ 展示会の印象を色や形にしてみよう! ~

国立新美術館開館5周年記念企画

- 開催日時：2012年1月22日(日) 14:00~17:00
- 参加者：24名
- 対象：小学3年生~6年生
- 参加費：500円
- 場所：別館3階多目的ルームほか

概要

国立新美術館開館5周年を記念し、5周年のロゴマークをデザインした佐藤可士和さんを講師に迎えて、開催中の「野田裕示 絵画のかたち/絵画のすがた」展を鑑賞し、その印象を色や形に表現することに挑戦しました。



2



3



4



5

プログラムの流れ

1
25分

自己紹介・講師レクチャー

別館3階多目的ルームに集合し、参加者の自己紹介の後、佐藤さんからのレクチャーで始まりました。佐藤さんは、モネやピカソ、マティスの絵画をスクリーンに写し、それぞれの作品は画家が感じた印象を表現したものと、説明してくれました。例えばモネの「睡蓮」は、睡蓮をそのままそっくりに描くのではなく、モネが目にした睡蓮の印象を作品にしている、と佐藤さんは言います。佐藤さんがデザインした今治タオルのロゴマークも、今治の美しい海と太陽の印象を表現したものです。今回のワークショップでは、開催中の「野田裕示 絵画のかたち/絵画のすがた」展を鑑賞し、その印象を色や形に表現することに挑戦しました。

2
60分

「野田裕示」展を鑑賞

ひととおりレクチャーを聞いた後、みんなで展示室に移動して「野田裕示 絵画のかたち/絵画のすがた」展を鑑賞しました。展示された、大きなキャンバスに描かれた抽象画を見て、「この絵、勢いを感じる」「なんだか楽しい感じがするね」と、子どもたちは様々な印象を抱きました。①②
立体作品や、作家インタビューの映像も見て、いろいろなことを考え、感じました。

3
60分

展示会を見た印象を自由に表現して制作

別館に戻ると、今見た展示会の印象を表現する作業へ。③
佐藤さんからそれぞれが抱いた印象を自由に描くようアドバイスされた子どもたちは、真新しい佐藤さんがデザインした国立新美術館のロゴマークでデザインされたスケッチブックに絵具やペンなど好きな描画材料を使って描き始めます。④
絵具で塗った上からクレヨンを重ねて、絵の力強い印象を表現したり、薄い色の水彩絵具で展示会の不思議で楽しい雰囲気表現したり。参加者は、展示会を見たときの気持ちや感想を思い思いの色や形で表現しました。

4
30分

発表

最後は、全員が自分の絵をみんなの前で見せて、自分がどんなことを思って描いたのかを発表しました。同じ展示会を見ても、人によって受ける印象が異なることを共有しました。⑤
全員の発表の後は佐藤さんを囲んでみんなで作品とともに記念撮影をしました。⑥



クリエイティブディレクター
佐藤可士和
(さとう かしわ)

講師

1965年東京生。多摩美術大学グラフィックデザイン科卒。株式会社博報堂を経て2000年独立。同年クリエイティブスタジオ「サムライ」設立。
ブランド戦略のトータルプロデューサーとして、コンセプトの構築からコミュニケーション計画の設計、ビジュアル開発、デザインコンサルティングまで、強力なクリエイティブによる一気通貫した仕事は、多方面より高い評価を得ている。グローバル社会に新しい視点を提示する、日本を代表するクリエイター。ユニクロや楽天グループのグローバルブランド戦略などを手掛け、国立新美術館のシンボルマークデザインとサイン計画もおこなった。著書に『佐藤可士和の超整理術』（日本経済新聞社）他多数毎日デザイン賞、東京ADCグランプリ、亀倉雄策賞、朝日広告賞、日経広告賞、日本パッケージ大賞金賞ほか多数受賞。

まとめ

「デザインとは、かたちの無いものや言葉では言い表せないものを色や形にするコミュニケーションの手段」と佐藤さん。「自分の感じたことを自分らしく自由に表現することが大切」というメッセージが心に残るワークショップとなりました。(TM)

参加者の感想

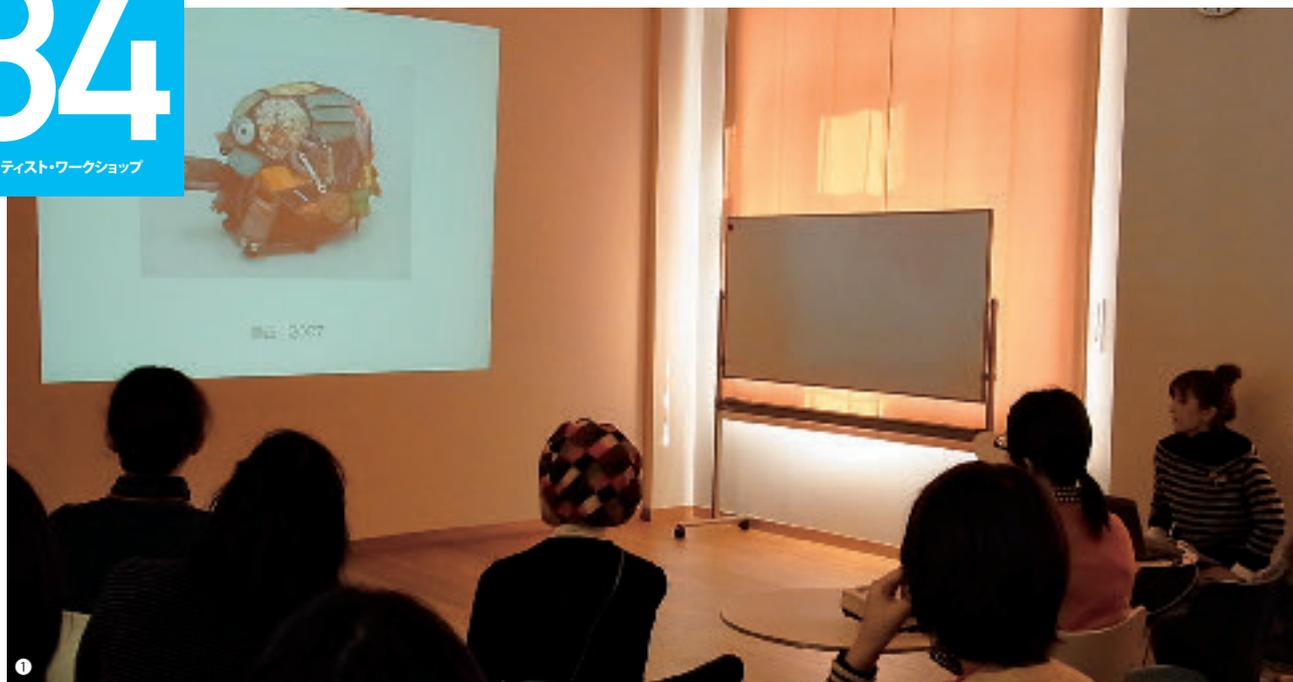
- 自由にたくさんのペンで絵を描いたり、有名な人の絵をみて感想を絵にすることはほとんどないので楽しかったです。「グラフィックデザイナー」にとっても興味をもちました。(10歳女子)
- 最初は不安で、でも絵を描いた後は、とても楽しくて3枚も描いてしまったのでまた来たいです。家でもいろいろデザインしてみたいです。(8歳女子)
- 自分の想像以上に野田さんがすてくで感動しました。また機会があったら行きたいです。(12歳男子)

材料

- ・スケッチブック ・絵具 ・マジック
- ・ボスカ ・クレヨン ・えんぴつ



6



私の“好き”を箱に詰めて～廃品から つくる、アート～ 「野田裕示 絵画のかたち／絵画の姿」展 関連企画

- 開催日時：2012年2月18日(土)13:00～16:00
- 参加者：22名
- 対象：中学生以上
- 参加費：300円
- 場所：別館3階多目的ルームほか

概要

身の回りの廃品を使用して作品を制作していると富田菜摘さんと、「野田裕示 絵画のかたち／絵画の姿」開催中の野田裕示さんを講師に迎えたワークショップを開催しました。参加者は身の回りにあるこだわりの廃品を持参して、箱の中に詰め込んで作品を作りました。



プログラムの流れ

1

30分

講師紹介と講師によるレクチャー

はじめに富田さんから、ご自身の作品をスライドで見せていただきながら、廃品で作品を作る意味や面白さについてお話を聞き、次に野田さんから箱を使った初期作品のお話などをレクチャーしていただきました。①

2

20分

「野田裕示 絵画のかたち／絵画の姿」展鑑賞 野田氏によるギャラリートーク

展覧会場で野田さんのギャラリートークに参加しました。制作者本人から話がきけるぜいたくな時間です。②

3

75分

制作

そしていよいよ、各々が持参した廃品を手にも制作に取り掛かります。参加者にはあらかじめ、廃品や箱を用意してきてもらいました。

子どもの頃に遊んだおもちゃや、毎日使っていたけれど壊れてしまったもの、懐かしい思い出の品など、身の回りで見つけた廃品は人によってさまざま。作品のテーマ設定や、廃品の組み合わせに頭をひねりながら箱に詰めていきます。ありきたりの廃品に意味をもたせ、作品の大切な一部へと変化させます。③④

4

40分

発表

制作の後の作品発表では一人ひとり作品に込めた思いを語り、富田さん、野田さんから丁寧な講評をいただきました。⑤



講師



現代美術家
富田菜摘
(とみた なつみ)

1986年東京都生まれ。2009年多摩美術大学絵画学科油画専攻卒業。身近な廃材や日用品を素材として動物や人物の立体作品を制作。個展やグループ展、芸術祭など多くの場で作品を発表。



画家
野田裕示
(のだ ひろし)

1952年和歌山県生まれ。多摩美術大学を卒業し早くから才能を認められる。1995年に和歌山県立近代美術館で個展開催。2001年、平成12年度第51回芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞。2012年、国立新美術館にて個展「野田裕示 絵画のかたち／絵画の姿」開催。現在、多摩美術大学教授。

思い

完成した作品は、普段の生活だけでなく、つくった人のたどってきた人生や人柄までもが詰まった奥深いものとなりました。少し視点を変えると身の回りには面白いものが沢山あり、それらを創意工夫して組み合わせるとアートが生まれる、そんな楽しさに気付いたワークショップでした。⑥(TM)

参加者の感想

- とても楽しかったです。家にあるただのガラクタがアートになりました。とても思い出深い作品となりました。ありがとうございました。(50代女性)
- 普段経験しないことが今回取り組めたことがとても新鮮でした。また、様々な方の作品を通して、見えてくる価値や大切にしていることが目にできよかったです。ありがとうございました。(30代男性)
- ずっと思い出でとっておいた何気ないものたちがまさか人目に出ることになるとは思っていませんでした。思い出をいい形で残せることができました。昔のことを思いだしたりできて、楽しかったですし、他の人たちの作品を見て、こういうこともできるんだ!と発見にもなり、また何か違う物を作りたくなりました。(20代女性)

材料

- ・廃品(参加者持参)
- ・グルーガン ・木工用ボンド
- ・カラーペン ・ピンセット
- ・空箱



野ダテ○△□ ~ 掛け軸に描いて、お茶室 で鑑賞しよう! ~ 「野田裕示 絵画のかたち／絵画の姿」展 関連企画

- 開催日時：2012年3月24日(土)13:00~17:00
- 参加者：14名
- 対象：中学生以上
- 参加費：無料
- 場所：別館3階多目的ルームほか

概要

「六本木アートナイト2012」に茶室《発泡苑》と《納屋》を展示した開発好明さんと、野田裕示さんのコラボレーションにより、掛け軸に抽象画を描き、お茶室で鑑賞するワークショップを開催しました。



プログラムの流れ

1
30分

講師による抽象画の解説

まずは抽象画についての野田さんのレクチャーです。「自分は様々な抽象的なカタチを描いているが、見る人に自由に感じて欲しい」と、一見難しい抽象画をやさしく紐解いてくださいました。①

2
45分

納屋のキャンバスに絵を描く

続いて、屋外に展示されている農家にある納屋を再現した《納屋》に絵を描きます。参加者は《納屋》のあちこちに貼られた小さなキャンバスに、自分の好きな色3色の混色で抽象画を描きました。②③

3
60分

掛け軸の制作

いよいよ掛け軸に抽象画を描くことに挑戦です。忙しい日々の中で感じていることや、日常の身近な出来事をイメージして水墨の濃淡で表現しました。④

4
75分

自分の掛け軸を掛けてお茶会をする

完成した掛け軸を持って一人ずつお茶会に参加。発泡スチロールでできた茶室《発泡苑》の中で自分で描いた掛け軸を鑑賞しながら、開発さんにお茶をたててもらいました。⑤

5
30分

講評

最後に、野田さん、開発さんに作品の講評をしてもらいました。



茶室《発泡苑》



美術家
開発好明
(かいはつ よしあき)

1966年山梨県生まれ。1993年、多摩美術大学大学院美術研究科修士課程修了。ヴェネチア・ビエンナーレ第9回国際建築展(2004年)や「越後妻有アートトリエンナーレ」(2006年)に出品。発泡スチロールによる大規模なインスタレーションやパフォーマンス、観客参加型のワークショップなど、その活動範囲は多岐にわたる。

講師



画家
野田裕示
(のだ ひろじ)

1952年和歌山県生まれ。多摩美術大学を卒業し早くから才能を認められる。1995年に和歌山県立近代美術館で個展開催。2001年、平成12年度第51回芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞。2012年、国立新美術館にて個展「野田裕示 絵画のかたち／絵画の姿」開催。現在、多摩美術大学教授。

まじり

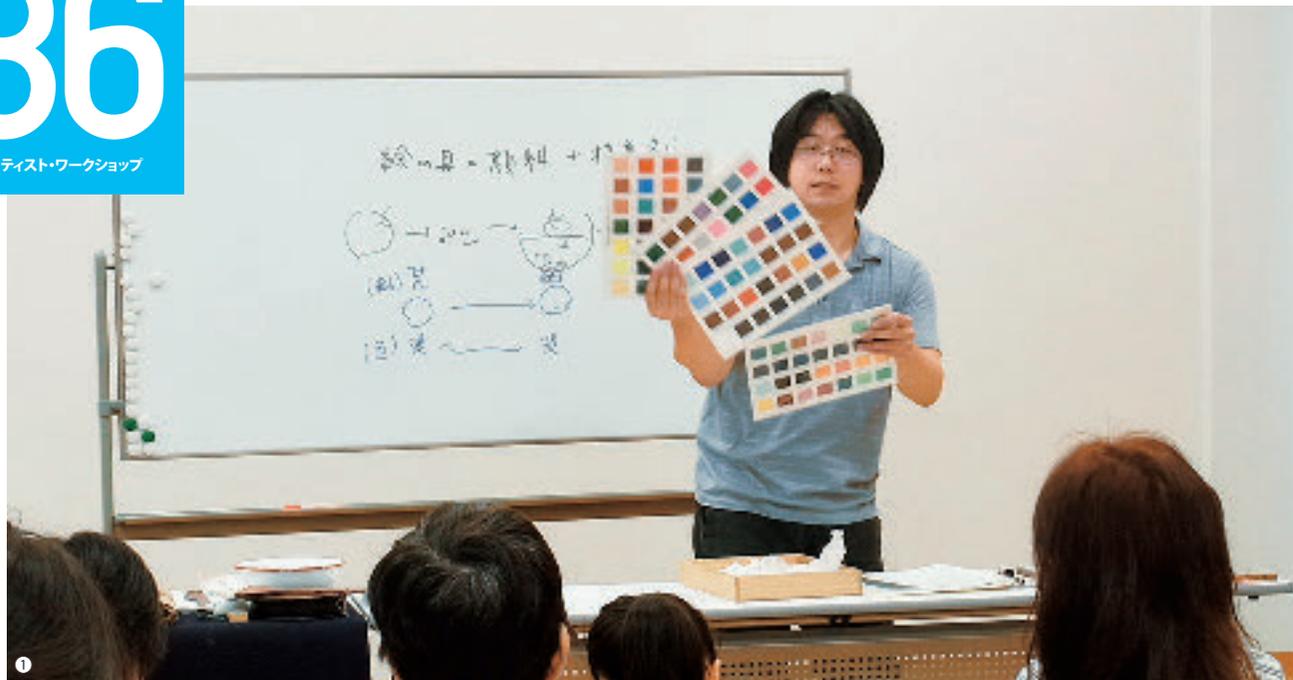
アートナイトの参加者に見守られながら、《納屋》で制作したり、《発泡苑》でのお茶会に参加したり…。今回のワークショップは、アートナイトならではの賑やかな雰囲気にも包まれるものとなりました。(TM)

参加者の感想

- 納屋に描いた作品が六本木アートナイトで展示されると思わずびっくりしました。抽象画は苦手と思っていましたが、今回の野田さんの作品を見たり、自分で参加してみて人の心に何かを訴えてくるような力強さを感じました。(30代女性)
- 抽象画はもっと何か深い意味があるのかなと思いきや、そうではなく一人一人勝手に見て考えてほしいという思いがあったことで、自分の中の抽象画のイメージがかかるようになってもっと自分なりに自由にとらえようと思いました。(10代女性)
- 立地、施設、スタッフ、講師の方、すべてがとても素晴らしいワークショップでした。今までで最高でしたので、ぜひまた参加したいです。(30代男性)

材料

- ・アクリル絵具
- ・墨汁
- ・筆
- ・紙
- ・麻布



息をとめて そっとさわって 銀箔から学ぶ日本の画材

- 開催日時：2012年5月27日(日) 13:00~16:30
- 参加者：21名
- 対象：小学5年生以上
- 参加費：500円
- 場所：別館3階多目的ルームほか

概要
日本画家の神戸智行さんを講師に迎えて、日本画の素材について学んだ後、実際に銀箔貼り加工を体験するワークショップをおこないました。



プログラムの流れ

1
40分

講師作品紹介と日本画素材についてのレクチャー

スライドを使用しての作品紹介では、神戸さんの一貫したテーマである「自然」、とくに水辺の動植物たちの小さな宇宙について、お話いただきました。自然に対する繊細な観察に基づいたお話は、ワークショップの後半の、野外の散策や制作にも関連したお話でした。

2
20分

日本画の素材に触れる

日本画の素材のレクチャーでは、岩絵具や膠、墨などの種類の紹介や作られ方についてのお話を聞きました。レクチャーの後半、参加者たちは実際に材料に触れて、その珍しさに目をみはっていました。とくに金箔を直接手にした場面では、あまりの薄さ、軽さに驚嘆の声が上がりました。①

3
45分

制作

まず始めに神戸さんより、道具の説明と銀箔の扱い方についてのデモンストレーション。参加者は息をひそめながら、神戸さんの手の動きを観察します。銀箔を貼る一連の工程を理解したら、それぞれの席に着いて制作を開始します。まずは、箔をあかします。箔を持ち上げるために、蟬のついた紙を銀箔に重ねます。次に、和紙の上に膠を引き、あかした箔をそっとのせます。参加者たちは、初めて箔を貼ったとは思えないほどきれいに貼ることができました。②

4
30分

館外へ散策

箔を貼り終えたら、美術館の敷地内の散策に出掛けました。目的は、このあと作る型紙のモチーフ探し。天候にも恵まれ、清々しい気分での散策を楽しみました。「普段何気なく通り過ぎている場所も、目を凝らしてみると色々な発見があり、それが創作のイメージにつながったり、生活を豊かにするきっかけになる」と神戸さん。③

5
40分

再度制作

多目的ルームに戻って、再び制作を開始。銀箔を加工するために、拾ってきた草花をもとに、型紙を作りました。型紙と硫黄を塗った紙を重ねて、アイロンを使って銀箔を焼きます。銀箔の色の変化に驚きながらも、参加者たちは焼き加減や型紙の使い方に工夫を凝らします。④

6
30分

全員で作品発表

最後に、参加者全員が出来上がった作品を発表しました。銀箔という同じ素材を扱い、草花というよく似たモチーフで制作したにもかかわらず、参加者の作品はどれも個性的に仕上がり、お互いの作品に感心の声がありました。⑤

講師



日本画家
神戸智行
(かんべ ともゆき)

岐阜県生まれ。多摩美術大学大学院修了。岩絵の具、箔、和紙など伝統的な素材を使用して繊細でさわやかな作品を制作。植物や水辺にすむ生き物をモチーフに小さな小宇宙を表現している。主な展覧会に、2010年「DOMANI・明日展」(国立新美術館)、2011年「神戸智行展『イノセント・ワールド』」(佐藤美術館)、2011~12年「太宰府天満宮アートプログラム 神戸智行『イノセント・ワールド』」(太宰府天満宮)などを開催

まとめ

子どもから大人まで様々な世代が集まった今回のワークショップでは、銀箔という繊細な素材を丁寧に扱うことを通して、緊張感の中にも制作の楽しさがあることを学びました。同時に、素材の変化に気を配りながら、身の回りの自然から着想を得て制作する心豊かな時間となりました。(TM)

参加者の感想

- 近くの植物を使って作品をつくり、みなさんの作品などを見てみると身近なものでこんなものがつくれるのを見て発見できてもよかったですと思います。(12歳男子)
- とても楽しかったです。短時間でしたが充実していました。また先生のご講評もうまいので、なんとなく出来た気になってしまいました。実際、自分でも気づかずにやっていたことをわかりやすく言葉にしてお話してくださったので、そこで初めて気づくことも多かったです。(30代女性)
- 日本画素材の説明や、銀箔の貼り方の実践などとても勉強になりました。色の変化や素材の性質を体験できありがたかったです。大勢のスタッフで丁寧なご指導ありがとうございました。(60代女性)

材料

- ・膠 ・刷毛
- ・銀箔
- ・あかし紙
- ・箔ばさみ
- ・パネル
- ・カッターナイフ
- ・岩絵の具 ・鉱石
- ・糊 ・和紙 ・筆
- ・アイロン ・ドーサ
- ・鉛筆 ・消しゴム
- ・厚紙
- ・デザインカッター
- ・カッター板
- ・硫黄シート
- ・扇風機



1 からだと空間をめぐる実験 ～美術館の空間をからだで感じてみよう!～

- 開催日時：2012年7月29日(日) 13:00～16:30
- 参加者：17名
- 対象：小学3年生以上
- 参加費：無料
- 場所：1,2,3階ロビー、講堂

概要 ダンサーで振付家の岩淵貞太さんを講師に迎え、からだ全体を使って国立新美術館の空間を感じるワークショップを行いました。



プログラムの流れ

1 30分

講師レクチャー
最初に講師の活動についてスライドレクチャーを受けます。①

2 50分

講堂での実験 ウォーミングアップ
まず、からだの感覚を研ぎ澄ますためのウォーミングアップから。大小ジャンプする、部屋全体を感じるようにからだを伸ばすなど、少しずつからだを解きほぐした後は、参加者全員で人と人の距離を縮めたり、広げたりして行き、空間を意識した動きもを行います。②

3 30分

**3階と2階での実験
～美術館のパブリックスペースへ**
ウォーミングアップの後は、講堂という閉じられた空間から、美術館の開かれた空間へ。「見慣れた空間に、自分のからだが入っていけるように意識すること。」という岩淵さんのアドバイスを受けて、ウォーミングアップで行った実験を、今度はパブリックスペースで実践してみます。③

4 65分

**1階での実験
～人が行き交う場所を、自分の空間にする**
そして、いよいよ、たくさんの人が行き交う1階へ。「これまで場に対して能動的に動いてきたけれど、もう少し周りに合わせて受動的に動いてみてください」と、岩淵さんから指示を受けます。多くの人が行き来するパブリックスペースの中で、自分の立ち位置を探りながら、柱、壁、床などの自分を取り囲む建築空間を意識的に感じます。公共の場所であるという意識と、空間と一体化しようという、二つの気持ちを持ちつつ、参加者は、床に座ったり、寝ころがったりしながら1階を自分の空間にしていき、美術館の日常の景色を変えてきました。④⑤

5 20分

活動のふりかえり
最後に、講堂へ戻って、参加者全員で今日の感想を共有しました。「下の階に行くにつれてどんどん空間が開放的になる」、「1階では温度と光の入り方が他の階と違う」、「1階は、起きているものごとくに周りが引っ張られる感覚がある」など、階ごとに感じられる空間の違いや、「床に寝ころがっていると、まるでこちらの行為のほうが自然なようにも感じる」など、日常と非日常の境目を行き来するような参加者の声。終わりに、岩淵さんから「今度から美術館に行って作品を見るときには、からだの感覚を研ぎ澄まして空間を意識してみてください」と言葉をもらい、ワークショップは終了しました。



ダンサー・振付家
岩淵貞太
(いわぶち ていた)

講師 玉川大学芸術学科卒業。演劇と並行して日本舞踊・舞踏を学ぶ。ダンサーとしてAPE、ニプロール、伊藤キム+輝く未来、Co. 山田うん、Ko & Edge.Coなどに参加し、2005年より「身体の構造」や「空間や音楽と身体の相互作用」に着目した振付作品を発表する。劇場での公演以外にも美術館でのパフォーマンスやワークショップの開催など、多方面で活躍している。関かおりとの共同振付作品で、横浜ダンスコレクションEX2012「若手振付家のための在日フランス大使館賞」を受賞。

まとめ

からだを持つ感覚を一つずつ丁寧に試すことで、空間を感じると意識が広がったり、周りに対して能動的あるいは受動的に動くことで空間の見え方が変わったり。新しい空間の感じ方を発見するワークショップとなりました。(TM)

参加者の感想

- 「空間」に対して「見せる」「パフォーマンスする」など積極的な視点を持つことで、日常生活の中の「空間」とは違った考え方や感じ方を持つことが出来ました。また、「空間」を眼で見るだけではなく、手や肩など身体で感じることでとても新鮮でした。(20代女性)
- 子どもと楽しく参加させていただきました。「絵を見る場」と思っていた美術館で寝転がるのが出来たのは貴重な体験です。(30代女性)
- よく観察すること、新たな感覚でとらえることのおもしろさを感じました。建築家・設計者の方はこういう風に建物を感じてもらおうと嬉しんだろうなと思います。人や場所に影響されあっていること、無限の情報量が飛び交っていることを痛感しました。(30代女性)





“表現”としての写真 — 柴田敏雄による2回の講評会 —

「与えられた形象 — 辰野登恵子 / 柴田敏雄」展 関連企画

- 開催日時：2012年8月25日(土) 14:00~16:30
2012年9月8日(土) 14:00~16:30
- 参加者：17名 ●対象：高校生以上
- 参加費：無料
- 場所：研修室A,Bほか

概要 「与えられた形象 — 辰野登恵子 / 柴田敏雄」出品作家の柴田敏雄さんを講師に迎えて、2回にわたって参加者の作品の講評を行うワークショップを開催しました。



プログラムの流れ

1 120分

1日目 講師紹介・講評・次回までの課題

写真における“表現”をテーマに、柴田さんによる講評会を行いました。参加者は、1回目の講評会で1人5点ずつ自身の作品を発表し、柴田さんから作品についてコメントをもらおうと同時に、次回までの課題を提示されました。

2 20分

「与えられた形象 — 辰野登恵子 / 柴田敏雄」展鑑賞 柴田氏のギャラリートーク

全員の講評が終わると、展示室に移動して「与えられた形象 — 辰野登恵子 / 柴田敏雄」を鑑賞。柴田さんによるギャラリートークを聞きました。講評会の直後のギャラリートークは、柴田さんの写真についての考えを理解すると同時に、参加者が自分の作品の課題をふり返る良い機会となりました。

1 140分

2日目 参加者の作品発表と講評

2回目の講評会では、1回目の講評会での課題を反映させた作品を発表。作品それぞれに変化が見られました。どの作品からも、柴田さんの1回目の講評を受けて、参加者が自分の課題に挑戦した様子が伺われました。

2 20分

柴田氏によるまとめ

最後に全体に向けて、「答えはいつも自分の中にある」と柴田さん。「わからなくなったときには、自分が今まで撮りためたものを振り返って確認してみることが大切」と、全体にアドバイスを下さいました。



講師



写真家
柴田敏雄
(しばた としお)

1949年東京都生まれ。74年、東京藝術大学大学院油画専攻(修士課程)終了。75年、ベルギーの王立アカデミー写真科に入学し、写真をはじめ。79年帰国。80年代後半より、山間部の土木現場やダムなど、自然と人工物が入り組んだ風景を独自の視点でとらえたモノクローム写真によって、国際的な評価を得る。2004年頃よりカラー作品に移行、新たな展開が注目される。国内だけでなく、海外の多くの美術館に作品が収蔵されている。

まとめ

2回にわたる講評会で柴田さんは、参加者一人ひとりの対話から各々の課題を見出し、的確なアドバイスをして下さいました。写真を撮っている人にとって、展覧会の出品作家に自分の作品を講評してもらう機会は、貴重なものです。そのため、参加者は真剣に話を聞いてメモをとるなど、会場は緊張感に包まれていました。また、自分の作品の課題を認識するだけでなく、他の参加者の写真や取り組み方、それに対する柴田さんの講評を聞いたことが良かったとの声もありました。“表現”としての写真について考えることをテーマとした講評会でしたが、既にそれぞれの“表現”と真剣に向き合っている参加者が集まったため、特に2回目の講評会ではかなり踏み込んだ議論が展開されました。最終的には、技術面だけではなく、写真と向き合う姿勢や、自分の生活と写真との関わり方について学ぶことのできたワークショップとなりました。やや硬派なワークショップでしたが、参加者が持ち帰ったものは予想していた以上に大きかったです。(TM)

参加者の感想

- 多くの人の写真へのアプローチや考え、感性に触れて刺激をいただきました。「一度立ち止まる」という言葉や自身への講評は、とても有意義でした。これから消化していきたいです。(30代男性)
- 自分の撮った写真をふりかえる機会がなかなかなかったので、このワークショップを通して、自分の写真をふりかえる機会ができて良かったです。また、先生の講評、自分だけでなく聞くことができ参考になりました。今回の講評を参考に、これからも写真を楽しく撮っていきたいです。(30代女性)
- 自分の写真はもとより、他の参加者の方へのコメントがとても役立つことばかりで、良い気づきになりました。優れた写真家の方は、言葉も素晴らしいと改めて感じ入りました。貴重な体験をありがとうございました。(40代女性)

材料

- A4サイズ以上の自作の写真5点



1

はじめてのアート — 新聞紙をさわって、きいて、かんじてみよう —

- 開催日時：2012年11月3日(土・祝) 14:00~16:00
2012年11月4日(日) 14:00~16:00
- 参加者：3日/11組25名 4日/12組27名
- 対象：未就学児童(3歳~6歳)親子
- 参加費：無料 ●場所：別館3階多目的ルーム

概要

未就学児を対象にした「はじめてのアート」シリーズの第1弾。日本画家の福井江太郎さんを講師に、3~6歳の子どもたちが保護者と一緒に新聞紙を使って「造形あそび」を体験しました。



2



3



4



5

1
15分

2
30分

3
25分

プログラムの流れ

講師の活動紹介

まず始めに、福井さんが画集を手にとり作品を紹介。福井さんのダチョウの絵を見ながら、どのような鳥か知っているかと尋ねられると、子どもたちは「大きな鳥」「飛べない鳥」と活発に答えました。

造形あそび

そしていよいよ、新聞紙を使った活動開始。ひとり1枚の新聞紙を手に、新聞紙の声を聞きます。静かに耳を傾けると聞こえる、ガサガサという音、それが「新聞語」の「コンニチハ」。

①次に、手に持った新聞紙を小さく丸めます。どこまで小さく、たたく丸められるでしょうか。丸めた後は、新聞紙に「アイロンがけ」。丸めた新聞紙を平らにのばします。

②新聞紙を使って、親子でそり遊びを体験。新聞紙は引っ張る方向によってはとても丈夫で、人を乗せて引っ張っても、破れません。

③さらに新聞紙を縦に、横に、ちぎってみました。ちぎり方のコツをつかんだら、たくさんたくさんちぎって空中にふわっとまきます。

ここで、福井さんからダンボール箱いっぱい、細かくちぎられた新聞紙のプレゼント。頭上から降ってくる新聞紙に、子どもたちからは大歓声。

④新聞紙をできるだけたくさんかき集めて、宙に投げて遊んだ後は、真ん中にかき集めて新聞紙のベッドに寝転びます。

⑤今度は新聞紙を細長くちぎって、ホチキスやセロハンテープで長くつなげ両端を壁に貼ります。部屋全体を使った、大きな作品が出来上がりました「ライオンになって、この新聞紙のジャングルを壊してしまおう」と福井さんが呼びかけると、子どもたちは一斉に「こわしたくない!」と叫びます。一生懸命作った作品を大切にしたいという気持ちが子どもたちに芽生えていました。そこで、みんなでつないだ新聞紙の下を這って競争することに。最後には汗だくになり、新聞紙のシャワーを浴びて、造形あそびを終りました。

感想の発表

造形あそびの後、みんなで集まって、感想を発表しました。福井さんからは保護者に向けて造形あそびが未就学児の年代にとって重要であり、「子どもに表現をする機会をより多く与えてあげてほしい」と呼びかけました。



日本画家
福井江太郎
(ふくい こうたろう)

講師

1969年東京都生まれ。多摩美術大学大学院修了。ダチョウや花をモチーフに、墨や岩絵具を使用して大画面に描いた作品を制作している。主な展示に、2010年「Silent Flowers & Ostriches」(Chelsea Art Museum/アメリカ)、2011年ドイツにて滞在制作・個展(Kreuzherrnsaal/ドイツ・メミンゲン市)、2012年「福井江太郎の花鳥」(愛媛県立美術館)など。2004年文化庁作品買上げ、2006年、2013年紺綬褒章受賞。ライブペインティングなどのパフォーマンスを行うほか、幼児造形教育研究会研究スタッフとしても活動している。

まとめ

「初めて美術館に来た」という子どもが多く参加した今回のワークショップ。参加者はみんな心を開放し、造形活動の中で自ら発見をしていくという、アートの本質に近い体験を親子で共有しました。参加した保護者からは、また開催してほしいとの声が多くあがり、小さな子どもを持つ家庭に美術館の活動を知ってもらおうきっかけにもなったワークショップでした。(TM)

参加者の感想

- 幼稚園では見られない娘のお友達との関わり方を見られました。先生の言われていた、表現する機会を与えてあげる、結果より過程を大事にすることには、気づかされることがありました。2回くらい遊んでみたいと思います。(30代女性:5歳女児と参加)
- 先生のおっしゃるとおり、大人の都合でカテゴライズしたアートではなく、その過程全体が表現の流れであり、自分もそれに気づかされました。ありがとうございます。(40代男性:5歳女児と参加)
- 新聞紙からこれだけ多くのことが展開できるとは、思いもよらなかったもので、さすが福井先生だと思いました。アートの本質というか、基礎になる「心の解放」が体験でき、とても貴重な経験となりました。どうもありがとうございます。(30代女性:3歳男児と参加)

材料

- 新聞紙 ●セロハンテープ ●ホチキス



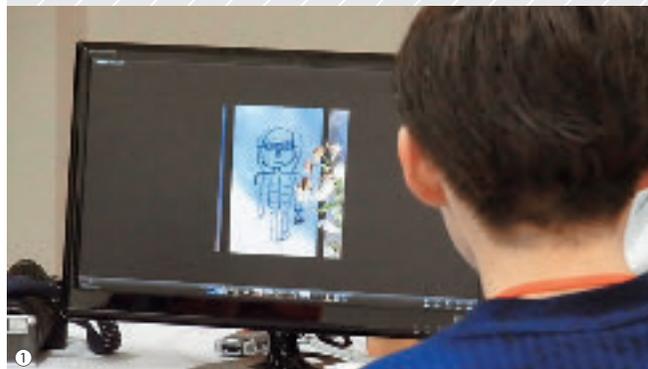
高校生が写し出す、とむらいの時

「アーティスト・ファイル2013—現代の作家たち」展 関連企画

- 開催日時：2013年2月24日(日) 13:00~17:30
- 参加者：5名
- 対象：高校生
- 参加費：無料
- 場所：別館3階多目的ルームほか

概要

高校生と死生観について深く語り合うワークショップ。自分なりの「吊い」を考え、写真にしていき、自分の死生観を問い直します。



プログラムの流れ

1
40分

参加者自己紹介と講師レクチャー

参加者同士の簡単な自己紹介の後、講師の制作方法や作品についてレクチャーがおこなわれました。志賀さんのこれまでの制作では、国内外の様々な場所へ行き、行く先々で見たもの聞いたものを吸収して、そこから浮かんだイメージを物語にして、それを写真にしてきました。志賀さんはそれらの制作はどれも一種の弔いであったのではないかと感じていること、死後の世界は誰も知り得ることのないものであり、自分にとって創造の源となっていると参加者につたえました。①

2
40分

死生観についてのディスカッション

レクチャーの後には、参加者がワークショップに参加した理由や、事前にそれぞれが考えてきた自分なりの弔いの方法について共有しました。参加者それぞれがこれまでに会った死は、身近な人や友人など様々でした。それぞれに経験したことを通しての思索を、講師の志賀さんとともに語り合いました。②

3
110分

物語制作・撮影

これまで自分たちが経験してきた誰かの死についての思いを共有し、また世界中で行われてきた様々な弔いの儀式について教えられ、改めて自分の中の死生観を見つめ直した参加者たち。志賀さんから、「あなただけの『弔い』の物語を考えて、その一場面を写真にしてください」といわれ、「弔い」の物語を考え始めました。どのようにして亡くなった人を「弔い」たいのか。そしてそれがどのような一場面となるのかを考えながら、一人一人志賀さんにアドバイスをもらって、物語をつくりあげます。次に、物語を書き終えた人から、多目的ルームにある材料を使って、自分の頭の中にある「弔い」の物語のイメージを目の前に再現して撮影します。自分がイメージした「弔い」が屋外の撮影がふさわしい場合は、屋外へ出ての撮影。「あまり考えずにシャッターを押し続けて」という志賀さんのアドバイスをもらいながら、自分の納得のいく写真が撮れるまで、参加者は撮り続けます。③④⑤

4
30分

発表

制作を終えると、何枚も撮った写真のなかから、自分が思う「弔い」にふさわしい場面を選び出し、一人一人が考え出した「弔い」の物語と、撮影をした感想を言いました。参加者全員からは、自分が思うような写真が撮れなかった、自分の頭のなかにあるイメージを写真にするのは難しかったという感想がでました。最後に志賀さんから、5年後、10年後にこの写真を見ると今とはきっと違う見え方が出来るからとっておいて欲しい、そして「弔い」について考えた記念日として覚えておいて欲しいというメッセージでワークショップを締めくくりました。

講師



現代美術家
志賀理江子
(しが りえこ)

1980年愛知県生まれ、宮城県在住。2004年にロンドン芸術大学チェルシーカレッジ・オブ・アート・アンド・デザインを卒業。その後ブリスベン、仙台、シンガポール、などで滞在制作を行う。徹底したリサーチを元に制作した写真によるシリーズ『CANARY』などを展開。2008年第33回木村伊兵衛写真賞受賞。おもな個展に「螺旋海岸」(2012年、せんだいメディアテーク)など。写真集に『Lilly』(2007年、アート・ビート・パブリッシャーズ)、『CANARY』(2007年、赤々舎)他

まとめ

初めて会った人に自分の死生観を共有することで新しい死生観を得て、それを写真に写し出すまでの濃い時間を一緒に過ごした高校生5人。大学で写真やテキストを学ぶことが決まっている高校3年生や、これから大学でやりたいことを考えたいと思う高校1年生など、まさに人生を模索している途中の彼らにとって、この日は忘れられない一日となりました。(TM)

参加者の感想

- 死生観という、なんとも抽象的なテーマでのワークショップということで、楽しみ半分、どのようなものになるのか不安でした。しかし今回のこの時間は思った以上の価値があったと思います。たくさん死と生の感じ方に触れ、私の中の死生観がさらに成長したような気持ちになれたこと、とても良かったと思います(18歳女性)
- 与えられたお題、材料、環境、時間で作品を創るという初めての体験を通して改めて写真も表現するというのも見直すことができました。(18歳男性)
- 写真をとる難しさがわかりました。考えている時はとても楽しかったし、思い通りになったけど、作りはじめると思った通りにいなくて考えを形にするのは大変だなと思いました。年が近くても考え方が全然違ったりしておもしろかったです。(17歳女性)



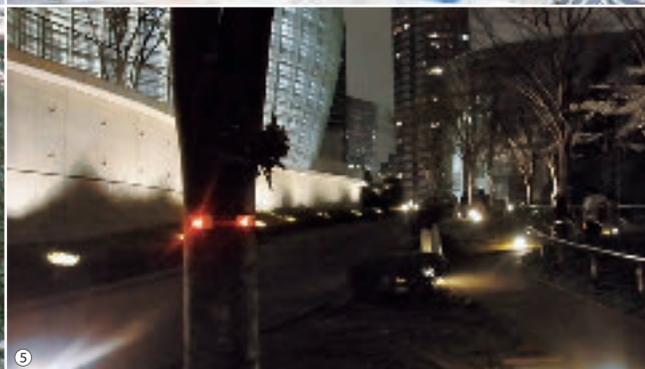


木々に灯す、ちいさな巣をつくろう ～アートナイトでインスタレーションに挑戦

- 開催日時：2013年3月23日(土) 13:00～16:30 「アーティスト・ファイル2013—現代の作家たち」展 関連企画
- 参加者：19名
- 対象：高校生以上
- 参加費：1,000円
- 場所：別館3階多目的ルーム、屋外スペースほか

概要

「六本木アートナイト2013」のプログラムとして、**國安孝昌さんと、国立新美術館の屋外空間を使ったインスタレーションに挑戦しました。**



プログラムの流れ

1 5分

講師紹介

講師の國安孝昌さんは、木や陶ブロックといった素材を積み上げ、空間をダイナミックに変貌させる作品で知られています。「六本木アートナイト2013」では、美術館敷地内の樹木を取り込んだ作品《往く鳥の御座》を制作、展示しています。

2 20分

講師の活動紹介、 インスタレーションの説明

まずは、國安さんから自身の制作活動や、芸術表現の手法の一つである「インスタレーション」についての話を聞きました。展示空間全体を一つの作品として鑑賞者に体感させるインスタレーションにおいては、その空間を異化させる表現、空間の印象を日常とは違ったものにする作品が多く見られます。しかし、「空間と同化するインスタレーションもある。風景に調和し、気付く人だけが作品の存在に気付くという表現もできるのです」と國安さんは言います。今日は、美術館の屋外空間に同化するインスタレーションに取り組みます。

3 100分

制作

講師のお話の後は、國安さんが普段使っている陶ブロックの小片とケヤキの枝を素材として、鳥の巣状の作品を作ります。まず、ケヤキの枝を適当な長さに切って、針金で固定し、土台となる三角錐を作ります。土台ができたら、その上に小枝を放射状に付けていきます。次に、枝を多角形、放射状、多角形、放射状の順番で積み上げて、グルーガンで接着します。さらに、陶ブロックの小片を思い思いのところに取り付けたら、「巣」が完成です。①②

4 55分

屋外で作品設置

出来上がった作品は、美術館の遊歩道周辺にある樹木に設置します。3月下旬のこの日は桜が満開で、木々には新芽が顔を出し始めていました。作品を取り付ける木を決めたら、ネジと針金を使って設置していきます。「桜の木に付けたい」、「姉妹の作品を並べて設置したい」、「遊歩道を上って来る人を出迎えるような角度にしたい」など、参加者たちは作品の見え方や、周りの風景との調和も考えながら、展示作業を進めました。樹木に設置した作品の下に、LEDライトとボタン電池を仕込んだキャプションを取り付けたら、作業完了です。③

5 30分

鑑賞、講評

最後に、全員で作品を一つ一つ探しながら遊歩道を歩き、木々が並ぶ景色とともに作品を鑑賞しました。國安さんからはこんなコメントがありました。「部屋の中よりも外に展示してからの方が、作品が素敵に見えましたよね。それは、作品と場所が分かちがたく一つになるということ。こういうふうになったときに、アートが生まれるのだと私は思います。」④



現代美術家
國安孝昌
(くにやす たかまさ)

講師

1957年北海道生まれ。筑波大学大学院修士課程芸術研究科修了。丸太と陶ブロックを積み重ねたダイナミックな造形作品を国内外で発表、高い評価を受けている。第18回現代日本彫刻展大賞(1999年)ほか、受賞多数。越後妻有アートトリエンナーレや茨城県の「雨引の里と彫刻」展への参加など、里山を舞台にした制作にも積極的に取り組んでいる。近年の主な個展に、「森の竜神」(金津創作の森、2007年)、「静かに行くこと、遠く内省すること」(ギャラリーなつか、2013年)、グループ展に「アーティスト・ファイル2013—現代の作家たち」(国立新美術館、2013年)、「木々との対話—再生をめぐる5つの風景」(東京都美術館、2016年)などがある。

まとめ

「六本木アートナイト」にあわせて開催された本ワークショップは、作品を制作するだけでなく、参加者全員で屋外展示に取り組み、インスタレーションという芸術表現を実践するプログラムでした。國安さんと参加者が作った「巣」は、美術館の敷地内の木々に展示され、周辺の風景と一体となることで一つの作品として完成しました。日が暮れると、美術館の遊歩道周辺のあちらこちらで、巣とともに取り付けられたLEDライトが点滅し、20数個の巣と小さな灯り、そしてライトアップされた美術館が織りなす一晩限りのインスタレーションが、アートナイトの来場者を出迎えました。⑤(NY)

参加者の感想

- とても楽しかったです。國安先生のイメージ(作品)とご本人が全然違っていておどろきました。新たな体験が出来て、良い時間が過ぎました。(40代女性)
- どんなものを作るのか想像できないまま参加しましたが、同じ材料・方法で個性のちがう作品を作り、さらにそれがひとつのinstallationというアートになるプロセスが大変たのしかったです。(30代女性)
- 作品に少しでもふれられるような、めずらしい体験ができてとても感激です。國安さんの人柄にも接することができて、また、他の参加者の作品も味わうことができることも楽しかったです。(40代男性)
- 素晴らしいアーティストの作品に並んで、自分の作ったものが展示されるという、とても嬉しい、貴重な体験ができ、一生の宝物になりました。(20代男性)

材料

- ・陶ブロック ・ケヤキの小枝
- ・針金 ・グルーガン ・ペンチ
- ・LEDライト ・ボタン電池
- ・キャプション用紙
- ・ネジ ・押しピン
- ・ドライバー ・キリ ・脚立



“ハウス・オブ・カード”をつかったワークショップ 「カリフォルニア・デザイン」展×「デザインあ展」共同開催プログラム

- 主催：21_21 DESIGN SIGHT, 国立新美術館
- 開催日時：2013年4月27日(土) 10:00~16:00
- 参加者：2,250名 ●対象：「デザインあ展」来場者
- 参加費：無料(要展覧会観覧券)
- 場所：21_21 DESIGN SIGHT(東京)

概要

チャールズ&レイ・イームズがデザインした「ハウス・オブ・カード」と同形の透明カードにシールを貼って組み立て、「家」を制作しました。



Photo: 21_21 DESIGN SIGHT

Photo: 21_21 DESIGN SIGHT

プログラムの流れ

1



カード配布

今回のワークショップは、対象を限定しない、来場した人が誰でも参加できるプログラムです。「デザインあ展」会場の入口で、「ハウス・オブ・カード」と同形の透明カードを来場者に配布して、参加を呼びかけました。

「ハウス・オブ・カード」とは、アメリカのミッドセンチュリーの代表的デザイナー、チャールズ&レイ・イームズが1952年にデザインした玩具です。鉱物や野菜、色鉛筆、ボタンなど、様々な写真や模様がプリントされたカードの四方には切り込みがあり、切り込み部分に別のカードを差し込んで、立体を組み立てて遊ぶことができます。

2



オリジナルの「ハウス・オブ・カード」の制作

会場の一角に設けられたワークショップ・スペースには、家の形をした木の枠が用意されました。参加者は、透明カードに好きなシールを貼って、オリジナルの「ハウス・オブ・カード」を作ります。テレビの人気番組「デザインあ」の展覧会ということもあり、会場には親子連れの姿が多く見られました。子どもも、大人も、シールを吟味して選び、どこに貼るかをじっくりと考えながらカード制作に取り組んでいました。単純な作業ですが、色や図柄を考える「デザイン」のプロセスをそれぞれ体験する時間となったようです。①②

3



「ハウス・オブ・カードの家」の制作

出来上がったカードは、家型の木枠の中に組み上げていきます。もともと、子どもでも遊べる玩具として作られた「ハウス・オブ・カード」は、カード同士を簡単に組み立てることができます。幼い子どもたちも、自分が作ったカードの切り込み部分を慎重に合わせて差し込み、「家」作りに参加しました。参加者自身がカードを差し込むことで、平面のカードを組み立てて立体を作る「ハウス・オブ・カード」の仕組みも学ぶことができます。一段、また一段と、参加者が作ったカードが積み上げられていき、ワークショップ終了時刻の午後4時には、色とりどりのカードで建てられた「ハウス・オブ・カードの家」が出来上がりました。③④⑤

講師



アートディレクター、
グラフィックデザイナー
岡崎智弘
(おかざき ともひろ)

1981年生まれ。東京造形大学デザイン学科卒。アイルクリエティブ勤務を経て独立。独立前にデザイン事務所勤務と平行して「デザインあ」の制作に携わり、2011年9月よりフリーランスとしてSWIMMINGを設立、印刷物から映像制作までカテゴリを横断したデザインを行う。



デザイナー
studio note
寺山紀彦
(てらやま のりひこ)

日本にてプロダクトデザインを学んだのち、オランダ Design Academy Eindhovenに留学。Jurgen Bey(ユルゲン・ベイ)、Gijs Bakker(ハイ・バック)などに師事。在学中にStudio Richard Hutten(リチャード・ハッテン)、MVRDVにて研修し、2008年に卒業。帰国後 studio noteを立ち上げる。形が奇麗なだけではなくストーリーのある物作りをベースに活動中。

まとめ

「カリフォルニア・デザイン」展と「デザインあ展」の共同開催プログラムとして実施されたワークショップには、子どもから大人まで2,000人以上が参加、透明の「ハウス・オブ・カード」にシールを貼って、オリジナルのカードを制作しました。参加者が作ったカードは、会場に設置された家型の枠に沿って一枚一枚組み立てられ、ワークショップ開始から約6時間後、多くの人のデザイン・アイデアが結集した「ハウス・オブ・カードの家」が完成しました。

カードとシールだけで、こんなにもたくさんのデザインを生み出すことができる。そして、カードをいくつも組み合わせることで、様々な形と大きさの立体物を作ることができる。アイデア次第で「デザイン」の可能性が無限に広がっていくことを、楽しく学ぶワークショップとなりました。

完成した「ハウス・オブ・カードの家」は、ワークショップの様子を写したスライドショーとともに「デザインあ展」の会場内で一週間展示され、来場者に「デザイン」の魅力を親しみやすく伝えました。(NY)

材料

- 「ハウス・オブ・カード」と同形の透明カード
- シール各種
- 木枠



『写真』以前／暗黒を作り出そう

- 開催日時：2013年7月28日(日) 11:00～14:00
2013年8月4日(日) 13:00～16:00
- 参加者：16名 ●対象：高校生以上
- 参加費：1,000円
- 場所：別館3階多目的ルームほか

概要

写真の歴史を深く学ぶとともに、写真が発明される以前のカメラの原理を使ってワークショップ会場そのものをピンホールカメラに見立て、漆黒の空間の中で国立新美術館の姿をフィルムに記録しました。



プログラムの流れ

1
30分

はじめに

講師にお迎えしたのは、写真家として活躍するホンマタカシさん。今回のワークショップは、2週にわたって写真の歴史を学ぶとともに、カメラの原理を文字通り「体感」する機会となりました。

ワークショップの目的とピンホールカメラについての説明

まずは、ホンマさんによるレクチャーからスタート。今回のテーマは、「写真以前」。写真が発明されたのは今からおよそ200年前ですが、それ以前から、小さな穴から暗い室内に差し込む光が外の風景を逆さに映すことはすでに知られていたといいます。「現代では真っ暗闇を体験することはほとんどない。今回は、皆さんで暗闇を作り出し、そこに逆さの像が映ることを体験してほしい」というホンマさんの言葉通り、これから部屋を丸ごとピンホールカメラに仕立てます！

2
120分

会場を暗黒の箱に

ホンマさん持参の8×10カメラに映った像を実際に見て、ピンホールカメラの仕組みがより明快に理解できたところで窓を黒いケント紙と暗幕で覆い、漆黒の空間を作ります。ホンマさんが指定した場所に空けた小さな穴ひとつを除いて、光はもう部屋にはありません。暗闇の中、目をこらすと、窓の外に建つ国立新美術館が壁に浮かび上がります。建物だけでなく、風に揺れる枝や歩行者の姿も！その光景を記録すべく、8×10のフィルムをグリッド状に張り、ピンホールの光を当てて露光させ1日目は終了となりました。

3
50分

写真の歴史についてのレクチャー

一週間後に行われた2日目は、写真の歴史についてのレクチャーで始まりました。写真の発明から絵画との関係、芸術としての写真が作られるに至るまでの経緯、現代写真家の活動などが、ホンマさんの豊かな言葉で語られます。

4
40分

写真完成&質疑応答

そしていよいよ出来上がった写真を鑑賞。自分たちが貼ったフィルムを現像した印画紙にしっかりと映った国立新美術館の姿に、思わず歓声が上がりました。

5
60分

展覧会鑑賞

開催中のアンドレアス・グルスキー展を見学し、写真への理解と関心を一層深めました。

講師



写真家
ホンマタカシ

2011年から2012年にかけて、個展「ニュー・ドキュメンタリー」を日本国内3カ所の美術館で開催。著書に『たのしい写真 よい子のための写真教室』（平凡社）がある。2016年イギリスの出版社「MACK」より、カメラオブスキュラシリーズの作品集『THE NARCISSISTIC CITY』を刊行した。

まとめ

多くの人が小さなデジタルカメラに慣れ親しんでいる現代にあって、ピンホールカメラの原理を、まさにその中に入って体験するという斬新な切り口で行った今回のワークショップ。専門的でありながら親しみやすいホンマさんの講義とともに、写真とカメラの奥深さを知ることができた、大変貴重な機会となりました。(NW)

参加者の感想

- ピンホールカメラ、カメラオブスキュラの仕組みが原寸大の体験を通じてよく理解できた。2日目の写真の歴史も非常に分かりやすく、写真作品について、いっそう興味関心が沸いた。(30代男性)
- ピンホールで撮る写真に、とても感銘を受けました。デジタル化が進む中で、また原点に戻っての時間をかけて取れる写真を体験でき楽しかったです。レクチャーも写真の歴史の流れがつかめておもしろかった。(40代女性)

材料

- ・リスフィルム
- ・印画紙
- ・黒ケント紙
- ・パーマセルテープ
- ・暗幕など





1

あなたのユーモアをイラストにしよう!

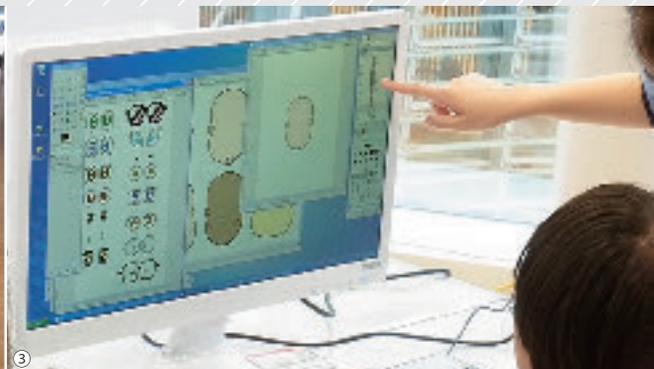
- 開催日時：2013年8月25日(日) 13:00~16:30
- 参加者：16名
- 対象：小学3年生以上
- 参加費：無料
- 場所：別館3階多目的ルームほか

概要

ポップ・アートの世界を、ポップ・アートの手段や発想で体験するとともに、それを参加者が自分の表現として楽しみました



2



3



4



プログラムの流れ

1
30分

2
35分

3
100分

4
40分

はじめに

「アメリカン・ポップ・アート」展をヒントに、見る人をびっくりさせるようなユーモアのある表現を考え、パソコンを使って顔の絵をつくる今回のワークショップ。講師のJUN OSONさんは、8の字型の顔の特徴とするユーモラスな人物のイラスト制作や、アパレルブランドZuccaとのコラボレーションなど、幅広い分野で活躍しているイラストレーター。ポップ・アートは、OSONさんが大きな影響を受けたもののひとつです。

OSONさんによるレクチャー

最初のレクチャーでは、ポップ・アートと、OSONさんご自身のお仕事についてお話いただきました。①

展覧会見学

お話を聞いたあとは、「アメリカン・ポップ・アート」展を全員で鑑賞。レクチャーに出てきた作品を実際に見てその迫力を感じたり、このあとの制作のヒントになる作品を探します。②

制作

別館に戻り、いよいよ制作タイム。OSONさんが用意してくれた、顔の輪郭や目、鼻などを自由に組み合わせるソフトを使い、参加者それぞれが思う「有名な顔」を作ります。一人に一台割り当てられたパソコンで、配置や組み合わせ、色合いに気を配りながら、自分がイメージする有名な顔を、ユーモアたっぷりに表現するためのベストなやり方を模索していきます。③④

発表会

最後は発表会。その人がイメージする「アメリカ人」のプロトタイプから有名映画の主人公、身近な人という限定的なモチーフを描きながら、パーツと色の組み合わせで新たな意味を持たせたものまで、プロジェクトで映し出される作品は実にさまざまな個性にあふれています。OSONさんも驚きを隠せない、楽しい発想にあふれた世界が、そこにはありました。

講師



イラストレーター
JUN OSON
(じゅん おそん)

愛知県生まれ鎌倉市在住。広告を中心にアニメーションや装丁など幅広く活動中。主な仕事にNHK Eテレ「あはれ!名作くん」作画、マクドナルド朝マック広告、キリン「のどごしオールライトスペシャルパッケージ缶」デザイン、ZUCCaとのコラボレーション、TOYOTA「ha:mo」広告などがある。

まとめ

「ポップ・アートのすていところは、もとは漫画や商品なのに、アートとして見る人をびっくりさせること」と語るOSONさん。鑑賞と制作を通してその理念を体験し、ポップ・アートについて考え、他の人の考えにも触れることができた今回のワークショップ。特に制作では、ポップ・アートにより近い表現を体験してもらうため、絵筆に比べて自由が効かないパソコンを使用しました。参加者が慣れない作業に戸惑いながらも、ポップ・アートの手段と発想を自分の表現として楽しめていたのは大きな成果といえるでしょう。(NW)

参加者の感想

- いろいろなパーツをいかにおもしろく組み合わせるか考えるのが、とても楽しかった。(10代男性)
- 顔のパーツを組み合わせると一つの作品をつくるのが楽しかったです。子どもたちの自由な発想がとても刺激になりました。(20代女性)

材料

- ・オリジナル・ヒントカード
- ・PC
- ・グラフィックソフトなど





はじめてのアート —つくって遊ぶ、劇ごっこ—

- 開催日時：2013年11月24日(日) 14:00~16:00
- 参加者：13組34名
- 対象：未就学児(2~6歳)親子
- 参加費：無料
- 場所：別館3階多目的ルーム

概要

小さな子どもを持つ家庭を対象とし、親子で制作と劇ごっこに参加することで、表現することの楽しさを体験してもらいました。



プログラムの流れ

1

40分

はじめに

講師は、「劇団風の子東京」に所属し、主に幼児を対象とした公演を行っている大森靖枝さん。今回は、迷子のおねこちゃんの家族を探すというストーリーで、新聞紙で作ったものを使いながら「劇ごっこ」を行います。「子どもが何かに興味をもっている時の目の輝きなどに気づいてほしい」という大森さんの思いのもと、作る活動も「劇ごっこ」も、すべて親子で行いました。おねこちゃんとその家族は、スタッフが演じます。

お店屋さんづくり

まず新聞紙で自分の好きなお店屋さんをつくりました。このあと行う「劇ごっこ」で、このお店屋さんや並ぶ商店街に、おねこちゃんの家族を探しにいきます。

2

40分

劇ごっこのための準備運動

お店屋さん作りのあと、一旦集合。大森さんをはじめとしたスタッフの自己紹介の後、「な〜んだろな？クイズ」や「うさぎのプーちゃん」のお話を楽しんだり、新聞紙を使った準備運動を行いました。

3

65分

劇ごっこ

すると、どこからともなく鳴き声。なんと、迷子のおねこちゃんが泣いています。家族でお出かけしているうちに、みんなとはぐれてしまったのだそうです。ここで、おねこちゃんのお母さんから、お手紙が。「4丁目のほうに行っています」。みんなで商店街へ向かい、お魚屋さんで、お母さんねこが来なかったか聞いてみます。「見ていないなあ」。八百屋さんに、ケーキ屋さん。いろいろなお店を訪ねます。ここで再び、お母さんからのお手紙が。おねこちゃんの家族は海のほうへ行ったそう。みんなで新聞紙で作った海に潜ります。新聞紙の波で遊んでいると、おねこちゃんの家族が登場。朝から何も食べていないという彼らに新聞紙でおにぎりをつくって、兄弟100匹分の食べ物をおみやげにして、お見送りをしました。

4

15分

大森さんのメッセージ

「みなさん、よくがんばってくれました!」。最後に大森さんから、全力で表現することに挑んだ子どもたちへの労いと、未来に向けてのメッセージをいただきました。

講師



演出家
大森靖枝
(おおもり やすえ)

京都の人形劇団で活動後、1980年に「劇団風の子東京」に入団。主に幼児を対象とした公演活動を展開。子どもたちと自然に遊び、話せるようにと、子どもとして保育園に入園し園児生活を送るというユニークな経験をもつ。芸術教育研究所客員研究員。著書に『からだでワクワク表現あそび』(共著)など。

まとめ

今回のワークショップは、小さな子どもを持つ家庭に美術館を身近に感じてもらうと開催しました。参加者は「劇ごっこ」中、恥ずかしさや気負いを感じることなく、自然に表現活動を楽しむことができました。「これからもっと美術館の活動に親子で参加したい」という感想も多く、表現を楽しみ美術に親しむ心を、家庭内で育んでもらうきっかけとなりました。(NW)

参加者の感想

- うさぎさんのお話が楽しかったです。「劇ごっこ」ということで4歳児にできるのか?と不安もありつつの参加でしたが、普段の子どもの「ごっこ遊び」の延長でストーリーに沿った「役」ができていて、なるほど、と思いました。(30代男性:4歳男児と参加)
- いつの間にか劇に参加している設定がとても楽しかったです。新聞紙にこれほどの可能性があるとは…見立てて何かを作ったり、やぶって皆で海をつくって泳いだり…とても楽しかったです。(30代女性:4歳男児と参加)

材料

- 新聞紙
- 広告チラシ
- セロハンテープなど





折りジナルフェイスをつくろう!

「みる・きく・あそぶ イメージの力 ウィークエンド」特別プログラム

- 開催日時：2014年3月8日(土)
11:00~12:00、13:30~14:30、16:00~17:00
- 参加者：133名(3回合計) ●対象：どなたでも
- 参加費：無料
- 場所：1階ロビー

概要

COCHAEのデザインによる、折り方次第で無限の
パターンの「顔」ができる折り紙を折って、オリジナ
ルの仮面をつくるワークショップを開催しました。



プログラムの流れ

- 1 10分
- 2 10分
- 3 20分
- 4 20分
- 5 10分

1時間のプログラムを1日3回実施。内容は各回とも同じ。

ワークショップ開始

「イメージの力 国立民族学博物館コレクションにさぐる」展の開幕記念イベント「みる・きく・あそぶ イメージの力 ウィークエンド」の初日、COCHAEによる折り紙のワークショップが、誰でも無料で出入りできる1階ロビーを会場に行われました。今回のワークショップで使用するのは、「グラフィック折り紙」と呼ばれる、絵柄が入った折り紙です。無地の折り紙と違い、折っていくと、紙の形だけでなく、表に現れる絵柄も変化します。国立民族学博物館の大ファンだというCOCHAEが、「イメージの力」展にあわせてデザインした、ワークショップ特別仕様の折り紙を使って、オリジナルの「顔」の仮面を作ります。①

ウォーミングアップ

最初に、武田さんの説明を聞きながら「福助」と「鶴」を折って、ウォーミングアップをしました。日本人にとってなじみ深い「折り鶴」には、たくさんの折り方の要素が詰まっているそうです。②

小さな「折りジナルフェイス」を折る

大判の折り紙で仮面を作る前に、まずは小さなサイズの折り紙を使って、いろいろな「顔」を折りました。折り紙には、目や鼻、口のような絵柄が入っていて、縦、横、ななめと、折るたびに違う「顔」になります。折った「顔」を参加者同士で見せ合って、「変な顔!」「かっこいい!」「なんかこわい…」など、楽しげに語りながら手を動かすうちに、だんだん複雑な折り方もできるようになっていきました。

大きな「折りジナルフェイス」を折る

作りたい「顔」が大体決まったら、いよいよ大きなサイズの折り紙を折って「折りジナルフェイス」の仮面を作ります。手のひらサイズの折り紙と違い、大きな折り紙は一か所を折るだけでも大変です。参加者は軸原さんと武田さんに相談しながら折る作業を進め、気に入った「顔」になるまで何度も紙を折ったり広げたりしていました。③④

「折りジナルフェイス」をつけて撮影

「折りジナルフェイス」の仮面が完成したら、顔につけて、会場の一角に設けられた撮影コーナーで記念写真を撮りました。また、写真は参加者自身のスマートフォンや携帯端末で撮影してもらい、展覧会Facebookへの投稿を呼びかけました。怪獣みたいな顔、犬みたいな顔、自分によく似た顔、兄弟で全然違う顔…。ひとつひとつ違って、それぞれに面白い、たくさんの「折りジナルフェイス」が出来上がりました。「無限の折り方があるから、折り紙って、きりがありません。家に帰ってからでも、ぜひ折り紙を楽しんでみてください。」という軸原さんの言葉で、ワークショップは終了。参加した子どもたちのほとんどが、「折りジナルフェイス」の仮面をかぶったままで帰っていきました。⑤



デザイン・ユニット
COCHAE
(コチャエ)

講師

「あそびのデザイン」をテーマに活動する軸原ヨウスケ、武田美貴によるデザイン・ユニット。2003年結成。グラフィック折り紙の制作をはじめ、新しい視点を取り入れたデザインによる玩具や雑貨の開発、出版企画、商品企画、展示など幅広い活動を行っている。ブックデザインを手がけた『猫のバラバラボックス』(青幻舎)が造本装幀コンクール2013審査員奨励賞受賞。折り紙バスル「ファニーフェイスカード」がグッドデザイン賞2008受賞。2014年1月~3月、国立新美術館地下1階SFTギャラリーで「DARUMA」展を開催。

まとめ

この日、3回開催されたワークショップは各回とも満席となり、合計133人が参加しました。世代や客層も幅広く、中には初めて折り紙を体験するという外国人来館者の姿もあり、一枚の紙だけで、年齢や国籍を問わずに誰もが楽しむことができる「折り紙」の可能性を実感する一日でした。
館内のパブリックスペースを会場に、誰でも自由に参加ができるスタイルで行うワークショップは、今回が初の試みでしたが、参加者からは「こんな美術館の楽しみ方があるのだと知った」「家族と一緒に参加できてよかった」「また開催してほしい」といった声が聞かれ、美術館に親しみきっかけを幅広い世代に提供するとともに、ロビーを行き交う来館者に美術館の活動を広く周知する効果ももたらす、有意義なプログラムとなりました。(NY)

材料

- 折り紙カード(120mm×120mm、裏面にワークショップ開催情報を印刷)
- 大型折り紙(420mm×420mm)
- 既製の折り紙2種(鶴、福助)
- セロテープ ・輪ゴム ・クリップ





わたしみんなめぐるイメージ —世界のものと向き合おう—

「イメージのカー国立民族学博物館コレクションにさぐる」展 関連企画

- 開催日時：2014年3月15日(土) 11:00~16:30
3月16日(日) 11:00~16:30
- 参加者：3月15日/22名 16日/8名
- 対象：3月15日/中学生以上 16日/小学4~6年生
- 参加費：無料 ●場所：研修室A,B、企画展示室2E

概要

研究者である講師陣とともに作品を鑑賞し、他者との会話を通じて、様々なものの見方があることを体験しました。



プログラムの流れ

1
20分

はじめに

人々がつくり出した古今東西の様々なものを前にしたとき、私たちが抱く印象に共通する点はあるのでしょうか。「イメージのカー国立民族学博物館コレクションにさぐる」展にあわせて開催された今回のワークショップでは、参加者が展覧会を企画した6人の研究者たちと一緒にものの見方をさぐる体験を、対象を変えて2日間行いました。

概要説明、自己紹介

まずはイントロダクション。講師、スタッフ、参加者が輪になって座り、自己紹介をしながら緊張をほぐします。皆さん終始笑顔で、和やかにワークショップが始まりました。①

2
60分

作品鑑賞

展示室に入って、実際に作品を鑑賞します。鑑賞するのは、研究者である講師陣が事前選んだ6点。参加者はこの中から自分が特に気になる1点を選びます。様々な国と地域で作られた、見れば見るほど不思議で、謎めいた作品たち。これは何だろう?何のためのものだろう?—あっ、よく見ると、色んなものが組み合わせられてひとつのものができている…。鑑賞してみて疑問に思ったこと、面白いと思ったこと、発見したことを、どんどんカードに書き込んでいきます。②③

3
60分

対話鑑賞と講師によるレクチャー

ここで一旦研修室に戻って、「疑問カード」、「発見カード」を、自分が選んだ作品の写真の周りに貼っていきます。何枚ものカードで、壁はたちまちいっぱい。ひとつの作品に対して、ある人が怖い、気持ち悪いと感じたものを、別の人はコミカルで楽しいと感じることも。作品の意味や用途、目的に着目する人もいれば、形態や素材、技法に興味を持った人もあり、関心の幅は実に様々。講師陣はその幅の広さに注目し、作品の特徴に改めて言及しながら鑑賞を深めていきます。④

4
50分

展示室で「仲間」探し

全員での対話と鑑賞で気づいたことを受けて、もう一度展示室へ。今度は、6点の中から選んだお気に入りの作品から感じられる印象をもとに、「仲間」の作品を2点探します。お気に入りの作品の「仲間」と自分が思う2点をよく見てワークシートにスケッチし、3つの作品に「仲間」としてのタイトルをつけます。⑤

5
40分

発表会

最後は、「仲間」の発表会。どうして仲間だと思ったのか、どんなタイトルをつけたのか…。着目点の多様さに比例して、どのタイトルも実にユニークなものでした。

講師

- 国立民族学博物館 教授
吉田憲司
(よしだ けんじ)
- 国立民族学博物館 助教
斎藤玲子
(さいとう れいこ)
- 国立民族学博物館 准教授
山中由里子
(やまなか ゆりこ)
- 国立民族学博物館 准教授
上羽陽子
(うえば ようこ)
- 国立新美術館 主任研究員
長屋光枝
(ながや みつえ)
- 国立新美術館 研究員
山田由佳子
(やまだ ゆかこ)

まとめ

他の参加者との交流を通じて、人それぞれの視点を知ることや、研究者との対話からものが生み出された背景に触れた今回のワークショップ。参加者にとって、自分なりのものの見方を深める一日となりました。(NW)

参加者の感想

- 1つのものをじっくり見られたので良かったです。もう一度来て、朝から夕方までじっくり見たいです。(10歳女子)
- いろいろな民族があること、文化がそれぞれ違うことが面白いと思った。勉強になった。(12歳女子)
- とても楽しい時間を過ごすことができました!もっと自分の発想力や着眼点を養っていきなりたいと思いました。(10代女性)
- もっと新しい視点と一緒に作っていく方法を教えていただけて大いに刺激を受けました。ちょっとモノの見方や考え方が変わるかも…!(20代女性)

材料

- ワークシート ●疑問カード ●発見カード
- クリップボード ●鉛筆など





鳥ならざる鳥を描く — 逆から思考する、絵画 —

「中村一美展」関連企画

- 開催日時：2014年5月10日(土) 11:00~16:30
- 参加者：27名
- 対象：小学5年生以上
- 参加費：無料
- 場所：別館3階多目的ルームほか

概要

中村一美さんを講師に迎えて、展示室でのギャラリートーク後、「鳥ではない鳥」について考え、色鉛筆やペン、オイルパステルなどを使って絵に表すワークショップを開催しました。



プログラムの流れ

1
40分

「中村一美展」鑑賞

はじめに、中村一美さんのギャラリートークを聞きながら、「中村一美展」を鑑賞しました。ものの存在を、「鳥」という姿を借りて表現しようとしている中村さん。鳥とは何か問うことで、本質とは何か探り、同時に型を使って、絵画の色彩や形、筆触の展開を試みようとしているそうです。

2
30分

鳥についてのお話

ギャラリートーク後、多目的ルームで中村さんからさらに鳥についてのお話を聞きました。ジョットの《鳥に説教をする聖フランチェスコ》を例にして、「この作品の中の鳥とは何か」という中村さんの問いがありました。その問いに対して参加者からは、「人間」、「天使」、「自分」などの答えが返ってきました。中村さんの解釈では「他者」であるそうですが、このように様々な解釈が可能であること、そしてその精神の在り方がその人にとって意味があることの大切さについてお話がありました。①

3
90分

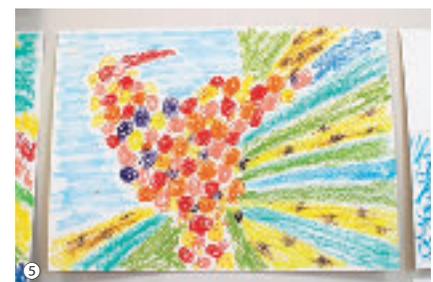
制作

鳥についてのお話を聞いたあとに、色鉛筆、オイルパステル、ペンなどの描画材料を使って、「鳥ならざる鳥」を描きます。人間、天使、自分自身、鳥のようにすぐに忘れてしまうものの象徴など、参加者が様々な解釈した「鳥ならざる鳥」が描かれていきます。②③④

4
90分

発表と講評

90分の制作の後、作品の発表・講評を行いました。色のないヒヨドリをあえてカラフルに描いた作品や、サクラ文鳥とオカメインコの色とかたちを入れ替えて描いた作品、鳥になることを選ばなかった生物を描いた作品など、様々な解釈された鳥の作品が発表されました。中村さんは、「絵は絵だけの生命を持っているので、時間をかけるとよくなる」と、絵画についてコメントされていました。⑤⑥



講師



画家
中村一美
(なかむら かずみ)

1956年生まれ。東京芸術大学大学院修士課程修了(油画専攻)。1980年代始めより発表を開始。最初、「Y型」と呼ばれるY字形のモチーフによる表現主義的な絵画作品によって注目された。続いて、「斜行グリッド」、「開かれたC型」、「連差一破房」、「破庵」、「採桑老」、「織桑鳥(フェニックス)」、「存在の鳥」、「聖」などのシリーズを相次いで制作、今日における絵画空間とその意味性についての探求を、精力的かつ持続的に展開しており、その制作点数も、絵画だけで1400点を超えている。国内では、現代日本を代表する画家として数多くの個展・グループ展に参加し、主要な美術館に作品が収蔵されている。海外では、近年アメリカで個展を開く。また、自らの絵画制作についての理論的なものを中心に著述も多く、『透過する光 中村一美著作選集』(2007、玲風書房)にまとめられている。

まとめ

「鳥ではない鳥」とは何か。そもそも、「鳥」とは何であるのか。今回のワークショップは、ものの存在をじっくり考え、普段は当たり前だと思っていることを改めて考える哲学的な課題でした。参加者は「難しい」と口にしつつも、考えることを楽しみながら、中村さんから投げかけられる普遍的な課題に向き合う機会となりました。(MS)

参加者の感想

- 絵を描くことが普段あまりないので、頭で考えてそれを形にする作業が楽しいなと思いました。「鳥ならざる鳥」を考えると、余計わからなくなって、深いテーマだと思います。(40代女性)
- やっぱり、デッサンや色や画材の使い方をもっと学んでみたいと思った。美術の世界は、文学の世界と違って、言語の制約がないところがうらやましいなあ。(20代男性)
- 画材を手にとったのが中学生以来でどうなるかと参加前は思っていましたが、中村さんのお話で皆さんの意見を聞くうち、描くことに没頭できました。絵画を見るうえで実作者の観点を知ることは大いに役立つと思います。貴重な機会をありがとうございました。(30代男性)
- 自分の本当の姿を1つ発見できました。すごく満足で、そこをもっと深く見つめていける勇気をもらいました。(40代女性)

材料

- 色鉛筆
- ペン
- オイルパステル
- 画用紙



2.5D 着られるイラスト バレエ・リュス ペーパーチュニックコレクション2014

- 開催日時：2014年7月26日(土)13:30~17:00
- 参加者：15名
- 対象：小学6年生以上
- 参加費：1,000円
- 場所：別館3階多目的ルームほか

「魅惑のコスチューム：バレエ・リュス展」関連企画

概要

「魅惑のコスチューム：バレエ・リュス展」から発想したブランドのコレクションとしてのペーパーチュニックを、1人1枚制作するワークショップを開催しました。



プログラムの流れ

1

10分

レクチャー

はじめに、高木先生からバレエ・リュスとファッション界の関わりについてレクチャーがありました。シェヘラザードからインスパイアされたドレスを作ったポール・ポワレ、ドレスからコルセットを取り去り近代的な女性の服をデザインしたシャネル、イヴ・サンローランやクリスチャン・ラクロワ、ジョン・ガリアーノ、ジャン・ポール・ゴルチエなどのブランドが紹介されました。①

2

15分

ワークショップの説明

ダフネさんから、具体的にどのようにワークショップを行うのか、説明がありました。今回のワークショップで肝心なのは、「コレクション」について理解することです。コレクションを行うためには、テーマ設定、ヴァリエーション、共通点を欠かすことが出来ないそうです。中でも、ヴァリエーションと共通点のバランスを取るのがポイントになるとお話されていました。

3

45分

「バレエ・リュス展」の鑑賞

レクチャーの後、5人1組でグループワークを開始します。展示室では、コスチュームを前にスケッチを行います。これらの観察は、コレクションにどのように生かされるでしょうか。

4

90分

制作

グループごとにディスカッションを行い、A4サイズの下図にアイデアを描き出して、これから行うコレクションとしての統一感を確認します。バレエ・リュスのコスチュームのかたちの特徴や色の使い方などを参考にして、自分たちのコレクションに取り入れたい要素を整理しながら、かたちにしていきます。②③④

5

45分

撮影

完成したペーパーチュニックを壁に貼って撮影し、同じグループ内で実際に身につけてペーパーチュニックコレクションを発表しました。⑤



文化学園大学 教授

高木陽子

(たかぎ ようこ)

講師

文化学園大学、大学院生活環境学研究科教授、修士課程グローバルファッション専修プログラムディレクター。お茶の水女子大学で衣服制作と美術史を学び、同大学院博士課程人間文化研究科(比較文化学)単位取得満期退学後、ブリュッセル自由大学文学部芸術学考古学科博士課程にて博士号(芸術学・考古学)取得。文化ファッション大学院大学教授を経て、現職。ファッションにかかわる人とモノとアイデアが国境やジャンルを超え、新たな文化を生み出す歴史と現状に興味をもっている。

Daphne Mohajer-Va-Pesaran (ダフネ・モハジャヴァペサラン) (カナダ)

非常勤講師。

Athena Chen (アテナ・チン) (台湾)、Nigel Newhook (ナイジェル・ニューフック) (イギリス)、Pooja Chadha (プージャ・チャダ) (インド)、Rebecca Thomas (レベッカ・トーマス) (イギリス)

まとめ

本来は立体である衣装を、平面の紙に描いたペーパーチュニック。それを着ると、平面的な要素を保ちながら立体になり、その効果を利用した、平面と立体の間、まさに「2.5D」のコレクションが完成します。共通性を持ちつつ、個々のチュニックの個性が光る仕上がりとなり、少し非日常なファッション界のクリエイションを楽しみ、個々の表現とデザインのあり方について考える機会となりました。(MS)

参加者の感想

●初めて会った中、グループワークで作品を制作することが難しい反面おもしろかったです。ディスカッションではなかなかまとまらなくても実作の制作の中でおたがいを理解出来る過程を体験することができました。美術ならではの体験だと思えます。(30代女性)

●時間内に制作するだけでなく、ちょうどよい人数でワークができてよかった。切り貼りできるもの、使えるものは、展示をみる前にわかるとアイデアを考える楽しさがあつたと思う。ビデオを流していて見ながら楽しめた。楽しいアドバイス、プログラムを考えて下さりありがとうございました。(30代女性)

材料

- チュニックの形に切った厚紙
- 色鉛筆
- ペン
- クレヨン
- コピック
- 絵具
- 模様が印刷された紙



アート de じぶんえほん

- 開催日時：2014年10月26日(日) 13:00~16:00
- 参加者：18名
- 対象：小学3年生~高校生
- 参加費：300円
- 場所：別館3階多目的ルーム

概要

「チューリヒ美術館展」に出品されている絵画作品のコピーを素材に、自分自身を主人公にした物語を発想して、オリジナルの絵本を制作しました。



プログラムの流れ

- 1 5分
- 2 30分
- 3 20分
- 4 10分
- 5 90分
- 6 25分

講師紹介、「じぶん写真」の撮影についての説明

最初に、なかがわさんから、絵本作家の仕事についてのお話がありました。絵本を見せながら、絵本が15の見開きでできていることや、完成までに多くの時間を要することを話すなかがわさん。子どもたちに、「今日は3つの見開きの短い絵本を作ります。せっかく美術館でやるのだから、きれいな絵をいっぱい使って作りましょう。」と語りかけました。

「じぶん写真」の撮影

今日子どもたちが作る絵本の主人公は、「自分」です。早速、絵本の主人公となる「じぶん写真」を撮影しました。子どもたちは4,5人のグループに分かれて、正面、右歩き、左歩き、フリーポーズの4つの写真を撮りました。①

絵本の特徴や作り方の説明、読み聞かせ

次に、なかがわさんから絵本が印刷されて製本されるまでのお話と、絵本の読み聞かせがありました。プロの絵本作家の語り口に、全員引き込まれました。②

絵本の台紙作り

制作の前に、まずは絵本の台紙を作ります。約79cm×55cmの2種類の書籍用紙から、一枚を選び、「マジック折り」と呼ばれる折り方で折り畳み、見開き3ページ分の冊子の台紙を準備しました。

絵本の制作

今回、絵本作りの素材にするのは、「チューリヒ美術館展—印象派からシュルレアリスムまで」に出品されている絵画作品が印刷された、大量のコピー用紙です。子どもたちは、どんな物語を創作するか考えながら、絵本に使う作品を数枚選び、自由に切り抜き、台紙に貼っていきます。主人公には、先ほど撮影した「じぶん写真」を切って使いました。主人公の写真と絵画作品を組み合わせて、見開き3ページ分の物語が出来たら、最後に表紙と裏表紙を作って絵本の完成です。表紙に載せるタイトルは、あらかじめ用意してあった「あいうえお表」から、イメージに合ったフォントを切り取って貼り付けました。③④

発表、見せ合いっこ

参加した子どもたちのうち2人が、出来上がった絵本を全員の前で発表しました。その後、全員の絵本を見て回る時間を設けました。なかがわさんからは、「みんな、予想をずっと超えたことを見せてくれて、びっくりしました。『チューリヒ美術館展』を、今日作った絵本を持って観に行ったら、今までとは違う目で絵を見られると思います。」とのコメントがありました。⑤



絵本作家・翻訳家
なかがわちひろ

講師

1958年生まれ。東京藝術大学美術学部芸術学科卒業。文を書いた絵本に『おたすけびと』(徳間書店)、『プリンちゃん』(理論社)、作絵の絵本や童話に『のはらひめ』(徳間書店)、『天使のかいかた』(日本絵本賞読者賞受賞/理論社)、『かりんちゃん十五人のおひなさま』(野間児童文芸賞受賞/偕成社)、『カモのきょうだい クリとゴマ』(アリス館)、翻訳作品に『ふしぎをのせたアリエル号』(徳間書店)、『ちいさなあなたへ』(主婦の友社)、『どうぶつがすき』(日本絵本賞翻訳絵本賞受賞/あすなる書房)など著作は150冊を超える。また、子どもが描いた絵についてユニークに解説したエッセイ『おえかきウォッチング 子どもの絵を10倍たのしむ方法』(理論社)もある。

まとめ

「素晴らしい美術作品を見るだけでなく、子どもたち自身の世界へと引き寄せてほしい。」と、ワークショップの企画準備をしながら、なかがわさんは語っていました。ワークショップに参加した子どもたちは、絵本作りを通じて、絵画を自分の世界の一要素として捉え、作品コピーを通じて、主人公の自分と美術作品が親しげに交じり合う物語を創造しました。その様子を目撃した大人たちにとっては、子どもと絵画作品との関係の構築について見つめ直す機会ともなるワークショップでした。(NY)

参加者の感想

- 自分にしかできない本ができたのでよかったです。またやりたいと思いました。(9歳女子)
- 自分でかんがえがうかんできてじぶんでつくれるからとてもたのしい。(9歳男子)
- 今まで、有名な絵を切ったりしたことがなかったので、その有名な絵を使って自分の絵本が作れてとても楽しかった!また機会があればやりたい!(11歳女子)
- 絵から色々想像して、文字を使わず、絵本をつくることができるともおもしろかったです。(13歳女子)
- 普段はできない体験ができ楽しかったです。名画の中に自分を取り込んでつくった絵本は大切にしたいと思いました。(13歳女子)

材料

- ・用紙2種
- ・作品を印刷したコピー用紙
- ・リサイクル箱
- ・吹き出し用紙
- ・あいうえお表
- ・ハサミ
- ・のり
- ・絵本
- ・色校正紙
- ・デジタルカメラ
- ・スキャナー付きプリンター



はじめてのアート 絵描きさんといっしょに、描く、つくる!

- 開催日時：2014年11月22日(土)10:30~12:30、14:00~16:00
11月23日(日)14:00~16:00
- 参加者：22日10:30~12:30/19組42名 14:00~16:00/21組47名
23日14:00~16:00/20組48名
- 対象：22日/未就学児(3~6歳)親子 23日/小学1~4年生親子
- 参加費：無料
- 場所：別館3階多目的ルーム

概要

画家の堂本右美さんを講師に迎え、未就学児(3~6歳)および小学1~4年生とその保護者を対象に、大人の価値観にとらわれない子どもの表現や、子どもの創作活動との寄り添い方について考えるワークショップを開催しました。



1

85分

制作

ワークショップ受付を済ませた親子から、どんどん制作を始めます。机の上には、プラスチック容器に入った赤・青・黄・白・黒の5色の絵具と、白い画用紙、糊、紙粘土、毛糸やリボン、包装紙など身の回りにあるような素材が入られた箱が置かれ、絵具の容器にはそれぞれに筆がさしてあります。実は、これは堂本さんがご家庭でお子さんと一緒に実践していた絵具の使い方。あらかじめポスターカラー絵具を濃くたっぷり溶いておき、容器に入れて蓋をします。蓋には筆用の穴だけが開いていて、容器を倒しても絵具がこぼれにくい上、次の日になっても乾きません。

今回のワークショップでは、子どもが自分でやりたいことを見つけて、発展させていくよう促すことがねらいです。大人は、やり方を教えるのではなく、子どもの「できた」「みつけた」に共感するよう心がけます。

ワークショップ中、はじめから終わりまで絵を描いていた子もいれば、立体をつくり始めた子、中には、ひたすらハサミで色紙を切り続ける子も。眺めていると、その子の興味や得意なものが窺えます。

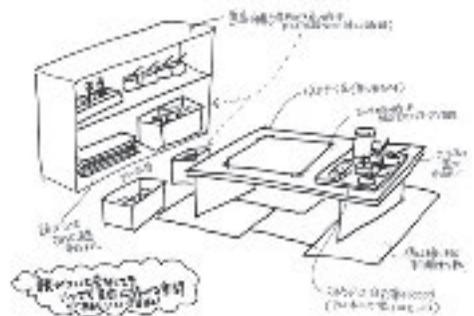
2

35分

保護者に向けたお話

子どもたちが、制作に集中してきたところで、堂本さんから保護者だけを集めてお話がありました。ご自身の子育ての経験をもとに、子どもの心に寄り添うことがいかに必要であるかを集まった保護者に語りかけました。もし子どもが助けを求めてきたら、その子の中にあるものを引き出す問いかけをするのだといいます。例えば、犬の絵はどのように描くのか聞かれた場合は、どんな犬を描きたいのか、その子の思う犬はどのような犬なのか、子どもから聞き出すそうです。決して、犬の描き方を教えるはいけなとお話しされていました。

プログラムの流れ



講師



画家
堂本右美
(どうもと ゆうみ)

1960年パリ生まれ。多摩美術大学絵画学科卒業後、クーパー・ユニオン芸術学部(ニューヨーク)卒業。1990年、佐賀町エキジビット・スペース(東京)での初個展以来、2011年 個展「いきる」(横須賀美術館)、2013年「プレイバック・アーティスト・トーク展」(東京国立近代美術館)など、国内外の数々の展覧会に参加。1995年と1999年にVOCA展奨励賞受賞、2008年に第19回タカシマヤ美術賞を受賞。東京ミッドタウンのパブリックアートや企業コレクションのための制作も多数手がける。作品は、国立国際美術館、高松市美術館、東京国立近代美術館、広島市現代美術館などに収蔵されている。

まとめ

一般的に、年齢が上がるにつれて、絵を描くことに対する苦手意識を持つ子どもが増え、やがては美術そのものが嫌いになり、美術館を敬遠してしまうことがあります。そこで、今回のワークショップでは、家庭で美術を身近に感じることができるといえる工夫を堂本さんと考えました。

保護者には、上手い絵をほめるのではなく、子どもの全ての表現に対して、決して否定せず、指示もせず、ただ丁寧に観察して認める、ほめるといったことを徹底して行ってもらいました。保護者がしっかりと子どもに寄り添うことで、子どもが自信を持って活動し、表現の方法を自分で発見し、解決する力を身につけさせる「場」づくりを学ぶ機会となりました。(MS)

参加者の感想

- 子どもがすごく早いペースで描いていくので驚きました。いつもつい指示してしまうのですが、最初に子どもに茶色の作り方を聞かれたときに、スタッフの方に止められて、自由に子どもが描くを見て。普段の私の態度も気を付けてみようと思いました。(30代女性:3歳男児、5歳男児と参加)
- 非常にためになりました(両親も)。子どもに自由にになれる場を整えるのも親の役割、と感じました。(30代男性:5歳女児と参加)
- 久しぶりにたっぷりの時間を費やして楽しんでいる様子でした。空想力を手を動かして表現できる良い機会になり、親もその姿を見て良かったです。あわただしい日々でなかなかこのようなよい場がなかったので、とても嬉しい時間でした。(40代女性:8歳女子と参加)

材料

- 絵具 ・画用紙 ・糊 ・紙粘土 ・毛糸
- リボン ・包装紙 ・古着
- 汚れてもよい服(参加者持参)



彫刻と絵画をめぐるワークショップ ～4人の色／9回のコップ～

- 開催日時：2015年1月25日(日) 13:00～16:30
- 参加者：20名
- 対象：中学生以上
- 参加費：300円
- 場所：別館3階多目的ルーム

概要

富井大裕さんと近藤恵介さんを講師に迎え、紙と絵具と紙コップを用いて、彫刻と絵画の関係を追体験し、この2つの分野への理解を深めるワークショップを開催しました。



プログラムの流れ

1
20分

レクチャー

まずは、作品を作る上で考えてきたことを富井さんと近藤さんが話してくれました。2人がワークショップを始めた経緯を参加者全員で聞いているうちに、これから何が始まるのだろうという期待が膨らみます。

2
40分

制作① 絵画パート

今回のワークショップは、制作の時間が3部構成になっており、4人1組のグループで作業を進めます。1つ目の制作である絵画パートでは、参加者たちがワークショップ当日に着てきた服の色を忠実に再現し、紙を4色の色に塗り分けます。

◆絵画パートのルール

- ①紙を塗り分ける色は、当日身に着けている衣服(装飾品、靴なども含む)から4色を選ぶこと。
- ②自分が身に着けているものではなく、グループ内の別の人の衣服から色を選択しなければいけません。

3
45分

制作② 彫刻パート

次は2つ目の制作である彫刻パートです。3個の紙コップにハサミで9回切り込みを入れ、さらに、9カ所の接点を持つ彫刻をつくります。

◆彫刻パートのルール

- ①紙コップを切るときに、切り離してはいけません。
- ②紙コップ3個の切る回数の合計が、9回になること。
- ③紙コップは、9カ所接することで1つの彫刻になること。

疑問に思ったら、すぐに質問しましょう。たとえば、紙コップを切る回数は、9回以下ではいけないの?と質問をすることで、9回以下でも以上でもいけないことが参加者全員で共有できます。

4
30分

制作③ 絵画パート+彫刻パート

次に、絵画パートで塗り分けた紙をグループ内で切り分け、彫刻パートでつくった彫刻を覆います。

◆紙を切り分ける時のルール

- ①切り分ける分量は自由。
- ②塗った4色すべてが入っていること。

5
45分

発表と講評

近藤さんと富井さんに国立新美術館の南副館長を加え、3名による、講評が行われました。じっくり鑑賞しながら、意見を交わしていると、自分が意図していることと、見た人の意見の違いから、新たな発見が生まれます。参加者の中には、日常的に作品制作を行っている方も多く、あえて彫刻的ではないことを考えながら、ワークショップに参加したとコメントする方もいました。

講師



美術家
富井大裕
(とみい もとひろ)

1973年新潟県生まれ。既製品に最小限の手を加え構成し、その製品の用途・意味から解放された素材の条件を構造として「彫刻」のあらたな可能性を模索する。「横浜トリエンナーレ2011」(横浜美術館、神奈川、2011年)、「MOTアニュアル2011」(東京都現代美術館、2011年)、「ニイガタ・クリエーション 美術館は生きている」(新潟市美術館、2014年)等に参加している。



画家
近藤恵介
(こんどう けいすけ)

1981年福岡県生まれ。2007年東京芸術大学美術学部絵画科日本画専攻卒業。日本画の技法を軸に、絵画を描き継ぐことで絵画のことを知り、そのことから跳躍を試みる。近年では、小説家の古川日出男、美術家の富井大裕などと、継続的に共同制作やワークショップをおこなう。個展に『12ヶ月のための絵画』(MA2ギャラリー、東京、2014)など。作品集に『12ヶ月のための絵画』(HeHe、2014)がある。

まとめ

日本の仏像の制作手順から着想を得た今回のワークショップ。分業による制作工程を追体験することで、かたちを作る＝彫刻と、色を塗る＝絵画の関係について、ワークショップという形式で彫刻と絵画についてとことん向き合い、その歴史についてじっくりと考える機会となりました。(MS)

参加者の感想

- 今回のようなワークショップに参加するのは初めてだったのですが、自分を見つめ直す良い機会になりました。大学で彫刻を学んでいるのですが、彫刻をあんまりやりたくないと思いつつも彫刻から離れられないことを感じてはいましたが、今回のワークショップであらためて実感しました。今後の制作に生きてくれば良いなと思います。(20代女性)
- 一般的に、ワークショップというと小～中学生向け教育プログラムというイメージがあるが、今回は大学生～作家～大人と、高い年齢に向けられていたようで楽しめました。(20代男性)

材料

- 鉛筆 ・絵具 ・紙コップ ・クラフト紙 ・カッター
- はさみ ・グルーガン



動き出せ!色とかたち アニメーションのしくみを知ろう

六本木アートナイト企画「ニッポンのマンガ*アニメ*ゲーム」展、「ニキ・ド・サンファル展」さきどりワークショップ

- 開催日時：2015年4月25日(土) 11:00~15:00
- 参加者：コマ撮りアニメーション30名、アニコマ130名(合計160名)
- 対象：どなたでも
- 参加費：無料
- 場所：1階ロビー

概要

「六本木アートナイト2015」に合わせて、東京工芸大学アニメーション学科の企画協力のもと、アニメーションの原理を手軽に体験できるワークショップを開催しました。



1



アニメーションの原理を知るワークショップ

今回のワークショップは、「ニッポンのマンガ*アニメ*ゲーム」展と「ニキ・ド・サンファル展」を広く知ってもらうことも目的とし、ニキ・ド・サンファルの今にも動き出しそうな色とかたちから発想しながら、アニメーションづくりを楽しみました。

通りかかった人が誰でも気軽に参加できるよう、美術館建物内でいちばん目立つ1階ロビーで開催しました。

2



240分

A. コマ撮りアニメーション (*A,B同時進行)

今回のワークショップで体験できるアニメーションは2つあります。ひとつはレゴブロックを用いたコマ撮りアニメーションです。

まずは、レゴブロックでかたちをつくります。そして、パソコンとつないだデジタルカメラで撮影。その後レゴブロックを動かし、また撮影。少しずつ動かしては撮影の手順を繰り返し、パソコン内でその画像をつなげると、まるでレゴブロックが動いているかのように見えます。1秒間に8~12コマ、ループで再生できるように、最後のかたちが最初のかたちと同じになるようにつくります。およそ30分の制作時間を経て完成した作品をスクリーンに再生して鑑賞を楽しみました①②

3



240分

B. アニコマ (*A,B同時進行)

もうひとつは、「アニコマ」です。プラスチックの丸い透明板に絵を描いたりシールを貼ったりした後、こまを差し込んで、ブラウン管テレビの上で回すと、テレビのフリッカー効果によって絵が動いて見えるというもの。絵が動いて見えるように作るポイントは、絵のかたちを少しずつ変化させて、円盤上にまるく等分に配置することです。中央からかたちが飛び出すように描いてみたり、配置する間隔を少しだけ変えてみたり、実際にこまを回してみたときの様子を想像しながら描きます。

ブラウン管テレビの上でコマを回すと、走っている人などを描いたアニコマは、本当に動いているように見えます。見ていた参加者から歓声が沸きました。抽象的なかたちを描いたアニコマは、色とかたちが不思議な動きを繰り返します。大人も子どもも夢中になっている姿が印象的でした③④⑤

プログラムの流れ

講師

東京工芸大学 芸術学部 アニメーション学科

大学では日本で初めてのアニメーションを専門的に学ぶ学科として2003年に誕生。アニメーションの専門的な技術や原理原則、歴史などの知識も広く学んでおり、アニメーションのほか、卒業生は様々な分野で活躍中。

まとめ

六本木アートナイトでいつもより多くの来場者が行き交うなか、普段はワークショップに参加したことがない人にもその様子を目にすることができました。スタッフにとっては、大勢の人がいる中でワークショップに関心を示す人の割合や、参加者が実際にワークショップへの参加を決めるまでの親子のやり取りを実際に観察し、今後求められるプログラムや、気軽に参加できるワークショップに適した題材を考えるきっかけにもなりました。(MS)

参加者の感想

- 展示を見学しにきて、声をかけられて思わずしてみました。材料がかわいいシールやおり紙など、充実していて楽しみなが、制作することができました。(20代女性)
- アニメーションがなかなかむずかしいです。アニメを作る機会がないので楽しかった。(30代女性)
- 子どもを連れて来たので、絵以外に楽しめるところがあって良かったです。親も子どもも楽しめるところがうれしいです。(20代女性)
- 楽しかったです。スタッフの方が親しみやすく、興味深く体験できました。ありがとうございます。(30代男性)
- もっと素材があっても良いと思う。(40代女性)

材料

- ・レゴブロック
- ・マジック
- ・プラスチック板
- ・シール





②

Life Type ライフ タイプ —じぶん・ひと 知り合うデザイン

- 開催日時：2015年6月14日(日)13:00~17:00
- 参加者：18名
- 対象：中学生以上
- 参加費：1,000円
- 場所：別館3階多目的ルーム

概要

SPREADを講師に迎え、人生で経験した出来事や瞬間をアルファベットと記号で表現していくグラフィック作品「Life Type」のワークショップを開催しました。



①



③



④

Photo: Jingu Ooki

プログラムの流れ

1
5分

講師紹介

講師はクリエイティブ・ユニットSPREADとして活動する小林弘和さんと山田春奈さんです。

2
30分

レクチャー

SPREADの活動や、デザインに対する考えなどを聞きました。小林さんは、「デザインとは、社会とのコラボレーション。デザイナーが社会に反応してできる形がデザイン。デザイナーだけでは形ができず、さまざまなものと反応して形ができる。」と言います。

3
40分

Life Typeの制作

「Life Type(ライフ タイプ)」は、人生で経験した出来事や瞬間を文字で表現していくグラフィック作品です。参加者たちはまず、自分の人生をふり返り、思い出した言葉や名前をピックアップします。そして、アルファベットと数種類の記号が含まれたオリジナルのハンコを使って、手のひらサイズの用紙に文字を配置していきます。①

4
70分

Life Typeの拡大・複製

完成後、Life Typeをペアの相手と交換し、ハンコのアルファベットと記号が拡大印刷された紙から文字を切り抜いて、相手のLife Typeを大きな用紙に再配置して複製します。相手が作ったLife Typeをなぞって再配置の作業をしながら、文字と文字の距離、配置、強弱を体感で理解し、関係性を読み取っていきます。②

5
20分

2人1組になって、お互いのLife Typeについて語り合う

複製の作業を通じてLife Typeから読み取ったストーリーを相手に伝え、その後、作った本人から、Life Typeに含まれた真実を語りました。相手の性格や取り巻く環境、価値観を考えながら想像したストーリーは当たっていたり予想外の展開だったりして、ペア同士の会話がはずみます。③

6
60分

発表

貼り出されたLife Typeを参加者全員で見ながら、それぞれにこめられたストーリーを語り合いました。「大切な友達が数えきれないほどいる」「日本に生まれたけれど、韓国の血を持つ自分自身」「行者をしている自分の上にはいつも神がいる」など、一人一人の人生に結び付いた言葉が語られました。様々な人生の場面に触れた参加者たちの間から驚きや感嘆の声が上がる、和やかで濃密なひと時でした。最後に、A5判用紙に印刷された額入りのLife Typeが参加者に渡され、ワークショップは終了しました。



クリエイティブ・ユニット
SPREAD
(スプレッド)

講師

小林弘和と山田春奈によるクリエイティブ・ユニット。環境・生物・物・時間・歴史・色・文字、あらゆる記憶を取り入れ「SPREAD=広げる」を生み出す。主な仕事に、CDジャケット「相対性理論/正しい相対性理論」、工場見学イベント「燕三条 工場の祭典」、ストールブランド「ITO」、「萩原精肉店」VI など。2004年より、生活の記録をストライプ模様で表す「Life Stripe」を発表して注目を集め、スパイラルガーデン(東京、2012年)、ミラノフオリサローネ(イタリア、2012年~)、Rappaz Museum(スイス、2014年)などで個展を開催。

まとめ

「Life Type」は、自分の人生で起こった出来事や瞬間をふり返り、アルファベットと記号で表現したグラフィック作品です。小さな用紙に配置された文字の構成に同じものは一つとしてなく、一枚一枚にだれかの人生に起こった特別なストーリーがこめられています。2人1組で進められた今回のワークショップでは、制作したLife Typeをペアの相手と交換して時間をかけて読み取り、人生のストーリーを互いに想像して語り合いました。正解を当てるのが目的ではない、自由で柔軟な想像を促すプログラムを通じて、参加者同士の間に見えや驚き、感動が起こるワークショップとなりました。また、ワークショップ終了後には、ポスターサイズに引き伸ばしたLife Typeを地下1階休憩コーナーで展示・公開しました。④(NY)

参加者の感想

- スタンプを押すという単純なアートが、一人一人の人生のストーリーが加わる事でこんなにも面白くなると知ることができてとても楽しかった。こういった事がアートなんだとあらためて思えたワークショップでした。(40代女性)
- 大切なのは技術よりも考え方や視点であることを改めて教えていただきました。一方で、拡大コピーではなく、人力で拡大するという発想・技法によって生まれるコミュニケーションが大変おもしろく興味深い体験でした。(40代男性)
- 自分で考えて、作ったから、楽しかったです。(12歳女子)

材料

- ・Life Type制作用の台紙
- ・アルファベットと記号のハンコ ・スタンプ台
- ・鉛筆 ・A3判の白紙 ・はさみ ・のり
- ・アルファベットと記号を拡大コピーした紙
- ・A5判の厚紙 ・額



マンガの時間を「見る」という体験：解放される音、分解される運動

「ニッポンのマンガ*アニメ*ゲーム」展 関連企画

- 開催日時：2015年8月22日(土)13:00~17:00
- 参加者：25名
- 対象：高校生以上
- 参加費：無料
- 場所：3階研修室A,B

概要

一般的には「読むもの」と認識されているマンガを、その音や運動の表現に着目することで、「見る」という視覚文化的な視点から分析することを試みました。



プログラムの流れ

1



はじめに

マンガは「読むもの」。私たちは普段そう考えていますが、果たしてそれだけなのでしょうか？今回のワークショップでは、「見る」という視点から、普段とはちょっと違ったマンガへのアプローチを試みます。講師には鈴木雅雄さんと、野田謙介さんをお迎えします。

2



25分

講師の自己紹介&レクチャー①

鈴木さんは普段はシュルレアリスム研究者として活躍されています。「その私が、今、なぜマンガなのか」というと…。「視覚文化＝「見るもの」としての絵画とマンガに着目した時、鑑賞者が能動的に関わらなければ立ち現れない近現代絵画の世界と、バラバラに配置されたコマを私たち自らがまとめることで、初めて時間や運動が生まれるマンガには大きな共通点がある、と鈴木さんは説きます。

3



25分

講師の自己紹介&レクチャー②

次に、マンガ研究家の野田さんにお話しいただきます。マンガにおける日本と海外の比較検討を行い、「読み手が作り出す時間(性)」について考察されている野田さんによると、マンガではひとつのコマの中にたくさんの時間が同時に存在しており、私たちがそれらを「マンガの文法」に則り能動的に関わることで、時間の流れや運動が生まれます。

4



70分

フキダシとマンガ世界の時間—鈴木氏パート

では、「マンガの文法」とは何なのでしょう？私たちは、どのようにマンガの世界の時間や運動を感じているのでしょうか？まずは鈴木さんのお話をもとに、主にフキダシのはたらきに焦点をあてたオリジナル・ワークシートを使って、体感を試みます。フキダシの位置とその中のセリフ、あるいはフキダシの有無によって様々な時間とその流れが生まれ、作品世界を視覚的に多様性をもつものになっていることが解ります。

5



95分

マンガ世界の音と運動—野田氏パート

休憩を挟んで、野田さんにマンガの中の音と運動についてお話しいただきます。音や運動はどう表現されるのか、ワークシートで実践しながら、参加者も一緒に考えます。運動＝動きの表現のしかた次第で、物語の意味、迫力、スピード感など、実に様々な要素を一度に感じる事ができます。更に、フキダシの位置によっては物語中の音の強弱のみならず、登場人物同士の距離感や時間のテンポをも私たちは視覚で感じていることが明らかとなりました。

講師



早稲田大学 教授
鈴木雅雄
(すずき まさお)

1962年、東京都生まれ。東京大学大学院地域文化研究科博士課程満期退学。現在、早稲田大学教授。専攻、シュルレアリスム研究。著書に、『シュルレアリスム、あるいは痙攣する複数性』(平凡社、2007年)など。



マンガ研究家
野田謙介
(のだ けんすけ)

1977年、大阪府生まれ。京都大学総合人間学部卒業。マンガ研究者・翻訳者。訳書にティエリ・グルンステン『マンガのシステム』(青土社、2009年)など。

※鈴木氏はマンガ研究にあつたな地平を開いたことで評判を呼んだ『マンガを「見る」という体験』(水声社)の編者であり、野田氏も同書に寄稿者の一人として参加しています。

まとめ

今回のワークショップを通じて、何気なく読んでいたマンガが実は複雑な文法でつくられていたことが解りました。マンガの内容と視覚的な表現が表裏一体であること、そしてそれがマンガ家の手によって巧みに表現されているのだということに気づかされました。(NW)

参加者の感想

- マンガをこのような観点で捉えることがとても新鮮に感じられた。「音声と動き」はマンガには欠けているが、それだけに、見る者を作品に参加させる力が強いのかも知れないと思われた。「音声と動き」を感じさせるための表現上の工夫がマンガの作品世界に奥行きを与えていることもあるかと思われる。欠如が新たな表現世界を築き上げていると感じられた。(60代女性)
- 「マンガを読む」ではなく「見る」。同じ作品を異なった身体性で感じることで、どのような感情の違いが生まれるのか、ということに興味を持ちました。(40代女性)
- 文字について特にマンガの可能性が体験できるワークショップでした。この延長線上で、できたらフキダシ、セリフ、オノマトペも制作してみるものがあるととっても楽しいと思います。(20代男性)

材料

- オリジナルのワークシート
- 鉛筆



冷却ファンでつくる動きの装置

- 開催日時：2015年9月27日(日)13:00~17:00
- 参加者：8名
- 対象：小学3年生~高校生
- 参加費：1,000円
- 場所：別館3階多目的ルーム、3階講堂

概要

パソコンの冷却ファンを使って装置を手作りし、物が動くしくみを知るとともに、自分の発想をかたちにする楽しさを体験しました。



プログラムの流れ

1
15分

堀尾さんの活動紹介

講師は、アーティストとしてもエンジニアとしても多彩に活躍する堀尾寛太さん。音・光・運動・位置などさまざまなエネルギーを相互に変換する装置を使つての作品づくりは、堀尾さんのもっとも得意とするところ。今回のワークショップでは、デスクトップパソコンから取り出した冷却ファンを使って、動く装置づくりに挑戦します。

2
85分

装置の基本づくりとレクチャー

使用するファンは、古いパソコンから取り出したもの。分解したパソコンを見たあと、ひとりひとつファンを受け取り、ファンとケーブル、ケーブルと電池ボックスをつなぎます。電池を入れてスイッチをオンにすると、ファンが回って、ひゅっつと風が!高速で回るファンに指を挟まないよう、ファンの中心部を残して金属製のガードで覆い、装置の基本を完成させます。続いて、ファンを使ってどのようなことができるか考えます。堀尾さんはファンの持つ、①回転、②風、③振動、④磁石の要素を紹介しつて。このしくみをつかつて、それぞれが思い思いに装置を制作します。

3
90分

講堂に設置・発表

広い講堂に移動し、いよいよ発表会です。講堂の機材に吊り下げてファンを回し、作品を空中でぶんぶん動かしたり、風力で浮いている風船を下から光で照らし、色のついた影が何重にも重なつて動き回る幻想的な光景を楽しんだり。ファンの回転で発泡スチロールがプラスチック容器を叩く音を小型マイクで拾い、講堂の音響設備から聞こえるようにして、太鼓の演奏のような音を響かせたりして、参加者はお互いの作品に魅了されました。



講師



アーティスト・エンジニア
堀尾寛太
(ほりお かんた)

1978年広島県生まれ。九州芸術工科大学(現・九州大学芸術工学部)にて音響設計とコンピュータ音楽を学ぶ。電磁気に関わる部品や身の周りのものを組み合わせて、音、光、運動、位置などさまざまなエネルギーを相互に変換する装置をつくり、パフォーマンスやインスタレーション作品として発表。また電子デバイスのエンジニアとして、コマース的な展示・映像・プロタイピングや、楽器開発などのプロジェクトに参加する。

まとめ

ファンが回転するというシンプルな動作に、ひもや風船、磁石などの素材、さらには光や講堂の音響設備までも加えていって、工作の可能性を広げていった今回のワークショップ。参加者は柔軟に自分の発想をかたちにして、作品を展開させていきました。「ものが動く背景には、しくみがあるということを知ってもらう、そこから作品をつくる」というワークショップ企画段階の目標をはるかに超えて、結果的には、発見・実験・作品化を参加者本人が能動的に行う時間となりました。(NW)

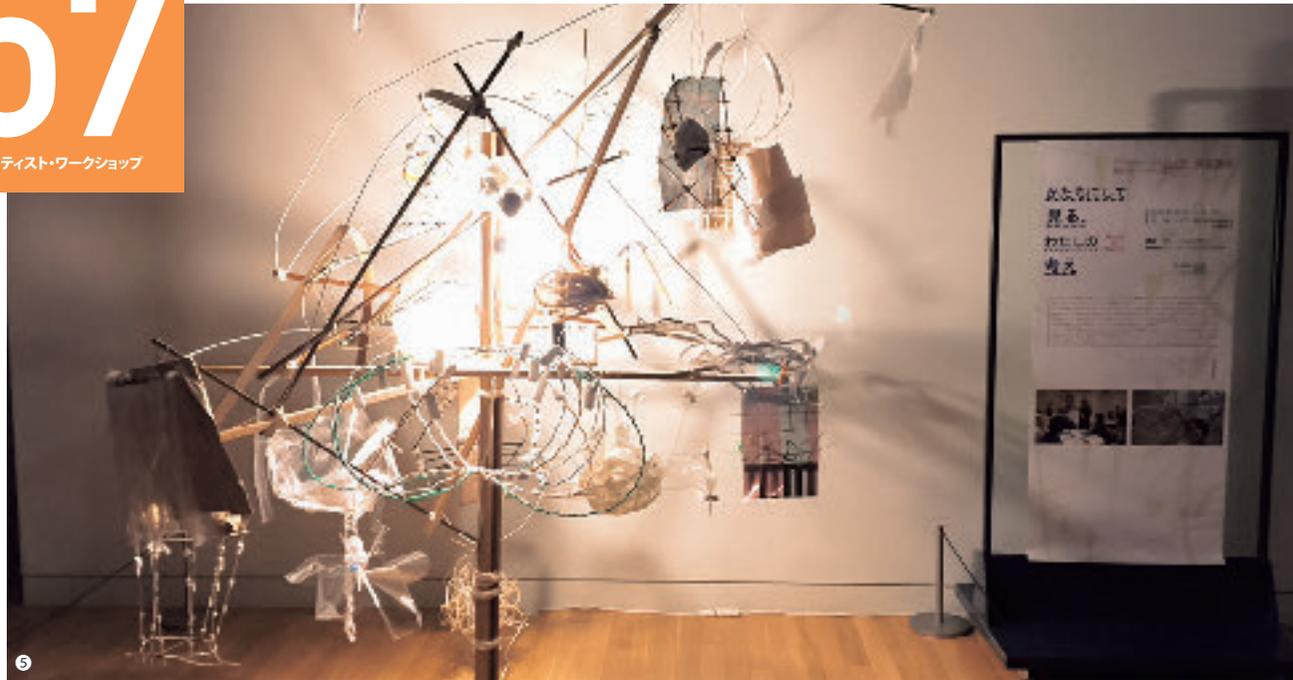
参加者の感想

- ふつと違うつかい方で遊べてとても楽しかった。(11歳女子)
- 色々な材料を使って工作ができて楽しかった。(10歳女子)
- とても楽しかったのでまたやってほしいです。自分で改造するのはいろいろできて面白かったです。(10歳男子)

材料

- ・冷却ファン
- ・銅線 ・電池
- ・電池ボックス
- ・セロハン
- ・すずらんテープ ・紙
- ・ひも ・セロハンテープ
- ・懐中電灯 ・粘土
- ・わた など





かたちにして見る、わたしの考え ～Made in Mind～

「アーティスト・ファイル2015 隣の部屋
—日本と韓国の作家たち」展 関連企画

- 開催日時：2015年10月11日(日) 13:00～17:00
- 参加者：20名
- 対象：中学生以上
- 参加費：1,000円 ●場所：3階講堂、企画展示室2E
- ※日本語・韓国語 逐次通訳付き

概要

韓国作家のヤン・ジョンウさんと、本来は目に見えない人の思考がどんな形をしているかを考えて、立体作品の制作に挑戦しました。



プログラムの流れ

1

5分

講師紹介

会場となった講堂のステージ上には、ヤン・ジョンウさんが事前に制作した複雑な形状の木製の枠が用意されました。講師のヤンさん、アシスタントとして参加するキム・ナミさん、日本語と韓国語の通訳をする3名が紹介され、ワークショップ開始です。

2

40分

ギャラリートーク

展示室2Eに移動して、「アーティスト・ファイル2015」に出品されているヤンさんの作品を鑑賞しながら、作家本人から作品のテーマや制作過程の話を聞きました。ヤンさんは、人の目に見えない内面や人間同士の関係性を、作品の「動き」や「構造」、「光」、「素材」などを通じて表現しています。①

3

20分

ウォーミングアップ

講堂に戻り、まずは全員で、見たものから感じたことを言葉にするウォーミングアップをしました。参加者たちはハサミを見て、連想した言葉を次々と言っていました。次に、ヤンさんがホワイトボードに描かれた2種類の形を示しながら、見た目から受ける印象の違いについて、解説を加えました。丸みを帯びた形と、鋭く尖った形からとでは、受ける印象も連想する言葉も違います。

4

45分

テーマを決め、ドローイング

「今朝、最初に見たものは何ですか?」という質問から、テーマとなる言葉を決め、そのテーマから連想するイメージを紙に描きます。「雨」や「はちみつ」、「布団」など、参加者それぞれ違うテーマが導き出されました。ヤンさんとキムさんは参加者の間を回り、様々な質問を投げかけながら、参加者が表現したいイメージを明確にする手助けをします。講師と参加者が対話を通じてイメージを共有していくことが、このワークショップの重要な要素です。②

5

100分

制作

イメージを固めた後、立体の制作に移ります。「絵で表した感覚を立体にするときに、どんな素材が適しているかをよく考えてください」というヤンさんの言葉を受け、参加者は用意された様々な材料の中から、針金や毛糸、木片などを選んで立体を制作しました。立体が出来上がったら、ヤンさんが事前に作った木枠に取り付けて、制作完了です。③④

6

20分

鑑賞、講評

参加者全員が制作した「今朝、最初に見たもの」が枠に取り付けられて、一つの立体作品になりました。最後に、講堂の照明を落として、作品を鑑賞しました。ヤンさんから参加者へ向けて、「身近なものをじっくり眺めて、いつもより少し深く考えてみると、そこから未知の美しい形が現れてきます。」という言葉が送られ、ワークショップは終了しました。完成した作品は、地下1階の休憩スペースに展示され、一ヶ月間公開されました。⑤



現代美術家
양정욱
(ヤン・ジョンウ)

Photo: Kim Namhee

1982年、韓国ソウル生まれ。暎園大学美術学部彫塑学科卒業。自身の観察と経験をもとに、日常の中で見いだされる人の感情や思いを、テキストと動く彫刻によって表現する。光や音をともなって動き、見る人の感性や記憶を刺激する作品が注目を集め、2015年には「アーティスト・ファイル2015」(東京)への参加のほか、ソウルやニューヨークでも個展が開催された。第35回中央美術大展優秀賞(2013年)、OCI ヤング・クリエイティブ2015(2014年)を受賞。

アシスタント:キム・ナミ
通訳:日比野民蓉、チョ・アラ、チェ・オギョ

講師

まとめ

参加者の感想

材料

- 自由に発想するのがむずかしくも面白かった。考え方のくせのようなものがある。(30代男性)
- 皆で1つの作品になるというところがよかったです。(50代女性)
- 開始前はどんなことをするのか全くわからなかったのですがドキドキしましたが、会話がたくさんあって、それがとてもよかったです。(30代女性)
- 普段まったく気にしていなかったベッドをデザインして新鮮でした。また、実際に展示室に行き、アーティストの方の話を聞くことができてよかったです。(20代男性)

- ・紙 ・鉛筆 ・消しゴム ・木炭 ・はさみ
- ・ペンチ ・カッター ・カッターマット ・セロテープ
- ・ガムテープ ・ビニールテープ ・両面テープ
- ・接着剤 ・のり ・針金 ・棒 ・ひも ・糸
- ・スズランテープ ・モール ・付箋紙 ・透明フィルム
- ・トイレットペーパー ・毛糸 ・木製ブロック
- ・段ボール ・紙筒 ・発泡スチロール ・輪ゴムなど

【木枠作成材料】

- ・鋼鉄製の土台 ・木材 ・ひも
- ・接着剤 ・電球 ・モーター ・コード付きソケット
- ・トイレットペーパー

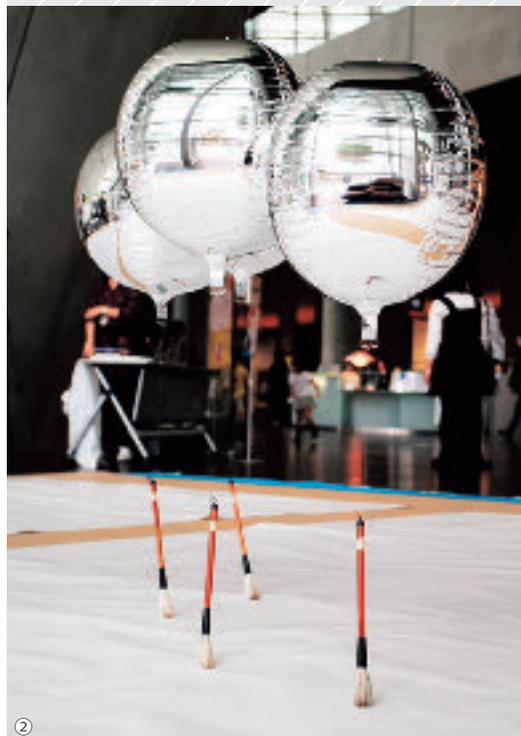


はじめてのアート ふわふわおえかき プッシュしてポヨン!

- 開催日時：2015年11月15日(日) 11:00~15:00
- 参加者：90名(11:00~8組23名、12:00~10組20名、13:00~10組25名、14:00~10組22名)
- 対象：未就学児(3~6歳)親子
- 参加費：無料
- 場所：1階ロビー

概要

開発好明さんを講師に迎え、1階ロビーの広々とした空間に5×10mの大きな白い紙を敷き、ヘリウムガスで膨らませた風船を筆やスポンジにつけて、フワフワとさせながら絵を描くワークショップを開催しました。



プログラムの流れ

1
10分

デモンストレーション

今回のワークショップ中は、筆やスポンジを直接持って絵を描いてはいけません。ヘリウムガスで膨らませた風船に筆やスポンジをつけて、フワフワと浮遊させながら絵を描きます。風船を上手に扱うことで、風船から吊り下げられた筆やスポンジで、線や点を描くことができますが、大人がやってもなかなか思い通りになりません。思い通りにいかないからこそ、参加者は作業に没頭して、深く楽しみながら絵を描くことができるのです。

次に、開発さんの「雑巾で絵を描いたことがある人?」の呼びかけから始まるデモンストレーション。もちろん、雑巾で絵を描いたことがある人は参加者の中にはいません。そこで、筆のほかに、スポンジや雑巾、軍手に絵具をたっぷり付けて描くと、どのような線ができるか、試してみます。さまざまな線が描かれていく様子を食い入るように、目を輝かせながら見つめる子どもたち。子どもたちののはやく風船に触りたいという気持ちが伝わってきます。①②

2
30分

制作

風船をつかって練習開始します。風船を突いてみたり、床面にポヨンポヨンと弾ませてみたり、上に高く飛ばしてみたりしながら、全身をつかって、風船と遊びます。

今日描くのは、5×10mの大きな景色の絵。空、山など、それぞれが描きたいものを分担します。子どもたちは、景色の中の世界に入りこんで絵を描きました。夕焼けの空のひかりのようす、山に住んでいる動物など、想像するものを描くうちに、どんどん絵が深まります。③④

3
5分

鑑賞

最後に2階にあがって、描いた絵を高い場所から俯瞰しながら鑑賞します。自分が描いた線や色を見つけることができるでしょうか。⑤



講師



美術家
開発好明
(かいはつ よしあき)

1966年山梨生まれ。多摩美術大学大学院美術研究科修士課程修了。観客参加型の美術作品を中心に、2002年にPS1 MOMA「Diadel Mar/ By the Sea」、2004年にヴェネチア・ビエンナーレ、2015年に「越後妻有大地の芸術祭2015」に出品。2011年から東北での活動として「ディリリーアートサーカス」を主催。2000年より3月9日をサンキューアートの日として毎年全国で開催している。

まとめ

美術館の教育普及事業をより多くの人に知ってもらおうと、パブリックスペースで開催した今回のワークショップ。風船や絵具、大きな紙という子どもの好きな要素を詰め込みながらも、参加した子どもたちがはしゃぎまわるだけではなく、絵を描くことに集中できたのは、今回のユニークな画法によるワークショップの効果によるものでした。筆をヘリウムガスで膨らませた風船で浮かすという突飛なアイデアは、結果的には、造形的な要素と風船を使った身体運動を組み合わせ、未就学児向けのワークショップらしい内容となりました。(MS)

参加者の感想

- なかなかダイナミックにはできなかったみたいですが、自分なりに山をかこうとしていたようで、終わってから、自分の描いた山に大変満足そうでした。風船が大好きな男子なので、風船と絵具なんてもう興奮する組み合わせで本当に楽しかったようです。ありがとうございました。(30代女性:6歳男児と参加)
- 普段、絵具を直に触って大きな紙に思いっきり描くという体験はなかなかできないので、子どもも楽しそうにしていました。上手、下手を問われないのも楽しめた要因だと思います。ありがとうございました。(大人:7歳男子と参加)
- 自分のアイデアでいろいろなめり方をしていたとても楽しそうでした。汚れを気にせず遊べてよかったです。風船をもらえて大喜びでした。(30代女性:6歳女児と参加)

材料

- 絵具 ・墨 ・筆 ・バケツ ・ウエットティッシュ
- 雑巾 ・マスキングテープ



①

鉄・形・音 手と目と耳を結ぶ

- 開催日時：2016年1月31日(日)10:00~16:00
- 参加者：14名
- 対象：中学生以上
- 参加費：無料
- 場所：別館3階多目的ルーム

概要

金沢健一さんを講師に迎え、参加者全員で金沢さんの代表作である《音のかげら》に触れ、時には叩いて鉄の音を発しながら、普段とは異なる美術作品の鑑賞体験をするワークショップを開催しました。



②



③



④



⑤

1

30分

パフォーマンス&レクチャー

はじめに、金沢さんのパフォーマンスを鑑賞しました。紐で繋がった2本の角柱の鉄材を両手に持って打ち鳴らしながら、参加者の周りをゆっくりと歩き始める金沢さん。鉄と鉄がぶつかる瞬間に鳴り響く風鈴のような音色は、部屋中の空気を一変し、参加者の注意を惹きつけていました。

2

85分

鉄の音を聴く

次に、金沢さんの作品《音のかげら》に触れながら、形、重さ、質感、温度などを肌で体感してもらいました。参加者の様子をしばらく観察していると、時にはやさしく、またある時には強くというように強弱をつけながら、音を出している様子が見られました。徐々に音を出すことに慣れ、自分が出す音と、他の人が出す音を聞き分けられる耳が、参加者たちに備わってきたことがわかります。①

(昼休憩)

3

60分

即興演奏のためのドローイング

一度音を出すことから離れ、参加者同士でオイルパステルを使って直線や曲線を描き合い、これから行う演奏に繋げる肩慣らしが行われました。金沢さんによると、この時に描かれた抽象的な線が、後に行う演奏の「楽譜」の役割を果たすことになるそうです。②

4

60分

音のかげらを演奏する

まずは、音を出すことから始め、じっくり音を聴きながら、金沢さんの提示するルールに従い、演奏を体験しました。さらに、ミニマル・ミュージックを参考にした演奏に繋がります。ミニマル・ミュージックとは、パターン化された音型を反復させる音楽です。今回の場合は、鉄の破片を叩く際に発する音の集積によって、この場限りの「曲」を完成させようとしています。③④

5

45分

音=振動という現象

最後に、音とは何か金沢さんの作品《振動態》を通して考えました。《振動態》は、厚さが9mmある鉄板の下にスプリングを配置した彫刻作品です。鉄板の上に、炭酸カルシウムを振り撒き、板面をゴムボールで擦ると、鉄板が唸るような音を立て、撒かれた粒が、様々な幾何学模様を表出させます。鉄板が振動している時に、触れるか触れないか、ぎりぎりの位置に手をかざしてみると、触っていないだけでも振動を肌身で感じられます。⑤



彫刻家

金沢健一

(かなざわ けんいち)

講師

1956年東京生まれ。1979年東京藝術大学美術学部工芸科科鍛金専攻卒業。1981年東京藝術大学大学院美術研究科修了。現在、多摩美術大学非常勤講師、東北芸術工科大学非常勤講師、日本大学非常勤講師。2000年以降の主な展覧会は、2000年「共鳴する空間 金沢健一 音のかげら」新潟市新津美術館／新潟、2002年「はがねの変相—金沢健一の仕事」川崎岡本太郎美術館／神奈川、2006-2010年「金沢健一 音のかげらとワークショップ展」川越市立美術館／埼玉、2008年「金沢健一展」ギャラリーなつか／東京(2013)、2011年「金沢健一展 出発点としての鉄 1982-2011」川越市立美術館／埼玉、「耳をすまして—美術と音楽の交差点」茨城県近代美術館、2015年「音のかげらと音楽のかたち2015 Scores」川越市立美術館アートホール／埼玉、2016年「美術と音楽」群馬県立近代美術館。

まとめ

今回のワークショップは、作品に直接触れ、静止した彫刻を見ただけでは通常感じる事が難しい、作品と展示空間の関係を理解してもらおうきっかけを生み出したいと考へ企画しました。参加者が、金沢さんの作品《音のかげら》に触れることで、一番効果が期待されるのは、作品が我々に与える影響が、単に展示される空間や場所に限るのではなく、環境にまで拡がっていく状況を理解できることです。身体に訴えかける体験時間を多く取ることで、作品との関わり方や素材が作品に変わる工程を順序立てて理解できるプログラムとなりました。(MS)

参加者の感想

- 目では見られない音を模様として見る事ができたことは感激。ドローイングから音に変化し、鉄の音のセッションができたこと、全員の気持ちがあひつになったような感じを得た。(70代女性)
- 鉄のいろいろな面を知ることができました。とても興味深いワークショップでした。何か形に残すのではなく、形のないもの、体験を持ち帰るところも面白かったです。(30代女性)
- 鉄の断面が美しかったです。「鉄と音」どのような内容なのか想像がつかず、ワクワクしていましたが、予想外の内容で癒され、楽しめました。ありがとうございました。(20代女性)
- 作家さんの作品に直接触れたこと。そして、音という目に見えないものが視覚を通して見れたことがとても楽しかった。(20代男性)

材料

- ・A3用紙 ・オイルパステル ・マスキングテープ
- ・ウエットティッシュ
- ・作品鑑賞体験のため、金沢健一さんの作品《音のかげら》と《振動態》を使用



ゾートロープを作ろう

「ニッポンのマンガ*アニメ*ゲーム ミャンマー展」関連企画

- 開催日時：2016年2月14日(日)15日(月)13:00~16:00
- 参加者：81名
- 対象：どなたでも
- 参加費：無料
- 場所：ミャンマー国立博物館(ヤンゴン)

概要

国立新美術館初の海外でのワークショップ。アニメーション制作の基礎がわかるゾートロープ作りに挑戦しました。



プログラムの流れ

1

見本のゾートロープを回してみる

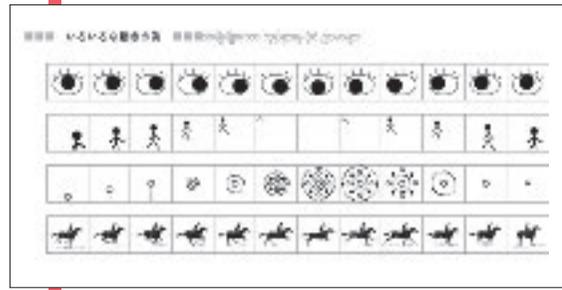
ミャンマーの人々は、ゾートロープをみるのは初めての方が多かったようです。でも日本から手作りして持ってきた見本を見ると、すぐに仕組みは理解してくれました。

2

見本を見ながら作ってみる

事前に用意したミャンマー語の手順書を見せながら、キットを渡します。しかし、見るのと作るのは大違いです。ゾートロープを初めて目にする参加者でも取り組めるよう、会場には簡単な手作業でゾートロープが作れるキットを用意しました。最初はコマごとの絵の描き方に戸惑っていた参加者も、指導役の日本人若手アニメーターたちの丁寧なサポートにより、それぞれ工夫を凝らしたゾートロープを1時間ほどで完成させ、クルクル回して「動く絵」を楽しんでいました。

ミャンマー語の通訳さんもいたのですが、実際は身振り手振り、日本語も英語も交えてコミュニケーションを取りながらのワークショップでした。



講師

「ICAF2015」出品アニメーター

武中敬吾

(たけなか けいご)

「ICAF2015」出品アニメーター

野本有紀

(のもと ゆき)

「ICAF2015」出品アニメーター

木畠彩矢香

(きはた さやか)

国立新美術館アソシエイトフェロー

吉澤菜摘

(よしざわ なつみ)

まとめ

ワークショップには十代の若い層を中心に81人が参加し、ミャンマーの若者たちの、「アニメ」への理解が深まっていく手応えを感じる2日間となりました。(TM)

材料

- ・ゾートロープキット
- ・マジック
- ・鉛筆
- ・下書き用の紙
- ・のり
- ・はさみ

Zoetrope

ပြလုပ်နည်း

ပြလုပ်နည်း (၁) ၊ ဆွဲချိတ်ပုံ ဖြစ်ပုံ
 အထူးသတိပြုရန် အပူ ၁၂ ခု ဖြစ်ပုံကို အောက်ဖော်ပြပါအတိုင်း
 ၊ ဆွဲချိတ်ပုံ ဖြစ်ပုံကို အောက်ဖော်ပြပါအတိုင်း ဆွဲ
 ဆွဲချိတ်ပုံ

ပြလုပ်နည်း (၂) ၊ ဆွဲချိတ်ပုံ ဖြစ်ပုံ
 အပူ ၁၂ ခု ဖြစ်ပုံကို အောက်ဖော်ပြပါအတိုင်း ဆွဲချိတ်ပုံ
 ဖြစ်ပုံကို အောက်ဖော်ပြပါအတိုင်း ဆွဲချိတ်ပုံ

ပြလုပ်နည်း (၃) ၊ ဆွဲချိတ်ပုံ ဖြစ်ပုံ
 အပူ ၁၂ ခု ဖြစ်ပုံကို အောက်ဖော်ပြပါအတိုင်း ဆွဲချိတ်ပုံ
 ဖြစ်ပုံကို အောက်ဖော်ပြပါအတိုင်း ဆွဲချိတ်ပုံ

ပြလုပ်နည်း (၄) ၊ ဆွဲချိတ်ပုံ ဖြစ်ပုံ
 အပူ ၁၂ ခု ဖြစ်ပုံကို အောက်ဖော်ပြပါအတိုင်း ဆွဲချိတ်ပုံ
 ဖြစ်ပုံကို အောက်ဖော်ပြပါအတိုင်း ဆွဲချိတ်ပုံ

ゾートロープの制作手順書(ミャンマー語版)



新聞紙とガムテープのアートを体験しよう!

「MIYAKE ISSEY展: 三宅一生の仕事」関連企画

- 開催日時: 2016年4月17日(日) 10:30~16:00
- 参加者: 52名
- 対象: 小学生以上
- 参加費: 無料 ●場所: 1階ロビー、企画展示室2E
- 材料協力: 日東電工株式会社

概要

造形作家の関口光太郎さんを講師に迎え、身近な素材である新聞紙とガムテープを使って思い思いに立体作品を制作しました。



プログラムの流れ

1
5分

講師の登場

午前中のプログラムには、事前の抽選で選ばれた21名が参加しました。会場となった1階ロビーの床には、大量の新聞紙が山のようにまかれています。ワークショップの開始時刻になると、新聞紙の山の下から突然、講師の関口さんが現れました。大きな靴の作品を抱えて、まずは自己紹介です。①

2
10分

「宝探しゲーム」

新聞紙の山の下には、実は「お宝」が隠されています。それは、関口さんが新聞紙とガムテープで作った5種類の寿司。参加者は腰の高さまで積み上げられた新聞紙をかき分けて「お宝」を探し、新聞紙という素材に全身を使って触れました。②

3
15分

講師の活動紹介

関口さんの作品の写真をしながら、関口さんが新聞紙とガムテープを使って造形するようになったきっかけや、これまでの活動についてお話を聞きました。

4
45分

「高くしよう対決」

4つのチームに分かれて、新聞紙とガムテープだけを使って高い塔を作る対決をしました。チームメイト全員の知恵と力を合わせて、チームごとにそれぞれ違うアイデアとプロセスで築いた新聞紙の塔が出来上がり、252cmの高さまで積み上げた緑チームが見事1位となりました。③

5
15分

「MIYAKE ISSEY展」会場で関口さんの作品を鑑賞

企画展示室2Eで開催中の「MIYAKE ISSEY展: 三宅一生の仕事」には関口さんのコラボレーション作品が展示されています。関口さんが三宅一生さんの飽くなき冒険心をイメージして制作したという作品を、全員で鑑賞しました。④

(昼休憩)

6
180分

自由制作

午後は、当日飛び入りの参加者も受け入れて、自由制作を行いました。新聞紙をぎゅっと握ったり丸めたりして成形した後、ガムテープを巻いて形を整え、カラーのガムテープを貼って色付けしたら作品の完成です。参加した52人は黙々と手を動かして制作に取り組み、やがて床にまかれた大量の新聞紙が無くなる頃には、大好きな食べ物、お気に入りの恐竜、家族にあげる動物のお面、憧れの家など、色とりどりの立体作品が出来上がりました。⑤



造形作家
関口光太郎
(せきぐち こうたろう)

講師

1983年、群馬県前橋市生まれ。5歳のときに観た映画「ゴジラvsビオランテ」に、人生を変えるカルチャーショックを受ける。2002年、多摩美術大学彫刻科入学。在学中に木、鉄、石等の一通りの素材を経験するが、馴染めず、小学校3年生の時に両親に教わった新聞紙とガムテープを使った工作を思い出し、再びやり始める。卒業制作には、その手法で高さ6メートルを超す「瞬間寺院」を制作。卒業後、私立特別支援学校・旭学園に勤務。雑誌に掲載された卒業制作の写真がデザイナーの三宅一生の目に留まったことで、造形作家としての道も同時に歩み始める。2012年、第15回岡本太郎現代芸術賞受賞。現在まで、新聞紙とガムテープを使った立体作品の制作、および各地の美術館や公共施設で工作のワークショップを行う。「MIYAKE ISSEY展」ではコラボレーション作品を制作、展示した。

まとめ

新聞紙とガムテープを用いて、ダイナミックな立体作品を生み出している関口光太郎さんによるワークショップは、開放感あふれる1階ロビーで行われました。参加者たちは「宝探しゲーム」を通じて素材に全身で触れ、「高くしよう対決」から素材の可塑性や特徴を知った後、実際に作品を制作することで、元々は平たい新聞紙とガムテープが立体作品へと生まれ変わる瞬間を体験しました。普段何気なく触れている身近な素材の可能性に気付くとともに、自分の手による造形ののびのびと楽しむワークショップとなりました。(NY)

参加者の感想

- 先生の登場の仕方がおもしろかった。グループで高さ競争したのも仲良くなれてよかった。(7歳男子:30代女性と参加)
- 新聞紙とガムテープだけで、いろいろなものがつくれたので、とてもおどろきました。どの子ども達の作品もそれぞれにすばらしく、子ども達がとても楽しそうに制作している様子が印象的でした。(大人:9歳女子と参加)
- とてもたのしかったです。大人がこんなにもむちゅうになれてしまうと!予想していませんでした。(40代女性:13歳女子、7歳男子と参加)
- 楽しかったです。もう少しかっこよく作りたかった。大きく作りたかったけど小さくなってしまった。(6歳)
- 材料がカジュアルなのに、じっくり作り込むと、ステキな作品が出来ました。(大人:6歳男子と参加)

材料

- 新聞紙 ●ガムテープ(通常色40巻、カラー14種50巻)
- 巻ダンボール(床の養生用)
- メジャー ●脚立など



1

Tipping Pointをふくむ事象について、 ヴィジュアルによる試論

- 開催日時：2016年5月29日(日)13:30~17:00
- 参加者：12名
- 対象：中学生以上
- 参加費：無料
- 場所：別館3階多目的ルーム

概要

物事に重要な変化が起こる転換点=Tipping Pointをキーワードに、身の回りで起こる出来事のメカニズムを探り、視覚化することを試みました。



2



3



4



5

プログラムの流れ



はじめに

「Tipping Point(ティッピング・ポイント)」とは、物事に重大な変化が起こる転換点のこと。私たちの身の回りの出来事にも、それは数多く含まれます。アーティストとして活躍する升谷絵里香さんは、「美術作品の多くも色々な場面でティッピング・ポイントを含んでいる」という考えのもと、街中から自然豊かな土地まで異なる環境に身を置いて“とあるアクション”を起こし、映像による記録作品を制作しています。



Tipping Pointについてのレクチャー

まずは升谷さんによるレクチャー。ティッピング・ポイントについて、身近な事例から説明します。升谷さんが実際の制作で使用する思考マップでは、ティッピング・ポイントに至るまでの考えや事柄が複雑に配置されていました。①



自己紹介とブレインストーミング

レクチャーのあとは、升谷さんと、参加者同士のお話タイム。輪になって座り、隣の人に質問を回していきます。途切れることなく出てくる質問と答えをスタッフが書きとめ、壁に貼り…を繰り返します。その中からティッピング・ポイントを探るためのキーワードとして升谷さんが選んだのは「人のすてきな瞬間」。どんな時に「その人をすてきな人だ」と感じるか…参加者から出た意見を分析して、そう感じるに至るまでの時間軸を見つけました。②③



個人での制作

次は、いよいよ参加者個人の作業。壁のキーワード集から、自分のティッピング・ポイントとすべき言葉をひとつ選びます。日頃の思い、ケンカが起こるメカニズム、大人にも広がったアニメ文化…。そこに至るまでのさまざまな出来事、感情などを、色分けした付箋に書いて貼り、時間軸上に配置して自分自身の思考マップを作り上げます。④



発表

最後は、完成した思考マップの発表タイム。時間軸の描き方も、付箋の分布も参加者によって実にさまざままで、同じ思考はひとつとして存在しないことを表しているかのようでした。⑤



アーティスト
升谷絵里香
(ますや えりか)

講師

1981年千葉県生まれ。2016年東京芸術大学大学院博士後期課程修了。2012-13年 Beaux-arts de Paris (フランス)に一年間滞在、2014年VERMONT STUDIO CENTERレジデンスプログラム(アメリカ)に参加するなど、生活拠点、制作拠点、周囲の環境を意識的に変化させながら、多角的な視点による作品へのアプローチを考えている。様々な環境に身を置きながらアクションを起こし、その一部始終を映像で記録するなどして作品を制作。主な展示に個展「Tipping Point」(Kodama Gallery、2014年)、瀬戸内国際芸術祭(2013年)など。
<http://ericamasuya.sakura.ne.jp>

まとめ

身のまわりの物事に潜むある概念(ティッピング・ポイント)を見つけ出し、それらを探ることで、現代美術のコンセプトの立て方の一例を追体験してもらうことを目的として企画した今回のワークショップ。しかしながら実際は個人の思考の共有に重点が置かれ、他の人の話に一生懸命に耳を傾ける参加者の姿が印象的でした。各々の興味や考えを語り合うメディアとしての視覚化された思考(作品)を楽しむ時間となりました。(NW)

参加者の感想

- 内容はよくわかっていなかったのですが、どこか引っかかるものがあって参加しました。実際に自分でやってみるところが本当に面白かったです。作品をつくっていくプロセスを少しでも一緒に体験させてもらった気分です。鑑賞教室よりもずっと身近に、少し深めに実感できてよかったです。他の方の発表が聞けたのも充実した時になりました。(30代女性)
- ワークショップというかたちで皆さんのお話、考え方を聞いたり、自分という存在にも理解を深めたりして本当によかったと思います。(40代男性)

材料

- A5用紙 ・付箋紙
- ロール紙 ・ペン ・糊など



三角形で発信しよう!

- 開催日時：2016年8月11日(木・祝) 12:00~16:00
- 参加者：51名
- 対象：どなたでも
- 参加費：無料
- 場所：地下1階休憩コーナーほか

概要

いま感じる思いや主張を文字や絵で表し、そのメッセージを三角形の看板にして、国立新美術館の各所に展示しました。



1

10分

レクチャー

「アイス食べたい!」「ペンギンがすき」「わりこみはよくない」など、私たちは毎日の生活のなかで、「○○をしたい」「□□がすき」などさまざまなことを思いますが、だれにも伝ええないままの思いもたくさんあります。思っているだけで、人には伝えずに消えてしまうその気持ちや主張を三角形の看板にして、美術館の各所に展示しました。今回のワークショップで重要なのは、三角形です。普段は、何気なく見ている三角形は注意をうながす交通標識に用いられったり、旗やペナントのようにかけられたり、言いたいことを発信するかたちとして使うこともできるのです。企画概要や制作方法、看板の設置について説明したら、看板の制作がはじまります。

2

5分

サイズと色を選ぶ

まず、制作する看板のサイズ(大は1辺が53cm、中は1辺が40cm、小は1辺が17cm)と色を選択します。子どもの参加者は、比較的大きな三角形を選び、大人の参加者は小さな三角形を選ぶことが多い傾向にありました。①

3

5分

下書き

制作する看板のサイズと色を選んだら、どのようなデザインにするか考えます。文章を書く人もいれば、イラストで自分の伝えたいことを表現する人もいました。中には、事前にデザイン画を用意して来られた方もいました。②

4

30分

制作

デザインが決まったら、最初に選んだ三角形の色紙にマジックやペンを使って文字や模様を描きます。単に描くだけでなく、カラーテープでストライプをつくったり、色画用紙をビリビリにちぎってコーラージュする人もいました。③④

5

10分

美術館に展示する

制作が終わったら、美術館に設置します。設置方法は2つあり、台座に取り付ける立て看板タイプと、壁に直接貼り付けるポスタータイプです。様々な主張やメッセージが込められた三角形が美術館のパブリックスペースに設置されました。⑤⑥

プログラムの流れ

国立新美術館 主任研究員

真住貴子

(ますみ たかこ)

国立新美術館 アソシエイトフェロー

吉澤菜摘

(よしざわ なつみ)

国立新美術館 研究補佐員

渡部名祐子

(わたべ なゆこ)

国立新美術館 研究補佐員

澤田将哉

(さわだ まさや)

国立新美術館 平成28年度インターン

竹ノ下彩香

(たけのした あやか)

国立新美術館 平成28年度インターン

森崎由衣

(もりさき ゆい)

国立新美術館 平成28年度インターン

高橋梨佳

(たかはし りか)

講師

まとめ

国立新美術館に所属するインターンの企画により、実現した今回のワークショップ。教育普及室主催のワークショップとしては、初のエデュケーター・ワークショップとなります。参加者50名以上が制作した三角形の看板が立ち並び、インスタレーションのような光景は、美術館で行う教育普及プログラムの宣伝効果にもつながりました。主催する側のスタッフにとっては、大勢の人がいる中でワークショップに関心を示す人の割合や今後求められるプログラム、気軽に参加できるワークショップに適した題材を改めて考えるきっかけにもなりました。(MS)

参加者の感想

- 枚数制限なく、子どもだけでなく親もやらせてもらえてありがたかったです。事前に作る物のラフを考えていったのですが、そのメモをみて感心して下さったのがとても嬉しかったです。子づれで行くと、どうしても子に気を取られて大変なのですが、スタッフの方が子どもをうまくあやして下さったのでワークショップに集中できたのもありがたかったです。(30代女性)

材料

- ・鉛筆 ・カラーペン ・ボスカ ・はさみ ・のり
- ・マスキングテープ ・カラーガムテープ
- ・色画用紙 ・両面テープ ・カラーボード
- ・看板用の台 ・クリップ



ゾートロープを作ろう(バンコク編)

「ニッポンのマンガ*アニメ*ゲーム バンコク展」関連企画

- 開催日時：2016年8月27日(土)28日(日) 13:00~15:00
- 参加者：89名(27日45名、28日44名)
- 対象：どなたでも
- 参加費：無料
- 場所：ナショナル・ギャラリー(バンコク)

概要 国立新美術館初の海外でのワークショップ第2弾。アニメーション制作の基礎がわかるゾートロープ作りに挑戦しました。



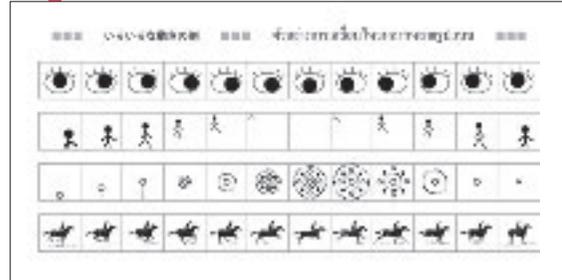
プログラムの流れ

1

見本のゾートロープを回してみる
バンコクの人々は、ゾートロープを見て、比較的すぐに仕組みを理解してくれました。作ったことがある人もいます。

2

見本を見ながら作ってみる
ミャンマーでの開催同様、ゾートロープを初めて目にする参加者でも取り組めるよう、簡単なキットを用意し、タイ語の手順書も作りしました。バンコクの参加者は、あまり見本を気にせずに、自分の描きたい絵をどんどん描いていく方が多かったです。それぞれ工夫を凝らしたゾートロープを作りました。だいたい一人1時間ほどで完成させますが、中には1コマ1コマじっくり描きこんで、2時間以上かけて力作を完成させた人もいました。



講師

- 国立新美術館 主任研究員 **真住貴子** (ますみ たかこ)
- 国立新美術館 アソシエイトフェロー **吉澤菜摘** (よしざわ なつみ)
- 国立新美術館 研究補佐員 **渡部名祐子** (わたべ なゆこ)
- 国立新美術館 研究補佐員 **澤田将哉** (さわだ まさや)

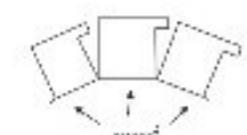
まとめ

参加者には1日目楽しかったので、2日目にはお友達も連れて来てくれた近所の子もいました。コスプレをしてきて参加してくださった方も。参加者の中には日本語ができる方が多かったのにも驚かされました。マンガやアニメがきっかけで日本語を学ぶ人が多いようです。みなさん、完成したゾートロープを誇らしげに持ってかえっていきました。(TM)

材料

- ・ゾートロープキット
- ・マジック
- ・鉛筆
- ・下書き用の紙
- ・のり
- ・はさみ

มาลองทำ โซโทรป

โซโทรปคืออะไร?
โซโทรป คือ เครื่องมือที่ใช้ในการแสดงภาพเคลื่อนไหวแบบวนซ้ำ โดยที่ภาพจะเปลี่ยนไปเรื่อยๆ เป็นเหมือนภาพนิ่งที่ต่อกันเป็นวงกลม เมื่อหมุนโซโทรป ภาพก็จะเปลี่ยนไปเรื่อยๆ เป็นเหมือนภาพเคลื่อนไหวนั่นเอง

ทำไมถึงต้องทำโซโทรป?
โซโทรป เป็นเครื่องมือที่ง่ายและสะดวกในการแสดงภาพเคลื่อนไหวแบบวนซ้ำ โดยที่ภาพจะเปลี่ยนไปเรื่อยๆ เป็นเหมือนภาพนิ่งที่ต่อกันเป็นวงกลม เมื่อหมุนโซโทรป ภาพก็จะเปลี่ยนไปเรื่อยๆ เป็นเหมือนภาพเคลื่อนไหวนั่นเอง

ทำไมถึงต้องทำโซโทรป?
โซโทรป เป็นเครื่องมือที่ง่ายและสะดวกในการแสดงภาพเคลื่อนไหวแบบวนซ้ำ โดยที่ภาพจะเปลี่ยนไปเรื่อยๆ เป็นเหมือนภาพนิ่งที่ต่อกันเป็นวงกลม เมื่อหมุนโซโทรป ภาพก็จะเปลี่ยนไปเรื่อยๆ เป็นเหมือนภาพเคลื่อนไหวนั่นเอง

ขั้นตอนการทำโซโทรป
1. วาดภาพที่ต้องการแสดงภาพเคลื่อนไหวแบบวนซ้ำ
2. ตัดรูปวาดตามเส้นที่ขีดไว้
3. ติดรูปวาดที่ตัดไว้ลงบนกระดาษแข็ง
4. ติดกระดาษแข็งที่ติดรูปวาดไว้ลงบนกระดาษแข็งอีกแผ่น

ตัวอย่าง : มอนสเตอร์จากเกม Final Fantasy
รูปวาดโดย : มอนสเตอร์จากเกม Final Fantasy

ゾートロープの制作手順書(タイ語版)



①

ひろがるワタシ つながるアナターパラ フークの世界へようこそ—

六本木アートナイト2016企画
アーティスト・ワークショップ

- 開催日時：2016年10月22日(土) 13:00~17:00
- 参加者：180名
- 対象：どなたでも
- 参加費：無料
- 場所：1階ロビー

概要

「自己の範囲とは何か」がコンセプトのパラフークの体験、アナフークの制作を行い、自分が変身したかのような楽しさと、他者とのつながりという日常に根ざした事柄を一風変わったやり方で体験しました。



②



⑤



⑥



④

プログラムの流れ

1

はじめに

六本木アートナイト2016のワークショップは、ふくらむ服・パラフーク体験と、たくさんの穴があいた巨大なビニール服・アナフーク制作の同時進行です。聞き慣れない響きと、見慣れない作品にドキドキしながらやってくる参加者の皆さんを、講師の東明さんが明るく気さくにお出迎え。東さんは、見る人が身に着けたり、中に入ったりして遊ぶことで初めて完成する作品を作るアーティストです。

パラフーク体験(時間任意)

大きなハンガーラックに、色とりどりのパラフークがずらり。自分の身長に合わせて、体験するパラフークを選びます。裾のほうから風を中に送り込んで、着た人が両手を大きく振り上げると、パラフークがぼうんと風船のようにふくらみ、新しい生き物に変身!あちこちから歓声が上がります。と思うと、ふくらんだパラフークの中に、思わず飛び込んでいく子の姿も。ひろがった自分の中に他の人が入ってきてひとつになる、不思議な感覚も楽しめました。①②③

2

アナフーク体験(時間任意)

一方、こちらはアナフーク。床には穴だらけの大きなビニールシートが3枚。1枚のビニールシートを2~3人がいっしょに着て、自由にコラージュしてオリジナルの服を作ります。コラージュ素材は寄りどりみどり。ビニール片、ひも、フェルト、お弁当のばらん…。どれもごく身近にあるものなのに、今日はとても特別な感じがします。穴にひもや紙テープを通したり、ビニール片を洗濯バサミでとめたり。耳つき帽子や、天使の羽のような飾りを作ったり…。大人も子どもも一緒にあって、この世に2つとない、個性あふれるすてきな服を完成させました。④⑤⑥



③

講師



美術作家
東明
(ひがし あきら)

1974年広島県生まれ。1998年京都市立芸術大学彫刻専攻卒業。布やビニールなどの身近な素材を利用し、観客と作品とのインタラクティブな関係の形成を目指す。近年の展覧会に「東明 個展」(AIR南山城村、2016)、「てんとむしプロジェクト05 NEW HOME」(京都芸術センター、2014)、「なつのかくれが」(広島市現代美術館、2013)ほか。レジデンスプログラム「ナイロビ・レジデンス」(ナイロビ、2011)、「フォース・オブ・ネーチャー」(ノースキャロライナ、2006)、「境谷小レジデンス」(京都市立境谷小学校)参加。子どもや親子向けワークショップも各地で多数開催。

まとめ

多くの方が来館されるアートナイトという機会に鑑み、「ひろがる、つながる」をテーマに実施した今回のワークショップ。その背景には、「わたし」の範囲はどこまでか」を問い続ける東さんの制作理念がありました。パラフークでひろがった自分の中に他の人が入ってきて、自分と他者の境目が曖昧になる不思議さ。1枚のアナフークを数人が一緒に着て、他の人とつながったままひとつの服を作り上げる斬新さ。一風変わったやりかたながらも、私たちの日常に深く根差した「他者とのかわり」を改めて考えることができた、とても豊かなひとときでした。(NW)

参加者の感想

- (パラフーク)はフワフワしていて、空気のなかにいるみたいだった。
- 童心にかえりました。シンプルなのに楽しかったです。通りがかりで目を引きました。
- パラフークはふかふかしておもしろく、子どもも楽しんでいました。アナフークにいろいろな素材をつけて、自由な発想ができて楽しかったです。
- 不思議、非日常的な体験。よかったです。
- 子供が楽しめるアートって素敵です♡

材料

- ・パラフーク(東明さんの作品)
- ・巻き段ボール(床養生用) ・ビニールシート
- ・ビニール片 ・ビニールテープ ・すざらんテープ
- ・毛糸 ・ひも ・フェルト ・梱包材
- ・食品用ばらん ・洗濯バサミなど



Next 10 years ~色と形でデザインするわたしの未来~

「国立新美術館開館10周年記念ウィーク」特別プログラム

- 開催日時：2017年1月29日(日)13:00~17:00
- 参加者：19名 ●対象：中学生以上
- 参加費：無料
- 場所：別館3階多目的ルーム、企画展示室2E
- 材料協力：株式会社ニトムズ

概要

開館10周年記念ビジュアルをデザインしたSPREADを講師に迎え、自分のこれからの10年を想像しながら、一年一年を色と形で表したポスターを制作するワークショップを行いました。



プログラムの流れ

- 1 5分
- 2 15分
- 3 20分
- 4 45分
- 5 100分
- 6 50分

講師紹介

開館10周年記念ウィークの特別プログラムとして開催された今回のワークショップの講師は、10周年記念ビジュアルをデザインしたSPREADの小林弘和さんと山田春奈さんです。

レクチャー

はじめに、SPREADの活動やデザインに対する考えについて、お話を聞きました。

ウォーミングアップ

参加者とスタッフ全員で「今日の色と形」を想像するウォーミングアップをしました。まずは、10色の10周年記念ポスターから、自分の今日の色を選びます。「美術館にある木々を見て、夏ならもっと緑があるだろうと思ったから緑色にしました」、「今日は少し疲れているので穏やかな色を選びました」など、選ぶ色も理由も一人一人違います。次に、床にテープで描かれた「一」「十」「△」「□」の中から、今日の気持ちがどの形かを考えました。①

「19th DOMANI・明日展」を鑑賞

次のテーマは「明日の色と形」です。開催中の「DOMANI・明日展」の会場へ行き、たくさんの作品の中から、自分が気になる色と形を探しました。その後、参加者は3,4人のグループに分かれて、展示室で撮ってきた写真や図録を見せながら、見つけた色と形について語り合いました。②

ポスター制作

いよいよ未来の10年を表現したポスターの制作です。制作に使用するのは、10周年記念ポスターの色を除いた文字部分のみを印刷した台紙と、32色の和紙テープ。現在から10年後まで、自分の生活や自分を取り巻く世界がどのように変わっていくかを想像しながら、その時の色と形を考え、台紙にテープを切り貼りしていきます。ウォーミングアップを通じて、自分の気持ちを色と形に置き換えることに慣れてきた様子の参加者たちは、テープの色を吟味しながら、これから訪れる10年を台紙の上に作り上げていきました。③④

発表

最後に、参加者全員のポスターを貼り出し、それぞれのポスターに表現した10年について語りました。将来の学生生活の目標を掲げた一枚や、定年後の新たな挑戦を見据えた一枚、人工知能の発達による世界の変容を予測した一枚など、作った人の年齢や生活、関心を持っている事柄を映し出したポスターは、多様性に満ちたものとなりました。⑤



クリエイティブ・ユニット
SPREAD
(スプレッド)

講師

小林弘和と山田春奈によるクリエイティブ・ユニット。環境・生物・物・時間・歴史・色・文字、あらゆる記憶を取り入れ「SPREAD=広げる」を生み出す。主な仕事に、貼ってはがせる空間装飾ツール「HARU stuck-on design」、工場見学イベント「燕三条 工場の祭典」、CDジャケット「相対性理論/正しい相対性理論」、「萩原精肉店」VIなど。2004年より、生活の記録をストライプ模様で表す「Life Stripe」を発表して注目を集め、スパイラルガーデン(東京、2012年)、ミラノフォリサローネ(イタリア、2012年~)、Rappaz Museum(スイス、2014年)などで個展を開催。国立新美術館開館10周年記念ビジュアルのデザインを手掛ける。

まとめ

「開館10周年の節目に、過去ではなく未来を考えるプログラムを実施したい」という意図から、このワークショップは企画されました。開催告知にも「自分の未来についてじっくり考える」という言葉を盛り込んだためか、参加者たちは最初から、未来の10年間を想像することへの意気込みを持って、このプログラムに取り組んでいました。ウォーミングアップを通じて、色と形に対する感覚を開放した参加者たちは、5年後や10年後に想像を馳せながら、自分の人生に結び付いた色と形で10年間を表現しました。参加した19人にとっては、未来について改めて考える機会となるとともに、自分と色や形との関係性を見つめ直すきっかけともなったようです。ワークショップ終了後、参加者が制作したポスターは地下1階休憩コーナーで展示・公開されました。(NY)

参加者の感想

- 今後の10年を考えるよい機会になりました。また、色と形で表現することにより、より具体的なイメージをすることができました。最後に色々な方の考えを聞くことができ、大変楽しかったです。(40代男性)
- 年代も様々な皆さんの想像力にふれて、すごく刺激を受けました。見える世界が、少し変わりそうです。(10代女性/高校生)
- 同じテーマであっても、10人いれば10通りの違うものが出てくるのが新鮮でした。(30代女性)

材料

- 開館10周年記念ポスター(文字部分のみをB2判ラミネート加工印刷したもの)
- 和紙テープ(15cm幅、60cm幅/各32色)
- 下書き用紙・鉛筆・油性ペン・剥離紙
- はさみ・定規・カッター・カッターマット

エッセイ

ふわふわおえかき プッシュしてポヨン!

開発好明

- ㊤ 野ダテ○△□ ~掛け軸に描いて、お茶室で鑑賞しよう!~ (2012年)
㊦ はじめてのアート ふわふわおえかき プッシュしてポヨン! (2015年)

美術館としても、パブリックスペースを会場とした初めての未就学児対象のワークショップとお聞きして、どんなワークショップがふさわしいのか当時色々考えてみました。僕にとって、物作りは個人的な世界に飛び込むためのもので、可能な限り大人の介入のないワークショップを作りたいと普段は思っています。それは、自身の幼少の頃大人に覗かれると、褒められるもしくは貶される事にビクビクして手が止まってしまうていたからです。なのですが、多くのワークショップを経験するにつけ、親子の関係性を無視できないようになってきました。見ていると、多くの子どもや親は制作過程でコミュニケーションを図りたいし、それが自然なように思えてきました。逆に言えば僕のような子どもは少数派だったのかもしれませんが、なので、最初は親子でできるワークショップを考えました。親がストーリーを作り、子どもがその言葉に合う景色を描き、最後に紙芝居のように読み上げながら発表する感じのアイデアでした。一旦はその方向で話が進んだのですが、手を使わない風船を使ったワークショップをお伝えすると、一気にそちらの方向へ話が進んでいきました。

「プッシュしてポヨン」は、身体と筆という関係にヘリウムの入った風船を間に入れる事で、体得した技術が失われます。それは単純に上手い下手という解釈が大人も子どもも失われるという事です。館内には大きな紙を用意して頂いて、まずは上にぼよんして持ち上げ、絵の具のついた筆先が地面に着き、点を描きます。次には風船を前にプッシュして線を描きます。これが基本的な動作になり、あとは時間内で紙の上で不自由なこの新しい道具を使って自由に描いてもらいました。親子で向き合っ、描く物を決めてどうにかこうにか描いてみる事をしたり、風景を描こうとテーマを決めて景色を描いてみたりしました。

未就学児にとって、工作はまだまだ苦手な部分だと思います、テープを切ったり、はさみを使ったり。そんな彼らに負担なく、思うがままに手や体を動かす事ができる装置が今回使ったヘリウムの風船です。このようなワークショップから、美術に触れたり初めての経験をしてもらう事も大きいのですが、親も子どもも評価の尺度を持ちにくいワークショップを行う事で、親が子にかけられる言葉も「いいね、上手だね」から「高くあがったね、長い線だね」と評価とは違う言葉に自然となります。

私は美術(描く、作る)は本来嫌いになるものではないと考えています。ですが統計によれば大人になると半数以上が描く事が嫌いになってしまうそうです。それは、評価や比較によって自分が劣っていると感じてしまうからなのだと思います。また嫌いになる原因に、思ったように描けない自分自信が嫌になってしまうとも聞きます。それは自己批評もあるのですが、周りの写実主義の影響から来るものではないかと考えられます。私が、ワークショップで人と接する時、今後も大切にしていきたい事は、評価しない事、楽しんでもらう事。そして少しでもそのワークショップに潜んでいる意味を感じてもらえたらと思っています。学校以外の美術館で行うワークショップの意義は個々の子ども達を評価しないで体験の場を作れるという事だと思います。

2014年「2.5D 着られるイラスト バレエ・リュス ペーパーチュニックコレクション2014」ワークショップ後記

高木陽子

- ㊨ 2.5D 着られるイラスト バレエ・リュスペーパーチュニックコレクション2014 (2014年)

私は、文化学園大学で、英語でファッション制作と理論を学ぶ修士課程グローバルファッション専修を運営しています。ここには、世界各国から、グローバルに活躍したい学生が集まっています。この5年間に受け入れた学生の国籍は13カ国。日本のファッション界では、製造工程が海外に移り、産業の空洞化が問題となっていますが、ファッション文化創造の地“東京”の存在感は、むしろ高まっているようです。

フランス語でロシア・バレエを意味する「バレエ・リュス」の最初の公演(1909年)は、斬新な舞踏と音楽と衣装と舞台美術で西欧を熱狂させ、芸術家やファッションデザイナーに大きな影響を与えました。辺境の地と考えられていたロシア発祥のバレエ団が、文化の中心地パリを揺すぶったのです。

バレエ・リュス展関連ワークショップの依頼を受けたとき、3期生の修士学生(英国人2名、台湾人、インド人)やブラジル人の博士課程学生を巻き込み、異文化との接触によって創造性を高めるような企画ができないかと考えました。

1910~20年頃のパリでは、ターバンやチュニック、シェヘラザード風パンツなどバレエ・リュスの演目に由来するファッションが流行しました。その後も今世紀に至るまで、バレエ・リュスを発想源とする斬新なコレクションは繰り返し現れています。

そこで、このワークショップでは、ファッションブランドの制作を仮定し、リーダーの外国人学生と参加者4~5人一組のチームが、バレエ・リュス展をヒントに、膝丈ワンピースのチュニックのコレクションを作ることにしました。一人一役を担当し、ブランドコンセプトに沿ったひとまとまりのコレクションとして発表、フォトシューティングまで行います。

創造性を高めるため、幾つかの仕組みを組み込みました。まず、日常の社会的役割や肩書きから解放され、自由で平等なコミュニケーションを可能にするため、参加者にはロシア風の名前を選び、その名前で呼び合ってもらいました。10歳代から60歳代までの参加者が、面白がってくださいました。「面白い」環境づくりは、創造性を高める最も重要なファクターだと考えます。

コレクション作りは、創造行為をチャレンジングにするための一種のルールでした。一人一役の制作では自律性が担保されるが、全体として統一感とバリエーションのバランスを取るため、他者との関係性の構築が求められるのです。初対面のチームメンバーやリーダーの意向を探り、全体をより良くするために自分がやりたい事とやるべき事のバランスを取る。参加者は、言葉の壁をこえて次第に理解し合い一つのものを作り上げる喜びを発見してくれたようです。

絵はお教室で描くもの？ とんでもない！

堂本右美

⑤ はじめてのアート 絵描きさんといっしょに、描く、つくる！(2014年)

今回のワークショップは子ども向けと称して、実は大人向けであったことにお気づきだったでしょうか。お教室に行けば何か教えてもらえる、絵が上手になると期待して参加された親御さんはガッカリされたことでしょう。子ども達は放っておいても自由に楽しく絵を描くのですから何も指導することはありません。私はただ、自由に絵を描ける環境を与えました。その結果、子ども達は解き放たれました。生き生きとした目で絵の具と戯れました。絵は上手になるどころか、いつもより下手になったでしょう(笑)。一種の赤ちゃん返りが起きたからです。しかし、お子さんにはそんな自由な環境が必要だということを大人のみなさんに感じていただきたかったです。

テーマは決めず自由に絵を描く。細かい線が描けるようなクレヨンや色鉛筆は避け、親指大位の太い筆とボスターカラー5色のみ用意しました。細かく書き込めない分、絵の具の質感に心を向けられるようになり、色を混ぜる楽しみ、新しい色を作る喜びを覚えます。大人には闇雲に色を混ぜたり濁したり、終いにはグレーに塗りつぶしたようにしか見えないかもしれません。しかし子ども達はその一つ一つの工程の中に劇的なドラマを見ているのです。上手く描こう、完成させよう、とは考えてもいません。時には子ども達の心を映し出し、時には自分の感情を打ち込んでいるのです。それが分からない大人の方が想像力に欠けていると自覚したほうがよさそうです。

絵の具の他にも、家の中に転がっているスクラップを用意しました。大人にはゴミにしか見えないものでも、生活に密着しているものには愛着があり、子ども達の想像力を掻き立てます。また自ら生活の中でモチーフを探したり見つけたりすることも大きな喜びとなります。それらを自由に貼り付けたり色を塗ったりして楽しみました。

このような純粋な「絵の楽しみ」を知ることは、とても大切だと私は考えます。そのうちにもっと具体的に描きたいものが出てきたらそれを描くことに集中すれば良いのです。次に大事なことは、その子が描こうとしているものは他でもない、その子の心の中にだけ存在する唯一無二の「それ」であることを忘れてはならないということです。例えば、富士山の絵を描いた子がいました。すごいねえ。どんな富士山なの？と聞くと「〇〇公園から帰る時に見えるんだ」と話してくれました。やはりその子の情景があるのです。仮にその子が上手く描けないと助けを求めてきたら、その子の思い描いている情景を引き出す手伝いをしてあげましょう。決してお手本を描いてはイケません。また、その富士山の手前には何があるのかなあ？などと誘導尋問をするのは以ての外です。どちらもその時点で子どもは自分の世界ではなく親の世界を見始めるからです。

「自由に描いて」と言われて戸惑う子どもも多く見受けられました。生活のリズムがきっちり決められていたり、何事も「指導」されて「やる」ことに慣れきっているお子さんが多いですね。そういう子どもは好きにしたいと言われると何をしても良いかわからなくて、親の顔を見る。そうすると親があれを描けば？などとまた余計な誘導する。

放っておきましょうよ。何もすることがない時間、場所をたっぷり与えましょう。そしていつでも絵が描ける場所を作ってあげてください。そんな環境こそがその子を形成する上でとても大事なのです。そして子どもが話しかけてきたら耳を傾けて心を寄せてあげるだけでいいのです。しかしこれがやってみると結構難しい。でもがんばってください。きっと真の成長に繋がるものと信じます。

伝えたいことは山ほどありましたが、私の説教なんかより、「人の振り見て我が身を知る」ではありませんが、たくさんの方々に参加していただくことで、互に見えたことがいろいろあったのではないかと推察しています。スタッフのみなさまもお疲れ様でした。私自身にとっても、いろいろ学ぶこと多き機会に恵まれたことに感謝しています。お招きいただきまして、ありがとうございました。

気付きと開きが起こる

SPREAD 山田春奈 小林弘和

④ Life Type ライフタイプ—じぶん・ひと 知り合うデザイン(2015年)

⑥ Next 10 years ~色と形でデザインするわたしの未来~(2017年)

私たちは国立新美術館にて2015年6月と2017年1月に2つのワークショップコンテンツを行った。1回目の2015年、実は3年ぶりの日本での本格的なワークショップ開催となった。それは、2011年3月の東日本大震災後に私たちはワークショップの可能性と共に大きな問題点を体感しワークショップを実施できなくなってしまっていたためである。問題点とは大きく2つ。プログラムを取り巻く環境づくりと数あるショートタイムの簡単ものづくり体験の蔓延。私たちの考えるワークショップは、単なるものづくりではなく(ものは必ずしもつくらなくてよい)、そのプログラムを通して新たな思考の広がりや感覚の開きがある「体験」だ。このためには、成熟したプログラムであることはもちろんのこと、参加者が余計な情報を持ち込まず集中できる環境をつくり、少しずつ開く感覚の扉のストッパーにならないことが必要だ。たとえプログラムがどんなに素晴らしくとも環境づくりが出来なければ、外部からの影響で全体がとんでもなく崩れてしまう。ショートタイムのものづくり体験を否定するわけではないが、現代の社会において「ワークショップ」という言葉のほとんどが、直ぐにできる簡単ものづくり体験を意味するようになっており、じっくりと時間をかけるプログラムを行えるしくみがない状況を感じていた。ただし、年に数回訪れている欧州では少し違う感覚を感じていた。彼らは日常から「謎」のようなものを比較的キープして時間をかけて議論を行っている。ワークショップについても何やら正体のわからないことを題材に行動や思考する時間を楽しむことができていた。そこで、私たちはワークショップの活動を欧州から再開することにした。ミラノ大学とサンマリノ大学で一週間にわたるプログラム、つづいてミラノサローネでのプログラムを開催。参加者は感覚が豊かになる実に深い経験だと喜び(イタリア人のポジティブさも相まって)、自信につながる経験を得ることができた。また、素晴らしく構築されたワークショップを行っている阿部雅世さんとの出会いも前進できるきっかけとなっている。これらの経験から、ようやく実現できたのが国立新美術館での1回目のワークショップだ。これまでの美術館のワークショップの開催経緯や考え方を聞き、私たちは自分たちが実現したかったことができると予感したのだ。入念に検討し準備してきた2つのプログラムは、不安と確信を同居させながら当日のプログラムを迎え、プログラム終了時には確信だけが残る結果となった。美的感性ともものづくりのプロセスを通じて気付きと開きが起こる。そして、その由縁を自身で考察し他者と共有し、また再考察し未来に投げ掛ける。1回目の「Life Type ライフタイプ—じぶん・ひと 知り合うデザイン」、2回目の「Next 10 years ~色と形でデザインする わたしの未来~」、プログラムは違えど参加者に体験してもらいたかったことはプロセスの中で生じるこのようなことだ。2回目のワークショップでは館内で開催中の「DOMANI・明日展」の中に入り込み作品を眺め「色と形」をみつけるというウォーミングアップも行った。参加者はより自由な思考で意見し想像を広げることができた。このように美術館で開催されている展示空間も利用して行える環境は、体験をより広げられることであり魅力的である。また、美術館という施設の特性を活かし、両プログラムともにワークショップで制作した成果物を展示し公開した。意外なことにこれまで行われていなかったが、展覧会として公に開くことはとても大きい成果でもある。今後も美術館の特性を活かした活動をぜひとも続けてほしいと思う。日本で最多の来場者を記録する国立新美術館、この美術館が主催するワークショッププログラムがこれからも信念を貫き継続してあり続けることは、日本のクリエイティブをとりまく社会においてとても重要なことだと信じている。

鉄・形・音 手と目と耳を結ぶ

金沢健一

⑨ 鉄・形・音 手と目と耳を結ぶ(2016年)

工業製品として規格化された鉄板は私の作品の出発点である。製造過程の熱による表面の黒い酸化膜は、工業製品の直線的な形状に、物質の意志とも呼べる存在感を与える。そのような鉄の形状や質を生かしながら、私は「構成」という手法をとおして鉄という物質の存在や空間との関わりを探ってきた。1987年、作曲家の吉村弘さんとの出会いは私の鉄の作品にもう一つの道を開いた。彼の企画する展覧会「サウンドガーデン」の参加をきっかけに様々な形に溶断された鉄片の中に音を発見する作品《音のかけら》の制作を始めた。その制作の中で、私は形に音を聴き、音に形を見出すことに引き込まれていった。音の振動は体を動かし、触覚的な行為や音を出す道具の違いによって、鉄に潜む様々な音色を発見することになった。鉄が作り出す形と音の世界の中で、私の手と目と耳は結ばれていった。ギャラリートークやワークショップなどの美術館の啓蒙活動が盛んになる1990年代後半、美術館の企画展への出品と同時にワークショップを依頼されることが多くなった。私はそれらを作家活動の一環として、積極的に実践してきた。《音のかけら》が参加体験型として観客の参加により成立する作品であり、作品自体の在り方がワークショップに繋がった。私のワークショップは私自身が作品制作のなかで経験してきたこと、思考してきたことの追体験であろう。素材や形や音、美術と音楽の関わりなど、どのように伝え、実践したら良いのか、試行錯誤しながらワークショップを幾度となく行ってきた。2006年から2010年にかけて地元川越市立美術館で開催した「金沢健一 音のかけらとワークショップ展」では、私自身の他に音楽家や身体表現のアーティストとの共同作業による実験的なワークショップを行い、毎回その活動内容や反省点を報告書にまとめあげた。成功や失敗を含めその蓄積はその後のワークショップ活動の下地となった。

ワークショップ「鉄・形・音 手と目と耳を結ぶ」では、今までの経験や蓄積を元にワークショップの内容を考えた。美術館の管理上、普段、私が行っている溶断による《音のかけら》の制作はできなかったが、過去に制作した作品を持ち込むことで対処した。午前中は鉄の重さや質感を体感し、音を出すこと、聴くことに集中した。午後は《音のかけら》による即興演奏のためのトレーニングとしてクレパスによるドローイングから始めた。何かのイメージを描くのではなく、手とクレパスと紙との触覚的な関わりから強弱、速度、質の違う線を引く。さらに2人で向かい合い1枚のドローイングを交互に、そして同時に描きあった。このようなドローイングを音の表現に繋げようと考えた。また参加者どうしのコミュニケーションもそれまでの緊張感が解け、一つにまとまっていき、次のプログラムへの良い橋渡しとなった。最後にここまでの経験をもとに一人ずつ即興演奏を試み、まとめとしてリズムパターンを重ねていくミニマルミュージックの手法を用い、3~4人のグループで、さらに全員で演奏を行い、大団円を迎えた。

徐々に充実感や喜びを感じるワークショップであった。自分にとって、些かマンネリ気味であったワークショップだがこのような気持ちにさせくれたのは何であったのだろうか。ワークショップの内容、参加者の好奇心や情熱、ワークショップを行う空間、参加者の人数、年齢層、互いを認め合う心など、様々な要素がワークショップを共有する空気を形成する。そのような空気が同じプログラムであっても結果の良し悪しに大きく反映する。午前中の緊張感を伴った音出しから午後のドローイング、最後の大団円の演奏まで、個々のプログラムがうまく連動しあい、参加者全員の共有感が徐々に作り出されていった。毎回、新たな参加者と出会い、ワークショップという形態の中でいろいろな問題を実践することは、私にとって作品を生みだしてゆくことと同じような意味を持つ。今後も作家活動の一環としてワークショップは重要な位置を占めてゆくだろう。ワークショップの滞りのない進行と事前の打ち合わせや準備などサポートしていただいた美術館のスタッフの方々の協力を感謝したい。

恐怖

関口光太郎

⑩ 新聞紙とガムテープのアートを体験しよう!(2016年)

ワークショップは恐怖である! 不確定要素が多い。普段わしは、特別支援学校の先生として授業しているけど、その場合、その日どんなメンバーを相手にするか、あらかじめ分かっているわけだ。みんなの趣味も、得意なことも知っている。一緒に手伝ってくれる人のことも、その場所の使い勝手も、全部分かっている。しかしワークショップは、どんな方が来てくれるか、その日その瞬間になってみないと分からない! ましてや、新しい活動を取り入れようとする時など、一日がどう転ぶか、もう予想もつかない。細かいことを言えば、天気や、気圧や、時間帯にだっ、お客さんの様子は左右されるものだ。沸き上がる様々な不安!

ではなぜ、わしはワークショップをするのか。

自分の作品をつくる時、わしはいつも自分の世界に籠もる。普段、曲がりなりにも社会人として周囲に合わせ、バランスを取り、奥さんや娘のご機嫌を伺い、生きているわけだが、作品制作だけは別。自分の独裁が行き届く、わしだけの独裁国に籠城。しかし、ある時気付いたのだ、わしのやっている、新聞紙×ガムテープアートは、一人でも楽しいけど、みんなとやると、もっと楽しい。実際にやってみてもらった方が、伝わるのだ。身近なものがアート作品になる驚き、平面から立体が生み出される楽しさ。

それに、実は、大学で彫刻を学んでいたとき、一抹の後ろめたさを抱いていた。彫刻や絵画は、作品を飾っておけば、それで発表として成り立つ。お客さんからの、作品への反応を、自分の体で受け止めなくて良いのだ。その場にいらなくてよい。対して、ミュージシャンとか、役者とか、ダンサーは、自分が何かすることが発表だから、反応を直に受け止めなくてはならないよね? 中には、「つまらん!」とか、「良くない!」という反応もあるはず。そういうのまで全部受け止めて、それでもやるって、すごいな、かっこいいなと思っていた。彫刻はそうじゃないから、自分の学んでいることは、ちょっとずるいな。そういう意味で、ワークショップは、わしの罪悪感を相殺してくれるものだった。新聞紙×ガムテープアートが、面白いが、面白くないか! ひいては、関口光太郎という人間はどうか! その場で結果が出て、わしはそれを受け止めるのだ。

なのでわしは、恐怖を乗り越えなければならない。何らかの抵抗感を乗り越えてやったことに、人を感動させる可能性が宿るのだと思う。

まあ、その意味では、今回のワークショップは、わしにとってわりと見通しの持ちやすい、手堅めのメニューだったかもしれない。またの機会があれば、もっと何が起るかわからない、ものすごい冒険をしてみたいな…恐怖も半端じゃないだろうけど!

ワークショップを担当した国立新美術館スタッフ
(五十音順、退職者含む*)

井上絵美子*
木内祐子*
澤田将哉
鳥居 茜*
西野華子*
真住貴子
南 雄介
本橋弥生
吉澤菜摘
渡部名祐子

インターン
門馬英美(平成21、22年度)
浅井 慧(平成22、23年度)
高須咲恵(平成23年度)
津田紘子(平成23年度)
立花由美子(平成24、25年度)
樋口菜呂奈(平成24、25年度)
佐藤詩織(平成26、27年度)
竹ノ下彩香(平成27、28年度)
森崎由衣(平成27、28年度)
高橋梨佳(平成28年度)

Canon

国立新美術館の教育普及活動は、キヤノン株式会社より御支援いただいています。

やってみよう、アート

国立新美術館ワークショップ記録集 2011年4月ー2017年1月

編 集 国立新美術館 教育普及室
真住貴子(教育普及室長・主任研究員)
吉澤菜摘(アソシエイトフェロー)
渡部名祐子(研究補佐員)
澤田将哉(研究補佐員)

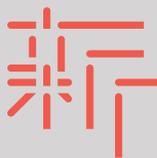
デザイン 大島武宜(表紙)
デザインオフィス・スパイク株式会社(本文)

制 作 能登印刷株式会社

発 行 国立新美術館
〒106-8558 東京都港区六本木7-22-2

発 行 日 2017年3月30日

©2017 国立新美術館



THE NATIONAL
ART CENTER, TOKYO

国立新美術館